白を踊れ

島さち子

白を踊れ

装画

島　さち子

白を踊れ

――第1部――

1　誰？

わたしの部屋のドアに身体をもたせかけ、前のめりに女がいる。女の腕がインターホンにのびて、押す指がはずむ。頭がさがり額がドアに打ちつけられ、こすりつけられる。右足の靴先がコンクリートの床をたたき、腕がさがる。女は、はっとしたように全身をくねらせ、ずり落ちた上体をせり上げ、身体を立て直すと、

――――赤池エマさん、エマさん……。

と呼びつづける。

後ろ姿に見覚えはある。水色のブラウスとプリーツスカート、いつかと同じだ。ボーリング場で……。

いまわたしは部屋のなかではなく、女の後ろにいるのだ。軽く背をたたく、女は振り向くが、息が乱れ口がきけない、大変な汗だ。

――――気分がお悪いの？

わたしは女の顔をのぞき込む。女からは穏やかな熱がくるだけだ。

――――なにかご用なのかしら？

女は無言のまま、わたしの入ろうとする部屋の中に倒れ込んでしまう。

――――ごめんなさい、ちょっとだけ、休ませて、胸が苦しい……すぐよくなりますから。ええ、いつまでも此処にへばりついてなんかいない。背骨がもう、ばらばら、ぽきぽき折れているんです。

――――まさか？　そんな……。

わたしは仰天している。女はソファの上にくずおれたまま、つやつやとした瞼の下に眼をなかば隠している。

――――異常気象で、気温が上がっているから、わたしも熱っぽいみたい。冬に向かって引き締めた毛穴が、もう開くのは嫌って、身体のなかに熱を閉じ込めているのよ。上着を脱いで、楽になさったらなおるでしょう。長くは困るけど、少しくらいなら……。

青い縁取りのある白いガウンを女にかぶせる。女はその下でブラジャーをゆるめ終わる。わたしの部屋のまんなかに浮かんだ大きな白い鳥だ。

――――……熱が天井に向かって吹きだしているでしょう。ときどき、突然倒れそうになるんです……もうちょっとだけ、休ませて下さる……すぐ……なんとか……ほんとに……。

女はソファに寝ていても、なお体を支えることができなというように、呼吸と一緒に大げさな上下動をしている。

喉をうるおし終わり、女が掛けてあるガウンを持ち上げると、湯気がポゥポゥ揺れながら部屋中に広がっていくようだ。飲み終わった、からのコップを差し出すが、わたしが受け取る寸前、女は力を失ってしまう。

割れている。やわらかい音だったのに……。わたしはコップのかけらを集めて、女の目の前に山盛りにする。山盛りのガラスかけの中に、眼と鼻の大きい何人かがいる。

どうしよう、腕時計を見る。もう出発しなければならない時間なのだが……。わたしは洗濯用のハンガーから取り込んだばかりのハンカチをたたむ。細い縁飾りがよじれて菱形になって伸びないのがある。両手で押さえて伸ばし、手刀をきるように折り目をたたき、たたいた手をひるがえしてハンカチをたたむ。

女の横顔が硬い。親切にしすぎたような後悔がくる。友人でも知人でもなく、この女に好意やあこがれを持っているわけでもないし、このように煩わされる覚えはない……、という思いを込

めた畳み方があるとしたら、これだ！
あの時は災難だった。ボーリング場の隣のレーンにいただけのことで、救急病院にまで付き添わされてしまったのだから。赤い丸薬を一日何十錠も飲むと話していた……。
――わたし、旅行に出掛けるところなのよ……時間がないから、アイロンもかけずに、手早く、十二枚目のハンカチをたたんだところ。なにしろ異常気象だから、持っていくものの見当がつかなくて、夏ものから冬物まで、こんなに……。
デパートからさっき買って来たばかりの下着を、紙袋からとりだし、素早く旅行鞄に移し替え、笑いながら叩いてみせる。
――もうすぐ、旅立つのよ。
女はソファの背に腕をまわし、起き上がろうとするが、胸を押さえて、えびの形に全身を引き寄せる。
――もうすぐ旅たつのよ。ほうら、冷たいでしょう、気持ちいい。そう、なら、すぐよくなると思うわ。そしたら病院に早くいらっしゃい。行けないなら、救急車を呼ぶ？
氷を包んだタオルをじぐざぐ女の額の上で動かしてみる。
――あなた、お友だちは？　携帯でお電話したらどうかしら……。
わたしは言ってしまう。追い立てることは悩みだ、後味の悪い思いを残す、しかしこの女のために旅行を後回しにする気はない。

――――ご出発の時間なんでしょう？
――――そうなの。
言葉が言葉に飛びつく。
――――息苦しくて、体中が、どよめいているのよ。わたしに、とてつもない大きな尻尾があって、背骨が熱くて重い。わたしの中が泣き声で一杯になるの。
――――わたしもよ。わたしも、どよめきがいっぱい。角の生えた頭がかたい。わたしの場合、どよめきはいつも一定ではなくて、いくつもの、どよめきの比率が変化するのよ。
いま網目のように高まる音がある。どよめきから逃れるためには、歩き出すか、耳を破るしかない。
――――不協和音や咆哮のないところ、どよめきのぴたりと消える土地へいきたいのよ。
旅行に出るというわたしに対する敵意みたいなもので、この女は起き上がらないのかもしれない。女が少し動く。寝たまま自分のバッグを引き寄せる。
――――あのとき、保険証をお借りしたのに、そのままになって……、お返ししようと思ってお寄りしたのよ。
わたしは、すっかり忘れていた。そう、あのときは災難だった。病院まで付き添って行って、帰ろうとするわたしの耳に、この女は、保険証を貸して！　と囁いたのだ。
――――そうだったの。いいのよ、わたしはもう退職届を出したのだし、会社とのあいまいなか

かわりが嫌なの。いずれ会社に返さなければならないのでしょうけど、辞めても三年間は使えるのよ、使えるうちにつかわなければ損なんだから……。わたしも、やっと自由になれたわ。近いうちに退職金という大金も手に入ることだし……あら、わたしにとって大金という意味よ……。だから自由に、北から南まで、行きたい方向へ旅してみるつもり。この国にだって、蜃気楼やオーロラの見えるところがあってもよさそうに思えるもの。砂漠のバラも見てみたいわ。どう、ご気分、少しはよくなったかしら？……あの……あなたには、ご家族とか、お友だちとか、ご親戚とか、いう方はいらっしゃらないの？　いいえ、別に迷惑だといっているんじゃないのよ、でも……。

女は頼りなげになる。首を横に振る。

――でも、すぐよくなりますから。いまひとりで歩き出す自信がないだけ、もうちょっとだけ休ませてください。

――誰も……ひとりも？　そう！　わたしも似たようなものだけど……。

――犬なら、……犬ならいましたけど……。

窓は開け放たれている。戸締りをし、エアコンをいれる。しかし、カーテンまで引く気にはなれない。ベージュ色のブラウスの袖を折って半袖にしてみる。焦げ茶のスラックスの太いベルトを一穴きつく締め直した。

女はとがった鼻越えの向こうの片目でわたしを見ている、それは健康に嫉妬を燃やしての横着

とも思える。わたしが見ているから女は向きを変える。両膝が高い山になり、女の顔が見えなくなる。

――もう、旅立つ時間なんでしょう？

――ええ、すぐ。

――さっきまで真っ赤に燃えていた背骨が、いま緑色になったところよ。すぐに、もとの灰色に戻るとおもいます。

一体どこが悪いのだろう？　何故骨にこだわる？　表現がオーバーだからと言って責める気はない。感性の問題なのだから……。五分……十分……。女は住み慣れた世界にゆったりといるようだ。

これでは仕方がない。何百キロか何千キロか……旅行可能な切符があるのだ。テーブルの上にキーホルダーから抜き取った部屋の鍵をおく。電話を移動させる。

――悪いけど、ごめんなさい、でも出かけます。そんなにつらいなら、よくなるまで、あなたの部屋みたいに、わたしの部屋でないみたいに、ここにいらしてもよろしいけど……一時間？二時間も？

女は黙ったまま身動きもしない。この女は現在がゆっくりと回転するのを息をひそめて待っているのかもしれない。運を天にまかせる。わたしは、しめくくりのように、ピアノの蓋をしめる。

――ビィーン―ンンン……

音が震える。お留守番しているのよ。戻ってくるから、必ず！
ショルダーバッグを肩にかけ、旅行鞄をぶら下げる。重い。わたしはくったくなさそうな靴音をたてる。
階下に降りると靴音はすぐにシュウッと街の騒音のなかに吸い込まれる。
念のため、管理人室に立ち寄ってはみるが、管理人の姿はない。

まだ盛夏ほどに繁っている並木の枝を男達が払っている。なぜかあの女が目の前で黒髪を切り落とされていくような気がする。肥料を入れ、霜よけの着物を着せ、冬を迎える用意をしている。切り落とされたばかりの木の切り口はまだ青臭く霜よけの藁がなじまない。
十一月だというのに気温は２６℃、すれ違う男の顔の上に蝋の溶けたような、とろりとしたものが流れて伸びたり縮んだりする。わたしの顔にも同じものが浮いているのだろう。みんなお化け鏡に映したみたいだ。
……わたしの部屋に、あの女が一人いて、タンスの抽出しが一つ開けっ放しになっている、中身がはみ出している。一つでなく、幾つかの抽出しが出たり入ったりする。古い日記や破った楽譜がある。あの女にわたしがどんな人間であるか一方的にわかってしまう……。
足は駅に向かい、歩くリズムにとらえられて、もう引き返せない。手は汗ばんでくるが、わたしに旅行鞄を持ち替える余裕はない。

あの女に盗癖はないだろうか？　わたしの音が言葉が盗まれてしまう。わたしの回りが揺れはじめる。歩くに従って周囲の揺れ方が大きくなり、もう道路まで！
わたしはバランスをとることが出来なくてふらふらする。道路はもう、綱一本になって縄跳びをしている。

2　死の家

トンネルの一つ一つで気温が確実に下がっていく。見回すとこの車両に、口を開けて眠る客はなく、みんな長距離列車を部分的に利用しては降りていく人々らしい。向かい合う椅子は硬く固定しているのに、その上の人間だけが車両の振動のままに、ついたり離れたりする。
体を三つ折にして腰掛けている若い男は、膝をせり出してわたしの膝と膝の間に狙いをつける。わたしはそれを避けて移動し、足を組み車窓にぴったり体を寄せる。車両は次々つながりを切って後方にはね飛んでいき、いつも次に後方にはね飛ぶ番はこの車両だ。
北上する。また一つトンネルをぬけ、一挙に寒さがきて重ね着をする。

車窓に白いものが舞う、見上げると空は黒点に覆われている。
――このあたりは、二三年暖冬れございまして、雪はほとんろ、降らなかったんれございますよ。
隣に掛けている老婦人はわたしに向かって話しかける。
――まら、十一月のはじめれすのに……。
人々は顔を窓に押しつける。ら行が気がかりになる。気づかずにいたが、もうすぐあの町に入っていくのかもしれない。眠りこけたまま、素通りするという意識さえもたずに通り過ぎるつもりだった故郷の町。もう空の底が抜けたとしか思いようがない。身震いし、旅行鞄の中から、セーターとダウンコートを取り出して更に着込む。
車掌が車両を行ったり来たりし、乗客の凍死寸前、列車の暖房が入っている。
列車は通過まちして、止まったり、走ったりまた止まったりする、降雪。架線事故。列車はぴたりとこの駅に停止してもう動かなくなる。列車の立往生した駅が、この駅だという皮肉。それはわたし目当ての意地悪に思える。わたしは行きずりの旅人のようにこの町に知らん顔をしている。乗客は先を争って降りはじめる。隣の老婦人が降りようとする。
――いくら待ちなさっても、この先には行けませんれすよ。バスかタクシーれ逆戻りして、支線経由れ行きなされば、なんとか行けるかもしれませんろも……。
――まあ……。

わたしは困憊してしまう。

――――おお……おお……おったまげたなあ。

ひとびとは上を見て驚きの声をあげる。雪はただもうもうとして、空気そのものであるふりをしている。ここに降り立つのは五年ぶりだ。

空全体が発光していて、影絵のように来る雪は上から来ながら、わたしの足を身体ごと持ち上げてもいる。空間のすべてに、無数の雪片がみえ、雪片は大きさを拡大しながら近づいてくる。鼻をかすめる、まつげにふれる。わたしの上にも、ほぼ、人型に厚い雪がフードつきのコートの形に降り積もる。風はほとんどなくなっている。ポトト、ポトット、ポトトト。雪を落としながら背景はどこもかしこも淡い淡いほのめきで満ちているのだ。

地上のすべての尖鋭なものを綿雪がくるみこんでいく。空中とは信じられない途方もない雪波の中をわたしは一人で漂っていく、放心する。ただならぬ雪。放心しているのは、小さなわたしではなく、もっと大きなものだ。

わたしの薄い眉に降り積もった雪が軒のように張り出す。それがあっても、瞬きのたびに熱い目の中で、雪の結晶を際限もなく融かしているのだ。すべてひどく現実離れし、単純化された白い世界だから、おどろおどろしさはない。

自分の視線にからませようとするが、俯いても、わたしは、ただ深々と白く、その実体にとどかない。雪がわたしの体の中を自由に通行しているのではないか。すれ違う人はそれでも前面に

かすかな姿をもっているが、振り向けばもう後姿をもっていない。雪の容積に押されて、空気が逃げる。息苦しくなる。まつ毛をぼさぼさにしたまま、眼を閉じて歩いていく。

足は雪が付着して凍りついていながら、わたしを乗せて、我が家に向かって知り尽くしている道をいくようだ。急に風がくる、滝壷の底に陥ち込んだほどに、ほとばしる水を浴びたような寒さが襲う。体の両脇を吹雪の流線模様が泳いでいき、どこにも触れていないように見える足が、遠くで踏む足をすべらせて難儀している。

人はいない。何人歩いていても、もう人との出会いはなく、ぶつかっても何の挨拶もいらない。ダンプカーでさえ、日頃の傲慢さを失っている、動かない。雪にのろのろ埋まりつつある。乗用車は雪に乗っ取られて乗車している者は見えず、ワイパーが動けなくなって三センチほどの筋を確保するためにピクついている。

街の商店はシャッターをおろし、吹きつけた雪にまぶされて白いが、スーパーマーケットだけは時ならぬ人でごった返している。

みんな雪を着たまま、必死で品物を抱え込んでいる。非常事態なのだ。祖父はそこまで考えつかないでいるだろう。わたしは果物とパックの肉やハムを籠に入れる。缶詰も野菜も、重い、お土産にブランデーも。一言も口をきかずに田舎町でも買い物が出来ることに感動してしまう。着込んだために軽くなった旅行鞄にそれを詰め込み、入らない分はレジ袋に入れる、袋は雪ですぐに真白になってしまう。

重さで旅行鞄が足にまといついて、わたしを空回りさせる。
前を見つめても下を見ても、形をなさない白ばかりが多様に発光する。わたしがこの町に戻っていることは全く目立たないことだ。全部が雪だというのに、雪があるということさえ、架空のこととしてわたしの頭の中から出て行きそうだ。白いなか、花電車のように雪飾りをふるふるさせて車がくる、身をよじり足場を確保して振り向くと、それは一瞬霊柩車に見え、現れると同じように突然、姿を消してしまう。
雪の幕の切れ間、さまざまな形の白いオブジェが透けて見える。わたしは変貌し遂げた見知らぬ街にいるのだ。行きずりの旅人のように、この町に知らん顔をする前に、この町の方がわたしに知らん顔をしていたのだ。
滑る。慌てふためいて、距離や方向を測ろうにも、その尺度がない。わたしはもうこの町に住む祖父の孫娘とはいえないのかも知れない。祖父はこの町に生きていないのかもしれない。靴底で雪をきしませながら歩いても、わたしはこの町に幽霊ほどにも立ち戻っていない。
その家は雪をのせ、雪をまぶして砂糖菓子の城。足が止まる。古びた家がその中身であっても、母屋と客間の、入母屋造りの屋根のそりが二重に、雪をふっくらと載せ、飾り窓には水玉模様に雪をまぶし、雪に美化されてお城に見える。ブザーを押す、誰も出てこない。鍵？　何時もの場所、わたしは雪の中に手を深く突っ込み、門柱の土台のわずかな隙間で鍵をつかむ。
あった、戸を開ける。

わたしは中から倒れてくる者を警戒して尻込みをする。わたしは何時も祖父が死体になっているという予感に打たれる。その死体と無縁でいたくて、ずっとこの家を避けてきたのだ。

わたしがこの家に帰ってこない限り、祖父は健康でもある。わたしがその死体を眼にしない限り、彼は生きているだろう……。広い玄関のたたきに、わたしの振り落とした雪が小山をつくる。祖父を呼んでみる。

――――おじいさま……。

呼びながら、わたしは家中を駆け廻る。一部屋一部屋、死体をさがすように祖父をさがす。仏壇のなか、衝立の後ろやテーブルの下、書棚のかげや押入れの中をのぞいてみる。机の下に足を突っ込む。足にさわるものがあるがそれは祖父ではない。階段の上がり口、明り取りの窓がずっと上にあるが、着雪のためか暗い。照明は切れている？

暗くて見えないのに、足が触れてリズムをもって、その高さを踏みあがる。幼いわたしが笑いをこらえて顔を押し付けてひそんでいる扉、母がいて廊下からわたしを呼びながらくる、母は見つけるまでの時間をわざと遅らせている。

簡単に現在に戻れないほど、わたしは十数年前に醒めている。二階の座敷の障子を開けると、その反動のように、立て掛けられていたらしい襖が折り重なって畳の上に倒れる。祖父はいない。わたしはこの家から遠ざけられていた恐怖をもうすぐ克服し終わることが出来る。

祖父はいないのだ、いないことは死を意味しない。あれほどの年齢、八十八歳で生きつづけて

いることは、少なくともわたしの眼の前では無理な気がする。わたしがここにいないということが、ここで祖父が生きている条件という気がしてならない。わたしの存在そのものが、祖父にとっての不運なのだから。この家の外にいる限り、祖父を助け起こす人物は何処にもいるだろう。人々は彼が倒れたら、病院に運んでくれるだろう。祖父はいたわりを避けて絶対に受け付けないつもりでいるが、みごとな白髪が人々にいたわりを強要しているだろう。

わたしは雪の外に眼をつむる。もしかしたら祖父はいま外出したばかりではないのかも知れない。三十分前、一日前、二ヵ月前、五年前まで、その時間は遡ることができる。祖父との電話はいつも幻聴のように聞き、つぶやきのように話したのだから……。

祖父の机の上に、古い懐中時計があるが動いていない。長いくさり、持ち上げて静かに掌の上に置くと、クサリがばらばらになったように落ちて積もり、何本であるかわからなくなる。それをしばらく手の中で揺すってみる。細片がクサリになって連なり、掌から垂れ下がるまで。

仕事をしていた名残のように、趣味の仕事机の上に彫刻刀が研ぎ澄まされて並んでいる。しかし、もう何年も仕事の名残ばかりだったのかもしれない。廊下に立って庭をみる、雨戸は閉められていない。外はまだ雪が降り止みそうにない。生まれてから一度も経験したことのない降りだが、降るのは何時もそう見えるのかもしれない。降り止みさえすれば十一月の雪は弱々しく消えるはずだが……、この雪の消えることなどあり得ないと、わたしには信じられる。

3　雪ん子

子供が三人、降りで湯玉のように霞みながら、雪玉を作っている。

――――出来上がれば、鉄の玉よりもかとうて、人の頭せえ割ってしまえるのんれすよ！　まあるく、硬く、雪を食わしていくんれす。鉄粉を食わすやつもいるかもね？　なんてったって、アイデアが勝負れさあ。雪を軽く踏んれ、薄く延ばした上に芯をのせ、ゴリリ！　カリリ！　芯が一番ものゆうもん。それはの、絶対に秘密らよ！　ときろき向きを変えながら、靴底で、靴のなかの足の親指をそれに乗せる感じれね、右にキリリと三回、雪を巻き込み、左に三回雪を巻き込んで、強く押し付けながら、玉に雪を食わせていくんれさあ。こんなやりかた、そう、こんな。

――――それだけじゃ勝てんの。少しずつベトを食わすかもね？　ミカンの皮をちぎって食わす手もあるんらよ。白くっちゃあ、やわでは勝てねえれす！　ぶっつけ合うて、玉がパカッと割れてしまうては、らめ！　寒むい日には、三晩も四晩も、外にほったらかしておくんらよ、泥つけて、丈夫そうな色にしたいんらよ！　ふわふわになっては駄目れす。こんなに雪が積もれば嬉しいの！　幾つも幾つも作っておくんれす。それれ、ガーンガーンとやるんれす！

――はっ、はいっと。雪の弾丸れすよ！　欠けてしもうたら、彫って、芯をとりだして、また雪を食わせてやるんれす。変わり玉みてえな中見せて、割れてしまえばもう負けれすよ。技術もあるろも、研究が大切らなあ。強くなりそうなもんは、惜しまんれ、なんれも食わせるのんがコツれすって、じいさまに教えてもろたんれす！

――――どこのおじいさま？

わたしは思わず聞いてしまう。子供たちはそれを無視している。

――――まんまるに、まんまるに、とんがり目をつぶすように、きりきり……、雪を食わしていくんれさあ！

降っている雪に、子供たちは完全に姿を消しながら、際限もなく何かに向かって話しかける。過去からとも、現在からともいいかねる声で、見えない距離を持って白く対しているのだ。

雪に囲まれて、玉の芯は、わたしであるのかもしれない。あるいは祖父かもしれない、地球ごと靴底でこねまわされて、雪を表面に巻きつけているのだ。

二階に上がると、廊下に寒さがわめいている、雪が舞い込む。ガラス戸の大きな一枚が割れ、欠けらが危なくとりついているのだ。軽いひとつひとつの結晶が、無傷でガラスの欠けた隙間をかすめては飛ぶ。ガラスは震えながら欠けらを落とさない。

ここは二階なのに、ガラス戸の向こうを身軽な猫になって通り過ぎる黒い影、それぞれに棒や

網を持って母屋のひさしの上をいく。
――あれえ、女の人がいるよ、こんちわあ、降りますねえ、じいさまはお留守れすかあ。
またも三人。調子のいい子供たちだ。わたしもうっかり挨拶でもしそうになる。
――まあ、バカにするつもり？　ここは道路ではないよ、ここはこの家の屋根の上ですよ、歩いては駄目！　一体どこへいくの？　ここは行く先なんかない、行き止まりの屋根の上なのよ。
子供たちはガラス欠けの穴の中で口をぱくぱくしてみせる。彼らはひさしから、納屋の間を綱渡りするための特別装備をもち、雪を跳ね飛ばしながらいく。見えなくなり、次にはもう前庭に面した客間の上にいて、熟した柿に群がる鳥を追い払っている。柿の実が飛ぶ。
――そこにそうして待っていらっしゃい。
帰る子供たちを引き止める。カメラを持ってくる。わたしだって無防備ではいられない。屋根が傷んだら、損害賠償をとりたてるために、証拠写真を撮っておくのだ。
外は牛乳色、子供たちは粉を口に含んでいて、わたしに向かって吹きかけるようだ。わたしもカメラも白くなる。逆光で黒く汚れた顔が百面相をつくる。わたしが構えると、子供たちはレンズのなかで縮み、記念写真でも撮るように七人並んでよそ行きの笑顔をつくる。
――よく撮ってくらさいよ。
――これはあんたたちの失敗ね。隙ですよ。写真で証拠を撮られるなんて……。子供だからって容赦はしない。罰ですよ。これがあなたたちを拷問する道具になるでしょう、もう逃れられ

ない！

彼らを見据える、子供たちがどうするか固唾をのむ。子供たちはみんな人間でないみたいな顔の雪を拭っている。

――――ごうもんってなんれすか？

――――バツってなんれすろ？

子供たちは申し合わせたように声を揃えてがなりたてるが、積もったものに声が弱められ、まのびし、やさしくなる。

――――小匙いっぱい氷降れ、大さじ一杯氷降れ、氷イチゴのオホーツク、氷アズキのインド洋、氷レモンのアマノガワ、黒こげもちのオテントサン、大やきもちのオネエサン。

替え歌らしいものを唄いながら、もう道路のあたりに出ている気配だ。窓から首を出して、カメラのシャッターを二三回押してみる。道路を窺うが降りでなにも見えない。視界はただ白、量感のある白は、白でありながら、上からくるのと、地で確実に上昇中のとあるが、白の中の白の変化は見えず、なんの遠近も重なりもない。

わたしのカメラに写っているものがあるとは、とても信じられない。外はただ、ぼうぼうとして形もない。白魔の子らが写ったとしても、ここの屋根の上を歩いた証拠写真ではありえないだろう。白を見つめすぎて眩しさが痛い。瞳の表面は氷の結晶をつけはじめそうだ。白ばかり、わたしはやられっ放しなのだと思う。

この家は外観だけ、がっちりと持ちこたえてはいるが、内部は廃墟と化しているのだ。
冬、家のなかに雪が降れば春には苔むすだろう。落ちているガラスをかき集める。つまんでもつまみきれない、小さくて、針のような欠けらが無数にある。大きなガラス欠けを、たんねんに窓わくからはずして、内側から合板を打ちつける。倒れた襖をはめようとするが、どうしても襖の長さが余ってしまう。血管が凍りついてひきつれ、大動脈から毛細血管まで、駆け巡っているのは震えだけだ。震えは一人分でなく何人分かある。
誰？　肩のあたりに気配を感じて振り返ると、明るい部屋の中、かって、この家に住んでいたらしいみんなは消えながら気配だけを漂わせ、わたしが歩き出すと黙って後ろからついてくる。
足音がこんなに響くのは、一人分の足音ではないからに違いない。わたしが歩き止まると、みんなは、われ先に列を乱して家中に満ちてしまう。

4　弔電

祖父は帰ってこない。仕事部屋の隅に祖父の薄手のセーターが脱いであり、クッションのよう

に丸めて置いてある。祖父の脱け殻をつまみあげる。中に二三枚の下着が重なっている。よほど慌てて脱いだのだろう。重ねたまま一緒に脱いだのだ。畳んだ紙切れが、内側に引っ込んだ袖口の間からはみ出している。

電報だ。電文の終わりの方が四角に切り取ってある。

――――１１ガツ７ヒアカイケエマドノニュウインチュウノトコロシンゾウフゼンノタメシキョサレマシタココニアイトウノイヲヒョウシ……シキュウゴライインノウエイタイヲ……。

何のこと？　カナ文字がおどっている。アカイケ、アカイケ、きょっ、きょっと眼が上下して飛び出しそうだ。

シキョ、エマドノ……？　わたしは電報を持ったまま、右往左往する。

何回か読む。句読点の位置をかえて読もうとする、何のことか理解できない。

今日は何月何日？　旅に出てから五日はたっていると思う。京都から始め、北に進路をとったところだ。間違いだろう、悪い冗談、自分の死亡通知を生きているうちに見ているのだから。眼を伏せ、ごく自然にもう一度読む。

どんな抗議の文句も思い浮かばない、声を落とし、電文をお悔やみの言葉らしく読んでみる。

――――バカみたい！

自分の死んでいるのかもしれない額に手を触れて、その冷たさにびっくりする。これは妙に悲しい滑稽なこと。

自分が死んでいるという酸っぱさが胸にくる。

――――お祖父さまはそのために出かけたの？　わたしの死体を引き取りにいったなんて、とんだ災難ね、いまころ何かの間違いだとわかっているわ。ううん、遺体を引き取ったかもしれない……。はじめからそう信じきってみれば、そう見える。

死体は面変わりする。祖父はひそかに記憶をまさぐるだろう。祖父のなかに、どんな顔のわたしもいる、わたしにとってさえ、どんなわたしもいるのだもの。祖父は動揺しない、わたしに対する認識はもう動かない。その遺体はまぎれもなくわたしだ！

わたしは今まで、いつも自分の死に心当たりがあった、だからそれを受け入れてもよいとも思う。しかし、すぐまた、こともなげに身をひるがえす。

誰がわたしをかたって死んだの？　こんな時とるべき処置とか、態度とはどんなものだろう？

わたしがここにいる以上、同姓同名であっても、その遺体の生年月日とか、現住所とか、身長とか指紋とか、どこか辻褄の合わないところがありそうなもの。事実は事実として、すぐに間違いは訂正されてしまう。

外に、或いは内に、わたしは耳をすましてみる。かって、またはさっきまで、わたしは人目につかない死を死にたいと願っていたのかもしれない、望み通りといえばいえる。

死者だけがいる旧い家のなか、家具の上に手を這わせる。こぶしで叩くと溜まっていたほこりが場所をかえて集まってくる。わたしが叩くことを止めると、部屋中の家具は、示し合わせたよ

うに一斉にかたかたと音をたてる。
ほとんど意識しないほど滑らかに電話番号を押している。単調なジージーという音が鳴りつづけている。長いあいだ聴き耳をたてる、誰も出ない。
わたしの部屋にあの女がいないことで、ほっとする。もう一度掛けてみる。ツーツーツーお話中の信号が続いている。
いま、わたしが彼に電話をしたとしても、ピリオドをうった昔に後戻りするというのではない、わたしは死んだのだから、新しい便りではなく追伸のようなものではないか。決して、もう逢うこともないんだもの、それくらいは許されるのでは？
……お話中。ということは以前掛けなれていた彼の携帯の番号ではなく、無意識に目の前の電話番号を叩いたのかもしれない。
わたしのいまいるこの家、この電話にかけていたのだ。
あるいは、どんなルートでか、わたしの死を知った彼が、いま、ぴったり同じ時、お悔やみの電話をしているのかもしれない。受話器をおく、持つ。彼の番号をたたく。あの女の存在によって、わたしは荷電される。
――――わたしは死にました！
もう二度目、彼とわたしは一緒に受話器を持ち上げたらしい。どちらも同時にお話中の信号を聞いている？　希望的観測をして、しばらく待ってみる。かかってはこない。

もう一度かけようとするが、結局おなじことの繰り返しになりそうな皮肉な符号を想像して止めてしまう。

……彼の電話はつながっている。たぶん、あの女に……。もう妨害するすべがない。幽霊にでもならなければ……それも不可能、死んでさえ健康な身体がここにあるのだ。

5　希望

祖父の声は受話器から飛び出してくる。

――その男の母親は、感情の起伏の激しすぎる女は困るというのだな！　起伏があって当たり前じゃないか。お前に難破させられる？　男が、エマごときの気まぐれに難破させられるようでどうする。大物じゃあるまい。わしは難破などしておらんわ。お前はその男に難破させられてなぞいないのだろうな。難破させても、させられてはならん。その男の両親は、大都会のまんなかで、三人ひっそり暮らしていることが恐ろしくてならないんだな？　だから、息子の結婚を利用して、嫁の両親や兄弟や、その一族とつき合いたいというんだと？　それだけが希望であるって？　毎日行ったり来たり、賑やかに助け合って暮らしていきたいというんだな。なんてことだ。

その男は係累の多い華やかに笑う娘と、結婚しなければならない義務を負わされているのか？　全く理想が高いというか、低いというか、あきれたもんだ。都会人の田舎者めが！　これからの女は怒り皺を持った女にならねばならん。笑窪はいかん、笑い声とは狂人のわめき声だ。お前を孤児だといったのか？　わしがおる、わしを忘れておるのか？　そんな男にかかわり合うな、行く末が見えておろうが……。わしの孫めは、わしの言うことをききませぬぞ！――――

――――聞きませぬですって？――――

わたしは祖父に問い返す。

――――わたしがそんなに華やかに楽しい娘だなんて、思ってもいないくせに！――――

――――わしのいないところでは、華やかに笑うさ、昔はそうだった、わかっておる。賑やかに交際する、そんなことくらい、わしひとりでも充分やれる、やれるが、やる気はない……。音楽はどうしたんだ？　ピアノはどうした？　その男とはサークルで知りあったと……――――

いま、この古い家にわたしがいて、主である祖父はいない、電話も鳴らない。

彼には誰からもわたしの死は伝わらないだろう。彼をいま思い出すのは過去を縫い直すことだ。しかしいま、わたしの死をはじめて耳にしたときの彼の反応を聴き取りたいと切実に思う。わたしの死を知らせなければならない第一の人間として、わたしは彼を選ぶ。しかし本人が知らせたのでは死んだことにならない。わたしはその自覚を失ってはいるが、本人なのだろう。

わたしの亡くなったという電報の全文を知るために電話局に電話するが、お話中だ。電文の最後には病院の名と住所と電話番号があったにちがいない。四角に切りとってあるということは、それをもって祖父は出かけていったのだ。一枚丸ごと持って、大きすぎるとか重過ぎるとかいうものではないのに、何故だろう。

祖父にとって、この電文は忌まわしく、二度と読むに耐えないものだった？

そうだろうか……。五回六回、十回十一回、電話番号を押しつづける。執拗に……。誰もがいっせいに同じ番号に掛けている、あるいは長話をする。大雪による非常事態の影響なのだろう、ここには溜まりに溜まっていく雪と時間があるのだ、さしあたっては、やきもきしない。雪ははかないもの、いずれ時間とともに消え始める。いずれ祖父は帰ってくる。病院に電話をしようとしまいと、わたしの死は簡単に終わるのだ。あっけなく、滑稽に終わってしまう、そうとわかれば、このプレゼントのような死をもう少し長持ちさせたくなる。

わたしの死を取り消すまえに……、携帯をとる。彼は山積みされている一番上のCDをかけるだろう、音楽が次第にボリュームをあげ、突然止まる。わたしは口ごもる。彼に知らせる？

芝居がかる……反応が返るくらいなら……いま……。

自分が死んだのだと、口の中で何度か繰り返してみる。しかしそれが、そんなに大事件だとはとても考えられない。

交通の復旧する見込みはたたず、わたしはこの家から出られない。外は雪。なにもせず腰を落ち着かなくしている。静かだ、外から伝わってくるどよめきはないが、わたしの内から湧くどよめきが、ときとして、この家の中をめちゃめちゃにする。

気になる時間が使い道のないまま、なにかが確実に手遅れになっていく。街灯の黄色くぼんやりとした光の回りを、黒い虫のように雪が舞っている。

電燈が急に消える。雪の光で廊下は明るいが、部屋のなかにはとどかない。注意深く、体を支えてくれるものを探るが、右手は空ばかりをつかんで体の震えを伝えるものさえない。このまま、この場所に座り込めば床はあるだろう。身をかがめる、わたしの足はなかったみたいに床さえ暗闇に遠い。死体が夜歩きをしているのだ。死者に満ちているはずのこの家だが、歩いても誰にも突き当たらない。降り積もった雪が音を吸い取っている。

眠ることはやっぱり一番大切なことだと感じながら眠る。こんな眠りが不思議だ。

暗い中で電話のベルが鳴る。通じているのだ、声が遠い、聞きとれない。わたしは言葉を推定して答える。

———鉄道も国道も不通、復旧の見込みが全くたたないんです。

電話の向こうは

———ヒェーン、ヒェーン

と応答する。さらに言葉を推定するが……はっとし、黙ってしまう。わたしは自分を生きてい

ることにも死んでいることにも出来ない思いで、動けない、呼吸できない。向こうで電話を切った後も、それを持ったままじっと耳をすましている。漸く受話器を置こうとすると、耳の方からコードがぶらさがっている。逆さに持っていたのだ。

誰だったのか？　冷たさに指の感覚がなくなっている。受話器が逆さであったにしても、ヒェーン、ヒェーン、あれは苦しかった死のしるし、死んだ女の霊まで、抜け目なくここを探し当て、朽ちた家を棲家にしようと向かってくる。

6　あの歌が聞こえる

窓の桟にぞろぞろと小さなアラレが零れ落ちる。これと同じものを見たことがある。松の立ち枯れた幹を彫ったとき、こぼれた白蟻。女王が女王を生んで分かれ、この家にとりついている？いないという保証はどこにもない。廊下にはガラス戸とガラス戸の隙間から吹き込んだ雪が、三角形の幾何学模様をつくって並んでいる。

雪は粘ついた生きもののような力を発揮しはじめる。

———ミシッミシッ、ピチン

外に出たら人の頭が風船のように空中に浮いているだろう。常ならば到底人の首があってはならない高さ。道路も上昇し、ただの空であるべきところだ。しかも深さの測れない凹みだろう。夢ではなく現実に、人は空にあるのだ。

何回となく二階に上がって外を見ている。ときに雪の粒のほとんどが見えるときがある。全部の雪粒が、その一瞬、ところを得たように空中に止まり、しずもり、時が決して進まない。雪粒を手で振り落とそうとするが、それは確固たる強さでそこにあるらしく微動だにしない。つぎに降る粒も次の粒も素早く姿を消して入れかわる。それが、見てとれぬほど明るいのだ。

屋根の縁は、あまりにも雪が多くて地上の雪とつながってしまう。地上の雪が収縮をはじめると、屋根の雪も一緒に地上に向かって垂直に引っ張り、屋根が折れる。ひどくなれば崩壊するのだ。

図解しているテレビは、しきりに恐怖をあおりたてる。平野部の雪としては未曾有の記録。さらに一時間で五十糎。地上一万米の気温は零下六十度。なおこの寒気団は当分居座る模様。落とした地上の雪と屋根の間に必ず隙間をつくること。雪を払い落とすよりも、まずそれが大切。

———除雪用具がありません、日給五万円出すといっても、来てくれる人がいません。

老婆が画面のなかで泣き出している。

積もれば積もるほど、これくらいでも大丈夫、現在つぶれていないという強みで恐怖を薄めてしまう。生まれてからいままで、これほどの大雪を見たことがなく、それが白い広がりであるた

めに、怖さが全く測れない。

――――ミシッ、ミシッ

この家の、およそどこから出る音かわからない音も、怖ろしさを克服したあとでは、いずれにしても小枝ばかり、幹が折れるわけでなし潰れることもないだろう、などと、たかをくくって、はや、どっしりと大要塞のなか、地下室の奥、超安全な場所にいるつもりになる。

氷河時代の再来、今後何千年間、氷であり続ける雪が積もっているのだ。やがて、この上に新しい学校やマンションができるだろう。車も走るだろう。いずれ氷がとけ去って、現在が表に現れるだろう。それとて、いずれ擦り減って終わるものは終わるだろう。

こうやって除雪の道具もなく、なにも出来ずにいると、何故か度胸が座ってしまう。雪でこの家が潰れるおそれを無視すると、頭上の雪を忘れ頭が軽くなる。照明は今ついているが、いつまた切れるかもしれないし、ガスの供給が止まらないとも限らない。

灯油の買い置きを調べてみる、浴室の隣りの薪炭置き場だった物置には電燈もない。廊下の光が差し込むと中が見える。これは……灯油缶の山だ。

――――グワン、グワン、ワン

音は一缶から三缶、十缶と共鳴して響きあう。空き缶かもしれない？　頭で崩れ落ちて来そうな缶をささえる。一缶ずつ持ち上げてみる。足で蹴っても響きあわない重い何個かがある。ここは火薬庫みたいに危険じゃないのか？　喧騒なドラム合戦を残して廊下に出る。

持ち出した灯油の缶を蛍光灯の下で改めてみる。蓋をとり丸い小さな穴からのぞくと、灯油が銀色に光る四角のなか、凸レンズを一つ置いて表面に光る波を広げる。灯油の臭気が突然くる。排気ガスを大量に吸い込んだように萎えてしまう。

わたしの死、雪、崩壊、交通麻痺、旅行不能、もう一人のわたしの餓死、凍死、圧死、祖父。窮地を自覚すること。それにも慣れてしまえばもう眠るしかない。大惨事のなか、安らかに眠る数億の大衆たち。わたしもその一人にすぎない。

……みんな黒ずくめでのろのろいく。雪のせいで黒く見えるのだろう。黒いから知らない顔ばかりだ。わたしの力では止めようのない葬列がいく。わたしの目撃できないはずの葬列だ。祖父はわたしの入っている柩の蓋をギーギーと開け、柩と一緒に歩きながらわたしにいう。

――――参列者の一人一人に黙礼を送るように……

と催促する。わたしは真上の空に向かって目をつむる。祖父は言葉を続ける。

――――明日は今日の弔いの礼のために、知り合いを訪問して歩くように……。最後の挨拶だからどんなことがあっても忘れてはならない……

眠っているのだろうか？　それはわたしの判断でわかることではない。当分、または何時までも死んでいるのかもしれない。

歌が聞こえる。その歌に思い当たる。祖父がうたっているのだ。

七十七歳の祖父と十七歳のわたしは湖面を小船で渡っている。山際に一軒の料亭がみえる。
そこで、祖父の喜寿の祝いがあったのだ。
———あいつはピアノの教師をやっているのに、この歌を知らんのだよ。わしは知っておる。
祖父は酔っていて、歌を歌いつづける、止まらない。舟の中で、ひとりだけ立ち上がって歌う。息がつまる。
———お祖父さま、止めて、その歌は不吉だわ。
言っても,祖父は得意満面で声をはりあげる。
———若き日、はや夢と過ぎ、わが友みな世を去りて……
舟には十人ほどの人が乗っていて、舟のへりはもう二十糎ほどしか水から出ていない。祖父は歌いつづける。
———あの世に楽しく眠り、アイ・ヒア・ゼア・ゼントル・ヴォイセス・コーリング・オールド・ブラック・ジョー
いつまでも、いつまでもうたう、得意絶頂という様子で。祖父はときどき手を振る、湖面のむこう、料亭の女たちが、おかしな爺さまに手をふるから、笑いながら何時までも見物して手を振っているから。祖父はわたしにも歌えという。
———おまえは音楽を習っているんだ、知っているだろう。歌え！　歌うのは今だぞ！　今を

おいてない、かみさんになったような女とは違うわ。違うところを見せてやるんだ！
祖父の歌声は、ますます音階をはずしながら大きくなる、山彦になって帰ってくる。
――……われも、ゆかん、はや老いたれば、かすかにわれを呼ぶ、オールド、ブラック、ジョー。
祖父は舟を降りても、バスのなかでも、家に帰っても、歌いつづける。翌日目覚めても歌はつづいていて、それから何日も何日も、……ときどき笑い声を漏らしながら歌いつづける。
――なぜ、そんなに楽しそうにうたうの？
――わしの葬式にもこの歌を歌ってくれ！
祖父はいう。
――お前の葬式だから歌ってやっているんだ。
そうかもしれない。祖父は孫娘であるわたしの死という不安だけを、手がかりにして生きてきたのかもしれない。わたしは体を起こして頭を振る。
――そんなんじゃなく、もっと新しい歌がいい。
――お前の母親の結婚式でも歌った、葬式でも歌ったんだ。いまさらわしの口に戸は立てられん。
祖父はわたしの知っているだけで四つの葬式を出した。どれも雪の日で、いつも古風な長いフロックコートを着て、喪主の座についていたのだ。わたしはいま、死んでいる。死んでいるよう

な気になることは、いとも簡単なこと。
眠っているのだ。祖父の歌声は小さくなっている。
――――みな世を去りて、かすかにわれを呼ぶ、オールド・チョウザブローと。

7　雪道

出発するあても、祖父の帰ってくるあてもなくなっている。もう雪は降っているとも、いないともわからない。中庭では祖父のバラが枝折れしながら雪の下で思い切り棘を太らせているだろう。
この家は全身できしみ続ける。
――――ミシッ、ミシッ
四方八方で聞こえ、ただごとではない。わたしはその源を求めて家中を駆け回ってしまう。
――――ピシッ
鞭でひとうちしたように、目の前の窓ガラスに、斜めや真横や、十字に割れ目が入っていく。

もう何枚割れたか、とても数えきれない。ガラスは割れ目が入っても、そのまましっかりと、とりついていて落ちない。雪の重さで襖も障子もドアも窓ガラスも動かないから、足で蹴ったり、金槌で叩いたりする。

盆を二枚もって二階廊下の欄干をこえ、庇から庭に出る、一歩、二歩、丸い盆と角の盆を雪の上に交互に置いて進んでいく。思ったほど沈まない。納屋だと思うところにきて、片足で平均をとりながら、勘を試すように盆の一枚を庇あたりに突っ込んでみる。中ががらん洞になっていて、わたしは唐突に雪と一緒に滑り込み、納屋の羽目板に強く顔を打ちつける。

反射的に手で支える本能を全く失っていて、まともに、したたかに打って、痛みの散るまで泣きじゃくる。

雪は戸口から納屋の中まで吹き込んでいてスコップが見つからない。梯子とスキーも探すが、どこかに立てかけられたまま雪に覆われてしまったのか見つからない。探し回った末、材木の下敷きになって柄がカタカタするスコップを一本、漸く手にする。

雪は粉雪になって降り続けている。いま、道路の上を橇がいく、通った二本の線路はつるつるし、ぴかぴかに光る。その上を手で撫でてみる。つややかな表面をふるふると粉雪が滑る。どこかに行けるのだろうか？　道路はブルドーザーの通ったくぼみを残してはいるが、その上に降り積もった雪は三米はあるようだ。振り返る方向には、もう母屋は見えない。すべて白一色で上下する大波のなかだ。

白いふんわりした厚いものにすっぽり包み込まれ、保護されているという思いになる。昼も夜もこのだだっ広い空間が不思議なほど恐怖から遠くなる。孤独感もない。

居間でわたしが座ると、みんなも座る。熱いコーヒーを注ぐ。見えない視線、聞こえない声に、もう四個カップを並べてコーヒーを注ぐ。カップの一つをとって口にあてる。体のなかにゆっくりと熱さがしみ込んでいき、わたしを包み込んで、さらに周囲まで広がっていくようだ。ぬくみはテーブルの表面を這って四個のコーヒーカップの温みとつながっている。五個のカップのなかにそれぞれ違った顔が映っているが、戸惑いそうだから覗き込んだりはしない。

———カップの縁をこすってみてよ！　その高い単調な音を響かせてくれます！

わたしにはリレーされていく、カップの震えが聞き取れる気がする。でも、もしかしたら、わたしが温みと感じているものは冷気なのかもしれないのだ。みんな死んで、独り残されたということは、こんなことなのかもしれない。……ではなく、自分が死んだということがこれなのかもしれない。

二階まで暗くなる、雪は新記録を更新しつづけている。何米か知りたいが、多分外が見えても量など推定も出来ない。ただ漠々として、降っているのか晴れているのか、高さがあるのかないのかわからない。この状況とあまりにも無関係に音楽放送がつづく。いま何米何糎、何米何十糎、何米何十何糎、秒刻みの実況放送を望んでいるのに……。

家のどこかが鳴る。人が住んでいたころの名残の音だ。いまのうちに雪中道を掘ろうと思う、

脱獄囚ほどの真剣さで……。

雪の圧迫で、とうとう玄関や廊下や縁側の戸一枚も動こうとしない。二階のガラスの割れたところに、内側から打ち付けておいた合板をはぐ、脱け道をつくるために、家の中に雪をとり入れる。シャベルで豆腐のような立方体を切りとっては廊下に投げ込んでいく、椅子を持ってきて、長靴から窓際の欄干をくぐらせ、外の穴の底を叩く。思ったほど沈まない、上半身をかがめ、膝を折って合板で高さを補強する。横穴を二米ほど掘ったところで、体重を足にかける。胸まで落ちて埋まってしまう。落ちたところで足場をかため、雪を周囲から掻き込んで高さを確保する。こんなとき上から雪が落ちたら終わりよ。

この何日かでこの町で何人の人が雪に埋もれて死んだか？　わかっているわ。

こんどは広い空をめざして、前ではなく上に向かって穴を掘る。縦穴を下からスコップで突き上げ、崩れる寸前、横穴で身をひそめる。

上から落ちた雪を踏み固める。同じことの繰り返し、横穴はたちまち落ちた雪で埋められてしまう。これからの雪はまた家の中に引き入れなければならない。とにかく空までつながる穴になるのだ。わたしの手は手袋のなかで膨れ上がり、大型の赤ん坊の手になる。手袋の内側は濡れているが外は丸い球状のつららを下げて重い。靴のなかでも、雪がもう、隙の全部をぎしぎし埋め尽くしている。わたしの吐き出す息が毛糸のストールの間から蒸気のように洩れでている。

後退する。わたしは家のなかにとり入れた雪を、もう冷たくなっている風呂のなかに運び込む。

風呂の水の中でも雪は消えず、水を含んで膨張する。ガス栓をひねる。青い炎が風呂釜のなかでボーンと破裂音をあげて大きくなる。わたしのこぼした雪が氷砂糖のように、階段から廊下に、こびりついて続いている。床板についた雪を掻きとろうとするが、見当違いのところばかりを傷つけ、スケートを穿いたように廊下を滑走してしまう。花ござの片端をホッチキスで止め、雪を運ぶ舟をつくる。横穴から家のなかへ滑らかな傾斜をつくる。雪のなかにぎしぎし潜っていく、ああ、あ、予想もしなかったことばかり。ときどき家のなかに戻っては風呂のなかに雪を放り込む。

なんてことだ、こんなに疲れているのに風呂に入るのは雪ばかりだなんて。湯はみるみる雪を消し、一瞬湯気を失って真顔に戻るが、水位は殆どあがらない。舟がこわれ、階段の手すりにもたれると、暗いところのあちこちが青や赤の影をもってふわふわする。靴底についた雪が波型をきざんで廊下に落ちる。

わたしは雪に溺れたように気が遠くなる。気が遠くなりながら同時に跳ね除ける体力をまだ残していて、雪を引きずって行ったり来たりする。雪の限界が見える。縦穴がぽっかりあく、そこに向かって階段をつくり踏み固めていく。

出る。まぶしい、何もみえない。光だけが押し寄せて目が見えなくなる。

白い世界。黒い梢一枝、電線一本見えない。どちらが上か下か、白のなかで雪をつかむ。固いコンクリートのようだ。雪の氷海があって、人間は海鳥のようにどこか遠い。除雪車のひびきら

しいものが伝わってくるが、さだかではない。希望的観測による幻聴とも思われる。雪が響きと一緒に陥ち込んでいき、地が天でも、天が地でもかまわない。ここには白にまぶされた白の現実しかない。脳天から引き倒されそうだ。わたしの力でこの雪を処理することなどできない。力の限界を越えているもの……。誰の限界だって越えているのだ。

白砂糖の砂漠に落ちたアリ一匹みたいに、視界の端にブルドーザーが見えてくる。雪の上に仰向けに倒れる。

場所を変えてみる雪は荒天の海の大きな怒涛。

顔に反射光のような黄色いしぶきが一杯に揺らぎ、海水のなかで生物の誕生にかえる思いで目のなかが薄緑になる。かすかにラッセル車の汽笛が聞こえる。行き悩んで息切れしている。

ずっと向こう、雪のないところでは、今日も醜い汚いものを人目にさらしつづけながら、平常の生活が続いているだろう。人々はちらちらと時計をみながら、一日の暮らしを開けたり閉じたりしているだろう、あの会社でも。わたしは、支配されること、所有されることが我慢ならない。

見上げる空は見境もなく白々と重い。交通は麻痺。祖父は帰ってこない。明日になれば何とかなるかもしれない。新しい新聞のかさかさという音が聞けたら、泣き出してしまうだろう。わたしは自分の抜き型を雪に残して立ち上がる。雪像のように真っ直ぐに体を凍りつかせる、こめかみが青くなり、口がかたくなって首を立てる。瞼の中でゆっくりと眼球はまわっているが、あまりにも白くて、動き出したものを見きわめる視力がない。冷えていても冷たさは中途半端で、し

びれず、むしろ足先や手先は痒みのような熱をもっている。作ったばかりの雪のトンネルに右足をかけると、上を踏む左足と一緒に雪は崩れ落ちる。足場を失う。とっさにスコップを穴の中央に突き刺して重心を素早くスコップに移して立つ。これではわたしに、人目につかぬように生きていけというのか、死ねといっているのかわからない……。

といっても死んでいるのだ、楽しみにしていた旅の途中で……。この先に旅が残っているのに切符が無効になってしまう。

放送は自衛隊による除雪隊の出動を報じている。

———積雪は六米五十糎に達し、全線運転不能、少なくとも数日間は運休の見込みであります。五市十ヵ町村は完全な孤立状態に陥り、生活必需品の不足も憂慮され、空から緊急輸送が予定されております。倒壊した体育館、学校、役所、工場、事務所等、判明しているだけで五百件を越え、民家の倒壊は膨大な件数にのぼっている模様であります。尚、死傷者の数はいまだ不明であります……。

わたしがいま死んだとしても、新たに死んだ数に入れるのかどうか？

風呂に入って暖まっている。赤銅色に温くんでもなお、わたしの手足を縛っている正体がわからない。体中が痛い。一生の肉体労働の全部がわたしの最期にあたって要求されるのだろうか。

ベッドに寝て首を廻すと頚骨が擦り減ったのか、ぎくぎくする。

疲れは、わたしの熱い手のひらのまんなか、穴でもあるようにもくもくとふくれあがる。もう、

ピアノが弾けなくなる。

8　機械にはなれない！

――――赤池さん、聞いた？　昨日の会議できまったんですってよ。営業が分不相応の大量受注をしてしまったから、誰もかも現場にかり出される騒ぎになったのよ。みんなもう工場の方にいっているわ。おあつらえの背広姿で、お偉方まで現場に出ているのよ。男子社員はみんなわれ先に出て行ったわ。気取ってるときじゃない、ボーナスにも響くんだからって。女の子もしぶしぶ出て行ったわ。あなたも広報だって、こんな時にピアノをひいてもいられないでしょう。ここはもともと製造会社なんだから。早くいきなさいよ、遅刻でにらまれているんだから……。

古参の女に促されて、びりになったわたしが、三階の工場のドアを開けると、みんな壁にへばりついている。くさい、揮発性の臭気を持つ液が噴出している。圧搾空気の管が作業台の下にとりつけてあって、その根元と、管の先から噴出しているのだ。事務の女の子たちは、いつ誰が着ていたともしれない作業衣を気味悪そうにつけて、襟首を立て、顔を背けて、油？　の吹きだし

が止まるのを待っている。鯨みたいに吹き上げる油に、陽光が差し込み、虹が見える。
油を含んでびしょびしょに濡れた雑巾の上に新品の雑巾を重ね、女子事務員たちは並んで立っている。
———こんなときには人間、油を浴びることが必要だよ。
管の先を持っている少年工が得意そうにいう。
———火葬のため？　ひどいことを！
———いや、サビどめでさあ。
碁石を二つに欠いて顔にとりつけたという感じの半欠けの目、烏の羽を鋏でバリッと切り取って額においたという感じの硬い髪、年期もののジーンズ。少年工は管の先を窓の外に出そうとして、手もとを狂わせる。女たちは逃げる。
———なめらかな髪、なめらかなお肌！
少年工は手首をしなわせて管を持ち替える。
———あら、残念。もうシミ、皺だらけよ。指の関節までギイコギイコですよ。
現場主任らしい女は笑いながら応じ、てきぱきと指図をはじめる。ベルトコンベアに乗って大小の白い箱と製品が流れてくる。
———小箱が流れてきたら、製品を入れて、蓋にレッテルを貼って下さい。十個になったら大箱が流れてきますから、小箱を十個おさめてガムテープをはって、そこにきちんと積んで下さい。

簡単ですよ、すぐ慣れます。
――――ひとりでそんなに？
――――遅れていらしたから、最後のしめくくりがあなた。これでよしと。あらあら、下の道を通る人はことだはねえ！
少年工は管を外に出して油のしぶきを撒き散らしている。
コンベアで送られてくる製品は片手で持つには重い。箱に入れ損ねて、手首が妙な捻り方をする。小箱と製品が交互に流れてくる、間に合わない、流れてきたものを放っておくと、コンベアベルトの終点で山になり、崩れてぱたぱた落ちる。製品が破損してしまう。大箱がくる、漸く十個納める、下に降ろそうとするが、重くて持てない。ガムテープで箱を閉じなければならないのに、次の箱がもうきている。次も、次も、次も、小箱を二つ三つ四つ、次々手で払い落とす。大箱がきている。放り出す。仕事になっていないのに、息つく暇もない。掌の真中が裂けている。手首がガクンガクンとし、箱の重みで折れそうになる。これでは、ピアノが本当にひけなくなる。
両手でつかまえなければ、製品を小箱の中に入れることができない。漸く小箱を大箱のなかに十個入れ終わって下に降ろすが、ガムテープを貼る余裕がない。血がでている、白い箱にわたしの赤い掌紋がペタペタついてしまう。コンベアベルトの終点に集まった小箱や、製品の山が落ちる。それに飛びつく、壊れている。またも、まったなしに動いてきて、もう手がつけられない。助けを求めようにも求める暇がない。わたしはわたしなのに……、腕ではないのに、手が動く、

動かされて止まらない。わたしは機械にはなれない。
早く早く、息切れする、わたしは手、わたしは息、小箱を払い落とす。小箱ははじかれて飛ぶ。大箱がきている、一つ放り出す、製品を抱え込んで下にまとめておく。間に合わないのに手も足も顔も、もう紫色。わたしのやり損ねた物の山で足の踏み場もない。逃れられない持ち場なのに逃れ出る。こちらを誰も見ていない間に……、早く。わたしは機械にはならない。
会社のビルは四階から下が工場と倉庫で、エレベーターも現場とは区別されているから、工場に入り込んだことはない。行っても行ってもダンボール箱ばかりだ。小道をたどって、奥へ奥へ進んでいく。暗いところに黒い電話があって、鳴りつづけている。
わたしは広報部、いわばよそ者、わたしの知ったことではない。さらに奥へ、ダンボール箱を分けていく。
———金をかりた人は必ず返すこと。
道順のように、あちこちに同じ貼り紙がある。狸のような老人が昼寝している。こんなところでタヌキ寝入りをしているのだ。その後ろにやっと目指す医務室がある。誰もいない。掌の傷が急に痛みをとがらせる。
逆戻りする。
———この窓は閉じようと思えば必ず閉じます。
ここにもこんな貼り紙がある。貼り紙を読んで勝手を知って、こうしてわたしは、いつのまに

か女工になる、なれるというものなら易しいのだけれど……。労働をいやしみはしない、労働の方からいやしまれているのだ。泣いているのはわたし。

人気のない方へ避難する。

――――惜しみつつ捨てよ。

の貼り紙があるのはゴミ捨て場らしく、大きなポリバケツが並んでいる。黒装束の女が手押し車に腰を掛けて影絵みたいにいる。今度は明るい方へ明るい方へと歩く。

窓には太陽が溢れ、箱の山の向こうに見事な大輪の花が開いている。ブルー、ピンク、白、赤、雨傘が干してあるのだ。そこだけが光を受けて明るい。ここにはあの古びた作業衣のみすぼらしさはない。明日からわたしもここに傘を干すことになるのだろうか？　真っ黒い傘、彼から借りて、とうとう返さずじまいになった傘だ。

――――何日も何日も干されたままですよ。

さっきの黒装束の女が傘の一本一本に手を触れながら歩いてくる。わたしの足許に転がってくる何本かがある。

――――この人は行方不明、この人は病気、ずっと病気であといくばくもない。この人も、この人もいつかいなくなる。そして、この人は首になって、もうすぐいなくなる。

雨傘の下にこぼれ落ちたチョコレートの欠けらを目指して来たアリが群がっている。わたしもいなくなる。いなくなるなど簡単なこと。

わたしはいなくなった、傘だけ残して、そんなふうに、どこからもいなくなる。
現場用のエレベーターは、豚のすし詰め。女子事務員たちがブーブーいっている、高いところに扇風機がまわっていて、その風を浴びてひらひらしているのは、またも貼り紙。
———何の意味か不明だけれど、つまり高見の見物をしている奴らがいるということね。
———人の上に天がある。会社あっての人生だ！
———何よ、これ！
みんなの口がとがっている。エレベーターを出たところで、人事課の男が立っている。
———仕事が合いません、わたしには無理です、第一能力がありません、首の骨がこきんと言いました、しびれが電気療法でもやっているみたいに、体中に広がりました。いま小指だけが妙に薬指から離れて外側に開き、しびれを受け止める準備をはじめています。
わたしは必死で訴える。
———そうでしょう、そうでしょう、熱い息をして、目が燃えて、実に美しい。労働する人は美しい。気分いいですねえ。生きているなあと思ったでしょう。その充実感が応えられなかったでしょう！　これで、会社の前途は洋々です。皆で会社の発展のために燃焼しましょう！
———ええ、熱いのです、機械の速度についていけません。機械にはなれません。今までだって、休憩時間のピアノの選曲さえわたしの自由にはならなかった。童謡から艶歌まで、勝手な要求ばかりされて、うんざりしていたんです。わたしはわたし、ロボットではありません。もう、

誰の指図もうけません。
わたしはピアノにはじかれている。そのむなしさや、じれったさを押さえきれない。疲労で崩れ、酔ったように発作のように会社を辞めていた。先の方針は何一つたってはいない。

両肩に巨人の手が置かれている、その手が、いま握り潰すのをためらっている。そんな疲れの重み。わたしは巨人の分厚い手まで、わたしの肩として背負い込む。肩から肘に向かって、輝く乳房ほどの大きなこぶが移動してくる。ゆっくりと、皮膚の下を一ついってしまうと、また一つ。肩はその度に重荷をおろしたように、なで肩になる。
休んでいると、雪の合図ばかりが気にかかる。持ち場を離れてはいけない、そんな寝言にせきたてられる。
肘を曲げ、手首を後ろ側にひねって掌を上にむける。もう三時間もこんなかたちを続けてうつ伏している。ふっと掌に誰かが何かを乗せようとする。指は冷たいジュースがかすめていったのを、手のひらは暖かいトーストがふれたのを感じ、手首はあれを掴めばよかった、とればよかったのにという。銀色のくさりが手首にかけられて、両手は一まとめにくくられる。くくられてもわからずに指はみんなイソギンチャクのように、気配をさがして活発になっている。わたしの掌は骨の粉の上に盛り上がって、すべての感覚の分厚い蓋になって、もう何も感じない。足は水の袋を踏み、膝にも大きな水袋を当てている。それは体温ほどに温もり、脂肪と軟らかさが同じに

なる。
立ち上がって動こうとすると、その袋をひきずってしまう。疲れは体をはみだし、どこまでも広がっていくようだ。
わたしの上体が足を後ろに残したまま、寒さで葦のようにたわむ。風はないが寒気そのものは動脈のようにこの家を貫き、枝分かれして脈うち、すみずみまで流れ込み、ベッドのなかまでシベリア大陸みたいな重い寒気を溜め込んでいる。

9　わたしを掘り出して下さい！

降り止んでいる。新しく押し寄せた雪を切り開き、雪の山頂をきわめ、昨日と同一視点に立っている。方向は一夜で変貌を遂げ、雪は掘り起こされ、起伏が昨日とは逆になっているようだ。ショベルカーが動いている。大きな立方体に切り取られた雪がオレンジ色の爪につかまれて、道路の両脇に積み上げられていく。ショベルカーの過ぎていった雪の岸壁に立ってみる。築城のように雪のブロックが規則的に並び、道を挟んだ対岸は驚くほどの大城壁だ。
これは山を切り開き、真新しく生まれたばかりの新都市。道路を見通すために体を乗り出す。

駅に向かって、この城壁は高々と延々五百米は続いている。
雪は水、H_2Oの長城の上で、わたしはとまどっている。いつもはただの空間だったところ、わたしは踏み台としては頼りにならない水の上に浮いているのだ。五十米ほど離れた学校の欅の大木も枝折れしたのか、雪のなかに没して見えない。除雪隊員は黒い働き蜂。対岸で切り出された雪の石材が次々にエ字型に並べられていく。砂糖の国、甘くはない。壁は切り立ち、壁に沿って這い降りることなどできそうにない。
雲を透かして薄っすらと太陽が見える、わたしの見るどの方向にも太陽が見える。どれが本ものかわからない。どの建物でも屋根からとり除いた雪でできた大山から、青や白のプラスチックの波板を長々と継いで、玉転がしや、滑り台の要領で雪を滑らせている。雪の大山の麓に辛うじて屋根のへりらしいものが見え隠れしている。我が家は……祖父の家だけは、まだ起伏を重ねる自然のふくらみのなかにすっぽりと隠れているのだ。
自然の作った雪のふくらみが、家を包み込んで、じわじわとしめつけ蛇が獲物を巻いてしまうやりかたをする。見えないところで家を砕きつつあるのだろうか、家が見えないということは、すでに崩壊してしまったあとなのかもしれない。足が沈んでどきっとする。
犬が四五匹入り乱れて走る。鳥のはらわたのようなものをくわえ、黄色い血を振り撒いていく。犬の道をその通りになぞると、たしか客間の上だ。家の上が道になっているのだ。はねあげられた軟らかい雪を握ると、狭い掌のなかで、雪は三角の紙になって潰れる。容器を叩くと、中味が

隙を小さくして、かさを半減してしまうように、雪も周囲を叩かれて半減しそうなものだが、道路の底を来るブルドーザーが、大げさな響きをたてて横転しても、雪は減りめもみせず量を増していく。

わたしは新聞紙の包みを雪のなかから掘り出している。くさいものを嗅ぎつけるように、何があったのだと言いながら、除雪隊員が雪の崖を登って来る。

――ヘリで空輸されたのね。新聞が配達されていたんです。

わたしの持っているのは除雪隊員が忘れていったスコップだ。赤いビニテープの目印は剥ぎとってあるが、他に焼きゴテによるしるしが木の柄にくっきりとついている。それを見つけられないように、除雪隊員の方を見つめたまま、手早く雪のなかにスコップを押し込んでいく。不審そうに除雪隊員はわたしを見る。

――掘ってあげましょうか？　救援隊員でありますから、ご遠慮なく。私生児を生んで、雪の中に埋めるのであっても……。そうか、新聞紙に包んであるのか？

――そんな事件が沢山あって欲しいという、あなたのお気持ちもわからないではないけど、ここには何にもありませんよ、真っ白な雪しかありません。

わたしはスコップを動かそうとするが、雪に深く入り過ぎて微動さえしない。

――動かないようですね。動かないということは、ここに何かが隠されているに違いない。金か？　宝石か？　麻薬か？　密書か？

――雪だけです。だからこんなにもぐってしまったのよ。
――あなた一人じゃ引き抜けないでしょう。まかしなさいよ。スコップにワックスを塗っておかないと、雪が何キロもひっついて、落とそうと思ってもとれなくなってしまいますよ。
氷は氷同士で凍りつき連なっていこうとするから、雪はこの島国全体の雪とスクラムを組んでいる。スコップを引っ張り出そうとすると、ひとつづきに、地平線までの雪の全部を引っ張ることになる。
除雪隊員たちが、雪をスコップで切ることをはじめる。除雪の救援のふりをしながら、わたしがこのあたりに何かを埋め込んで隠しているのではないかという疑いを根強く抱いて集まってきたのだ。異常な熱心さで、わたしの回りに円を描くように掘り進み、わたしと盗品のスコップは、その円形の土俵の中央で相撲を取っているようだ。引き抜くか押し込むかしようと取り組む。寒いためによけいに体中が火照ってくる、汗が冷えて手のひらで固まる。
除雪隊員は黄色の雪を切り取りはじめる。わたしの回り三米から四米半径に黄色の雪が囲みをつくる。彼らの一人は幼児のころ黄砂のまじった黄色や赤い雪を見たことがあるという。
わたしのまわりに、花びらのようにスコップで掘り下げた崖ができている。花の真中に、真っ直ぐ伸びためしべのように、わたしはオレンジ色のダウンジャケットに、焦げ茶のスラックス姿で立っている。黄色の溝のなかで、除雪隊員たちは蜜を吸う虫のように目をこらす……。太った黒いアブだ。めしべの根元、黄色い雪、それが血のにじみだとしても……、わたしは体の芯から

凍りついて表面からきらきら氷の粉を吹きだしているのだ。知ったことではない、しかし間の悪いことに、腿のあたりから汗が尿のように流れ落ちる。すでに足場はなく、ここにめしべのように立っていることの緊張も限界に近づいている。

土木工事につかうようなベルトコンベアの上を黄色の雪が動いていき、ダンプカーの荷台に積み込まれていく。わたしは雪と一緒に崩れ落ちる。

――わたしを掘り出して下さい！　ここではなく、そこを掘ってください。下に家があります。ユの字型に平屋と二階屋とこうあるんです。そんな遊びは止めて下さい。この下からわたしの家を掘り出して下さい。

――公共の建物でありますか？

隊員は急に口調を変えて事務的になる。

――わたしの家です、助けてください！

――個人の家の除雪は、命令外であります。原則として、その家の住人がやることになっているはずです。

――出来るくらいなら、お願いしません。祖父の家ですが誰もいないんです。

――こういう広域にわたる災害の場合、救援の優先順位がきまっているんです。誰もいない家だということは幸運であります。人命の心配がないということであります。

――潰れることが幸運ですって？　人が住んでいるんですよ。わたしです。死者もいます。

わたしなんです。
――――住人はあなたひとりなんですか？
――――へーえ。独りだってよ。
――――へえ、若い女一人だってよォ。
――――いいえ、もう一人祖父がいます。外出しています。祖母も、父も、母もいます。五人です。みんな力がまるっきりないんです。なにしろ、なにしろ……、死んでいますから。もう、死んでしまいましたから。
――――五人いるんだってよォ。みんな死んじまっているんだってよォ。つまり、この女一人だってことかい？　な、それとも？
彼らの防寒帽子のなかには眉と眼しかないが、ＳＬみたいな白い息を吹きだしている。彼らは寄り集まって協議をしている風に見えたが、急に新しい命令でも受けたのか心を残しながら仲間のいる方に移動していく。何人かが振り返り、一人がスコップを忘れたと言って戻ってくる。帽子をとった髪からぼうぼうと湯気が立ちのぼり、顔は赤紫だ。彼は声をひそめていう。
――――お嬢さん、あとで、夜になるかもしれません。見殺しにはしませんよ。自分が助けてあげます。
男はまたスコップを置き忘れていってしまう。わたしはそのスコップの赤いビニールテープを素早く剥ぎとり、二丁で体を支えて立っている。罪の意識などない。

わたしは穴の入り口にカムフラージュすることをはじめる。合板の上に雪を乗せ靴で踏みしめ、粉雪を振り撒いて人工的な形跡を消し、穴の中に入り込んでから両手でそれをささえ、頭の上でしっかり蓋をする。闇のなかで空間を測る。この白い罠にかかって、うごめいているのはわたし。

――――それがほんとのわたしかしら？

祖父はわたしの遺体と一緒に交通止めにあっている。

――――ああ、わしが孫娘を間違うものかね。それほど呆けておらんわ。

祖父は笑う。わたしに打っているのは脈ではなくエンジンの震えにすぎないのだ。わたしに体温があって生きていると思えるのは、毛布に包まれているせいなのかもしれない。

……暖かい、小春日和だ。祖父が新聞を読んでいる。粉を吹いたような、真新しい緑の畳に縁側から斜めに陽がさしこんでいる。わたしは這っていって机の上のインク壷をひっくり返す。畳の上に青が拡がる。祖父がわたしの尻を打つ。大きい手形が尻にくっきりついている。土蔵に放り込まれる。わたしは這っていってミカンの箱のなかに、すっぽり入り込んでいる。

――――エマはどこかしら、いない。

母が話しながらくる、わたしはほっとして目覚める。体が軽い、まるでスポンジで出来ているみたいだ。気分はよい、どたりとしなかったことで叫びたいくらい。大切にされ、箱にうやうやしく納められる、こんなうやうやしさが夢なのだ。

――――おまえのしるしがみつからない。
と祖父はいう。
――――絶対に、お尻に青いしるしなんかないわ。
わたしはじっとりとにじんだ額の汗も拭かず、両手を後ろに回して尻をおさえている。
――――エマ、おまえは、死んでもよいのではないかな？
祖父がいう。尻から全身に青あざがひろがる。醒めて寒い。

10　キューピット

この夜、主屋の屋根の雪を堀上げ、庭に移動させているらしい、ミシッミシッという音が、家中に響きつづける。揺さぶられて三方で窓ガラスが落ちる、はっとして覚めきってしまう。
除雪隊のあの男だろうか？　これで、家の下敷きになって内臓をはみ出して伸びる、そんな死にざまだけは避けられるのかもしれない。
二階の窓が目を開き、ぽかんと蒼白い光がある……、それは壁。ガラスの欠けた窓から首を出して見ると、目の前をふさいで高々と、中庭に雪の三階建てが出来上がっているのだ。屈折に屈

折を重ねた月の光が、わずかな隙間をくぐってくる。わたしは口を開けて、遥か上を見上げるばかりだ。

前庭にも雪の塔が高い。

――――だあれ！　そこにいらっしゃるのは、どなた！

――――僕、僕ですよ。分かりますかあ！　夜がチャンスなんですよ。この雪を低くなっている道路に落とすんです。捨てる場所はほかにはありません。この町の人はみんなそうしているんですよ。夜中は、そりゃもう賑やかなものでした。除雪隊は機動力があるから、道が何度どんな大山になっても、また綺麗に道を作り直しますよ。

――――へーえ、で、この家は何とか持ちそうかしら？

――――家の中はどうなんです、倒れる間際みたいなガタがきていませんかあ？

――――寒いこと、自分のガタガタでどぎもをぬかれそう。あなたも、お休みになりませんかあ？

いきなり、わたしの鼻先に、雪男みたいな大きな靴が現われ、つづいて脛がぶら下がる。徐々に上体を滑らせて飛び降りる。男は外側から、動かないガラス戸を上下でかたかたいわせ、簡単に開けてしまう。決して開かなかったはずなのに……。

重労働の作業衣をぬぐと男は一回り痩せ細る。テーブルに片肘掛けて、体を浮かし気味にしてストーブで暖をとっている男は、熱で赤銅色になり、顔からも髪からも手からも……全身から蒸気をあげはじめる。

――脱走してきました。
――ええっ？　除雪隊から？　除雪が嫌になったから？　除雪が嫌になったのに、この家の除雪をして下さったの？
わたしは思わず笑ってしまう。笑ってから慌てて詫びる。
――ひと心地がついたのはあなたの方でしょう、つぶれる寸前でしたよ。すごかったなあ。……でもあなたは、けろっとしていますね、白いから、こわさが測れなかったのかな？
男はまるで凍傷でもあるかのように、不自然に足を交互に床から持ち上げる。点検でもするのか部屋の柱を叩いたり、壁を押したり、伝わってくる音に耳をすましたりする。屋根が軽くなったためか、驚いたことに襖の丈が合って、男はつぎつぎ襖をはめていく。部屋らしいまとまりが生まれ、昔のような安心感をもたらしてくれる。
――脱走って、休暇を勝手にとったということですか？　それとも退職？
――行方不明ってやつですよ、恋の道行きって、ところかな？
男の眼がきらきらする。
――あら、素敵！　うまいこと言って。でも、ほら、あそこには、こんなときでもケーキやメロンがあるに違いないと、にらんでいたのよ。羨ましいのに、どうして逃げだしたんです？　……わけのわからない規則に痛めつけられていたから？　そうなら、正解だとおもいますけど。わたしの感覚からすれば、もともと、がんじがらめの自衛隊に入るなんて考えられないことだわ。

――異人種だと思っているんでしょう。ですから、僕は逃亡しました。ちょっと隊を利用しただけなんです。

男は巧みに口笛を吹く。わたしはこの見知らぬ男に、恩義を受けたことで警戒を怠って軽口を叩いている。そんな自分に気づいて驚いてしまう。

――あら、わたしを呼んでいます。

他に誰か家族がいるふりをして、廊下を足音をたてて歩き、襖をがたがたさせてみるが、ストーブのないところは冷蔵庫のなかより冷え切っている。

――おひとりなんでしょう。だめですよ、嘘をついては……。自分はあなたを護るために、命がけで脱走して来たんであります。

――ありますだって！　おかしなひと。感謝はしているのであります、本当です。

除雪隊の男は気を悪くしている。わたしの眉間に不安の皺が集まってくる。困るわ、勝手に恋されては……困り果ててしまう。

――でも、祖父がいるんです。鉄道の復旧には、何日かかる様子かしら？　いいえ、祖父は生きているんですよ、この家に住んでいます。

男は気を取り直したように腕時計を見る。

――もう朝ですよ、月夜でしたから、雪はあがりますよ。

男はちょっと黙り込む。もろ手を上げて歓迎してほしかったのだろう、その期待が伝わってく

る。落胆している。
――家族は、みんな眠っていますの。耳が遠いんです、死んでいますから。ほら、見て下さい、わたしも死んでいるんです。
男は上体を揺すって笑っている。ワインを飲むと、ソファーのうえで完全に横になりはしないが、疲労のためか、うたた寝でもするようにぶくなる。
わたしは邪魔をしたくなる。
――あつかましいけど、もう少しわたしに協力してくださったら嬉しいのですけど……。こんなときには、好奇心という薬味が欲しくなるんです。わたしの死が、わたしでなく、外からくるのなら、死はもっと情熱のように待ち構えているはずだと思うんですよ。わたしが痛み一つなしに死者になりおおせたとしても、このままでは嫌！　知らせたい人がいるんです、わたしではなんですから、力を貸して下さい！　お願い！
電話番号を押さえながら男にいう。
――死亡しました、そう言って下さる？　葬式は近日中です。とりあえずご連絡いたします。そう言って下さい。それを言いたいのに、今まで、禁じていたんです。なにしろ本人ですもの。
運がよかったというべきか、この役を男が引き受け、嘘でない嘘をついてくれるなら、どうなるとしても、わたしは自分の死後の彼を知りたいという思いにとりつかれているのだ。
電話は通じている。喜劇、悲劇、どちらにも通用する微笑をして、わたしは男に受話器を渡す。

――もしもし、長田均さんでいらっしゃいますか。
わたしの小声からワンテンポ遅れて、男の声が追い駆ける。
――突然でございますが、赤池エマさんが、十一月七日死去されました。はい、さようで。
男は電話を左手でおおって、
――なんで亡くなられたのかと聞いていますよ。
催促するように言って口を曲げてみせる。わたしは男に顔をよせ、向こうの声らしいものを聞き取ろうとするが、声が聞こえるだけで言葉はわからない。
――聞き取れないわ、何と言っているの？
わたしは一種異様な興奮にとりつかれている。
――　一生忘れないだろう、そう聞こえます。
男は伝えるが、そんなことを均は言わないだろう。いうわけがない、その言葉はわたしにだけ言わせて、彼は何も言わなかったのだ。彼の心がわたしの死を前にして乱れている？
――では、必ず葬儀に出席して下さるように、そう言って下さい。
死亡通知にしては、男はいきいきと話し出している。実際に、もう、長田均に、わたしの死を知らせてしまったのだ。告げられてしまったことが怖くて、わたしはじっとしていることに耐えられなくなり、家中を駆け回ってしまう。何か取り返しのつかないことをしでかしたかったのね。
……わたしは彼と無縁であるいまでも、彼の死を知ったら、自分の死を知ったときよりも衝

撃をうけるだろう。
家のなかを駆けてみても、また電話に戻る、男はまだ話している、何を話しているのだろう？
――切っては駄目よ。
寒さもあって、わたしの上下の歯がかたかた打ち合っている。
――じゃあ、何て言ったらいいんです？
――待って！
慌てて受話器を持っている男の手の上をわたしの手でおおう。
――ほんとに、彼女が死んだと思いますか、信じられますか？　そう言って下さい。
――……最後は僕が看りました。
男が言っている。
――なんてことを！　忠実に願いますよ。
見ると男は開いている一方の耳を手のひらでふさいでいる。
――ショックを受けた様子はないかしら？
かすかに向こうの声が聞こえる。
――冗談でしょう……、彼女は僕に、一本の返り討ちもしないで死ぬはずがないんです……。
そんな風に聞こえる。
――子供のように喜んでいますよ、あちらの彼は……。

男はわたしに伝える。
――――そんな！
わたしは死体役を忘れ、自分の声を出しそうになる。
――――きみは誰です、彼女のなんです、そう言っています。用心深い男ですね、今度は身内の人をを出せ、彼女の身内はお祖父さんしかいない筈だ。そう言っています。
――――きみに彼女の本当の値打ちがわかっているのか？　と聞いています。参ったなあ。彼女と生身で会ったことがあるのかと質問していますよ。随分前から、僕たちは死を仮定した話を楽しむようになっていたんだ、きみにそういった楽しみがあったかい、そういっていますよ。何か気づいたんじゃないんですか？
――――きみは他の女の子と付き合ったらいい、彼女はきみの手におえる女ではないさ。こりゃなんです、彼もおかしいんですか？　ことの起こり、いや、ことの終わりはどうなったのかと切りかえしています。……なにか彼にわかったんですね。
――――しっかりするのよ。もう少し、わたしにどきんとくる言葉がほしい。
――――かなりけちな野郎で、葬儀に出席されますか？　献花されますか？　ときいても、きみの指図は受けないの一点ばりですよ。
この男はまとはずれの通訳をしつづけているのかもしれない。わたしはそれしか聞いていないのだから……。わたしは暫く声も出さずに自分の独り言を自分の小耳にはさんでいる。

男は無断で電話を切ってしまう。
――あら、駄目じゃない、切ってしまっちゃあ。……ほんとは彼、不在だったんでしょう。わたしが彼を殺したのよ、すでに何回も致命傷を与え、殺し終えましたもの。死んでもまだ彼を殺しつづけていられる、そう思いたいだけなんです。彼の度肝を抜きたいけど、彼には肝がありませんでしたでしょう。
男はわたしに笑いかける、吉凶どちらにも通用するさりげない笑いだ。
――全く変な役！　僕の身にもなって下さいよ。僕がこんなに、きみに夢中になっているのに。わかっていて、よく言うよ。死亡しましただなんて！
――ああ、ごめんなさい！　わからないの、さっきはこうするのが、わたしの希望の全部だったから……。でも、今はもう、どうしてこうしたかったのか、その理由さえわからなくなっているの。でも、わたし、これでさっぱりしたわ。
これも過去の縫い直し、だんだん太い針とごっつい糸で縫い直し、布地は針穴でぼろぼろになる。本当に失って惜しいものなどなかったのかもしれない。
――夢と希望に身を包む、わたしは赤池エマでした……。
角柱の列のある大きな建物の前に広場がある。均が広場のまんなか、わたしの眉の間に立っている。

わたしの前を、若い女が青空を、わたしの青空を奪って駆けていく。白い木綿の服、ボートネックのなかで、花瓶のなかの一輪のような首が揺れる。均が手をあげて合図をしているが、わたしに向かってなのか、その女に向かってなのか、わからない。彼は延長線上に二人の女をおいて、細くしたまなざしで、真っ直ぐこっちを見ている。なんとなくその真剣さがうさんくさい。わたしは立ち止まる。その女に、彼は話しかける。さかんに彼の首が動き、話したかった言葉があって溢れ出しているのがわかる。言葉は聞こえてこない。彼はその女の肩に手をまわし、わたしに近づいてくる。ちょうど陽がさして、現れた彼の影を、その女は意識して飛び越え、わたしの反対側に移っている。空は変化しつづけていて、影はかくれんぼでもするように、すぐに消えてしまう。

———きみ知ってる？　あそこの開かずの踏み切り。あそこの前で、バレーみたいに頭の上まで足をあげていた人だ。

その女は短い叫びをあげる。

———泥をはねられたんです。あのとき均さんが、ふくらはぎを褒めてくれたの。

———足首だよ。

———勿論わたしは体を斜に構えていたのよ。

わたしは頚動脈を切られたような声は出さない。世慣れないわたしにだって、この会話に含まれた他の意味はおぎなえる。

――――このひとの研究所は、研究とは名ばかりなのよ。世界で発見された理論や技術をいち早くキャッチして、競争会社より先に権利を獲得する、それが目的なんだから。研究一筋の彼は、浮いているのよ。だから、ヌード雑誌にうつつを抜かしているんでしょう。そんな雑誌を見るみたいに、あなたを見たのね。わたしとなら、ピアノをひくのに……。

わたしは彼らとの間に距離をおく。急激に湧き上がってくる雲があり、真上まで厚くおおう。

――――雨がくるわ、天気予報でも低気圧が急速に北上して、乱気流が……。

わたしは話すが、彼は聞いていない。その女の話に耳を傾け女の言葉に狂ったように笑い、何時もは隠れている青白い耳を見せる。彼の顔は熱っぽくなり、造作が大きく見え黒い睫が濃くメーキャップしたように見えてくる。その女は話を止め、舌を口からのぞかせたままでわたしを見る。わたしがまともに見据えると、片目一重で片目二重の片ちんばの眼で見返してくる。

雨が降り出してくる。

――――ああ、母から頼まれた仕事を一つ忘れていたよ。すぐ戻るから、あの喫茶店で雨宿りしていてくれる。だいじな話があるんだから……。

わたしに向かって言い、大きく頷くと、自分の上着を女の頭に被せ、二人絡み合って、走り出していく。

上着の端と彼女の手を一緒につかみ……、ずぶぬれの四本足、彼の両親の足が加わって八本足、子供が生まれて十本足、もっと賑やかに殖えて三十本足、むかでがいく。……わたしは、将来を

予測してショックをうけている。
彼らは後ろを見ない。わたしはもともとシャイで、彼と腕を組むことすらできなかった。それでも追い駆けようとして、反対に後ろにはじかれる。そこに透明なガラスの壁でもあるみたいに。わたしはもう一度、頭から突っ込んでいく。口惜しさの分だけはじかれて追うのを止める。
視覚を惑わす雨に囲まれて、彼らは見えなくなる。
わたしは広場を濡れながら歩いて、ゴムの植木ばかりやけに並んだ喫茶店に入る。ロックが低く流れている。雨のにじんだスカートを回転させてから腰を降ろす。
ゆっくり紅茶をすすり、ケーキを食べる。ブランデーのしみ込んだ紙まで食べ、ふと見るとスカートの膝にフルーツの砂糖漬を落としている。彼は戻ってこない。広場の方から、濡れ鼠の、子供たちが駆け込んできて、店の大きなガラス窓に雨で濡れた顔やボールをこすりつけるが、雨足を見て再び走り出していく。
雨が細くなり、広場を足跡でも探すように歩いてくる男がいるが、彼は戻ってこない。虹色になって、光の大きな膜に包まれた外に、わたしは水に濡れたスポンジケーキそのものになってひとりで出て行く。
あれは赤池エマでした。場面は少しずつ細切れにされ、勝手な思い入れもあって、わたしの過去として、もうすぐ繋がらなくなる。

除雪隊の男が、再び受話器をもっている。
――人間の本心はね、電話を切った後でわかるものです。
――そんな、勝手な……。
わたしは絶句する。
――彼、様変わりですよ。あなたが好きだった、一度だってあなたを嫌ったことなどなかった。そう言っています。彼女にだけは、言いたいのに、どうしても愛していると言えなかったんだ、何故かわからないと……。彼は何時までも泣き止みません。
男がとまどっている。
――死んでからわかるのでは、遅いのよ。
そうだろうか？　微風が吹いていた。欄間に蛇がからまって這い回っている、狂気が忍び込んでくる、息苦しくなる。雪にけおされて空気は余りにも稀薄だ。
……みーつけた、あなたを、とうとう！
わたしは自分の感性の泣き声が、人生の底から、湧きあがるのを意識している。
――でも、彼は、結婚したのよ。
除雪隊の男が振り返えった。
――自分が、僕があなたを、幸せにしてあげます。僕が幸せにします。彼など、忘れるんだ！！

―――第２部―――

１１　火炎

朝、わたしの吐いた息を、男は大きく吸い込んで活気づく。生と死が首を並べて走っているのだ。わたしの少女が時の足に触れて、クスクス笑い転げる。

―――では、自分は、食糧を調達して来るであります！

食べ物が少なくなっているのだ。商店は恐らく一軒も開店してはいないだろう。それでも背をみせて出て行く男は、また習性のように戻ってくる。

―――もしかして、僕を追って隊から誰かが来たら、除雪をしてすぐに帰って行ったと、そう言って下さい。本当のことを言うんだから、慌てたり、迷ったりしないこと。いいですね、僕の命を、あなたに預けましたから……。

男は大袈裟に頷くと出て行く。かすかな不安と一緒に、かみしめる愛の告白。しかし二人の間には長田均が横たわっているのだ。

わたしは、気晴らしに、未曾有の大雪を記録としてフィルムに納めるため、冷たいカメラに目を押し当てる。髪から、つららを下げても、楽譜を追うときのように、鋭い目を集中させ注意をゆるめたりはしない。

白だけで、月の世界であるとも、南極であるとも、砂漠であるともいえる。白に焦点をあわせてシャッターを押しつづける。白が狂おしく舞う、白い鳥、白い雲、白い花びら、舞い下りる無数の魂が、舞い上がる無数の魂が刻印される。その音。

客間の上を人影がいく。大きな銀色の牛乳缶を積んだ橇を引いて、農民らしい男女が黙々と列をつくっていく。客間の屋根の上を斜めによぎる道は犬が作った道だ。

———歩かないで下さい。そこは、我が家の上です。わたしの祖父の家です。歩くなという権利がわたしにないとは言えないでしょう。

足を曲げたまま歩く人々の後ろから、わたしも街の方向に歩いていく。行く手で乳児が泣き声をあげ、若い女は道路にコートを広げて、乳児をおろしてしまう。重荷をおろした女は、男達と雑談をはじめる。列はそこで動かなくなる。乳児は温くんだ体で毛糸玉のような足を動かし、四つん這いになって敷物から出る。

———柔らかい頬に、雪は岩よりもかたいでしょう？

乳児は雪に頬をこすりつけてから、雪をなめる。
――なめても、捉えどころのない味でしょう。雪の核はゴミの味で、なめてもなめても、一滴の水ほどにも潤さなかったでしょう？
乳児は話しかけるわたしに向かって足をばたばたさせ、その反動で仰向けに転がってしまう。
――赤ん坊が死にますで、みんな簡単に死んでいますからの。あっというまに雪に首を突っ込んで。何人死んだか知っていなさるかい？　母親は何時でも、ぴったり赤ん坊に寄り添うてるもんですよ。やつらが来たら合図しますからの、そのときはおんぶしてくださいよ。
ダウンジャケットの端々から毛皮をはみ出している酪農組合長の男は、子供の母親と勘違いして、わたしに注意を与えている。
――　一週間も鉄道も国道も不通れすのに、まだ復旧の見込みもたたんのに、視察にくる大臣のためには特別列車が動くってことれすか？　こんなときに、ようそんなことが出来るもんれすのう。
――ということは、動かせば動かせるんでしょうか？　一般の列車が貨車も客車も全く動けねえってのは、どういうことれしょう？
――ポイントのほとんどが雪に埋もれて、凍結しているんですよ。
――ひとりも？　はあ、その列車にも、ひとりも？　一般の人は乗ってはならんと？　視察なんてもんは何時らって、人の困ってる時に、殿様気取りれすなあ！

こんなとき、除雪部隊には鉄の規律のようなものがあって、夜道に捨てられた大山脈ほどの雪は、今までになく手際よく処理される。そして鉄板を敷いた上を五台ほど、ぴっかぴっかに光る黒塗りの高級車がくる。駅から五百米ほどを、のろのろと。輝く雪の城壁の底、それでも除雪しきれずにある雪の上に敷かれた鉄板の道を。小雪ひとひらまとわず、鮮烈な光を発する車の列。

それは久しく見たことのないものだ。

城壁の上から防寒服にすっぽり身を包み込んだ男女何百人かが、息をつめて見下ろしている。鉄板の道路は、わたしのいる場所より右側、視察にそなえて、わざわざ雪のブロックを作って特別美的に、途方もなく高く積み上げた雪の大断崖の前で行き止り。先導車は鉄板の終点すれすれに止まる。二台目の車から降り立った男はチャンピオンか元首のように、にこやかに手を振っている。喝采で応えるものは何処にもいない。銀色の牛乳缶を足もとに置く農民たちは、大臣に向かって崖の上から出荷出来ないグチくをこぼしている。

視察者たちは皮のジャンパーに皮の長靴を穿き、皮の手袋の手で雪をたたく。土木工事の検査官のようだ。雪の城壁を見上げ口を開け、驚嘆している。

車と鉄板が、急に姿を現した太陽に反射光をつくる。それよりももっと、対岸の壁の反射光がはげしい。

———振り向くで、ほら、人気とりれすからの。こっち向きになったぞ、あの男れすわ、大臣は……。

――今手をあげた、あのむしったような髭の男か？
――よう見える。ほうら、あのおひとだと！
――これでは、警備がなっておらんなあ。
――茶色い馬皮みたいなジャンパーを着ている。毛皮の帽子を被らんうちに、やるとしましょうかの。
――ああ、バクロ――のような、あの男、あれに思い知らすんかね。
農民たちは大臣の頭上をめがけているのだ。
――いち、にっ、さん、そうれ！　乳業農民を殺すな！　乳業農民を殺すな！　乳業農家をつぶすな！　畜産農家を見殺しにするな！　農民を護れ！　農民を護れ！　そうれ！！
牛乳缶を傾けて、牛乳を流しはじめる。
コートの上の乳児は、上着とズボンの間があいて肌がでている。それ相応の身なりさえしていれば、何とか寒さを克服できる日なのだが、その母親は牛乳缶を傾け、大臣の頭上めがけて牛乳を流しているのだ。
わたしは赤ん坊のすっぽ抜けそうなズボンを上に引き上げてやり、初めて気づいたように悲鳴に近い叫びをあげる。
――おお、一杯下さい。この赤ちゃんが欲しがっています！　わたしも欲しいんです！　あやしいものではありません、売ってください！　もう七日間もミルクを飲んでいないんです。沢

山はいりません、牛乳瓶に一本でいいんです！　……待ってください！　捨てないで下さい！　わたしはミルクなしで困っているんですよ、どうして捨てるんです。何故です？　売って下さい！

――あんたさん、そんなこと言うて、この町のミルクを全部引き受けておくんなさるか？

――だからって、捨てることないでしょう。捨てるなら、ただで分けて下さってもいいでしょう。

――腐ったんらよ。みんな腐敗したんれす！　こぼしたって、どろどろで思うようには的に届かんのれす。残念れすよ。寒くったって、腐るもんは腐るんれす。さあ、退いておくんなさい！　牛乳風呂にもならんのれすから……。

わたしは女の逞しい二の腕ではじかれている。牛乳は酸臭と甘い匂いを漂わせて、崖の上から放り出すように流されている。見上げている大臣は頭上に届く寸前、軽々と身を交わす。

――昔、国体の選手らったさかい……変わり身の早さが身上れさあ！

牛乳は不器用に流され、ほとんど崖の雪にしみ込んで色も変えない。しかし、たっぷり牛乳を吸い込んでいる雪は、いつ雪崩れをうって崩れ去るか、しれたものではない。

牛乳缶が叩かれている。呼応するように対岸でも、ドラムのように牛乳缶がたたかれているが、音は不思議に高まらない。

視察団がそそくさと戻ると、すぐに道路は黒と黄のだんだら縞の交通止めで遮られる。道路に降りているのは除雪をしてくれたあの男だ。除雪隊のダンプカーがのろのろと動く。あれでは、

掴まってしまう。
男はダンプカーに押されて雪の壁をうがつかたちで居場所を確保する。押し付けられて背で断崖の雪をとかす。それでも男は次第に場所を移動していく。逃げるたびに雪の崖に体をぴったりへばりつけ、ぐいぐい背を圧しつけて、ダンプカーに道を譲り、雪の壁に、自分の鋳型を並べていく。
男はときどき、わたしのいる城壁を見あげる。男の逃走が遠くなり、虫のようにぴょこぴょこする。この道路の対岸の崖に、男の鋳型が何米置きに、いくつ並んだことだろう。男は機敏に動き、脱走し、ついに目的の帰途につくべく駅に辿りつくことができる。機転がきくのね。立ち往生している大臣の列車に身をひそめるのがねらいだ。もともと、自衛隊に入る人間を信用してなんかいない。最も、一ヵ月で脱走したのだと言ってはいたが……。自由を失うために、入ることが、入ったことがわたしとは異人種。でも、寂しさは蔽いがたい。わたしを恋したはずの男は、わたしを、こんなにもあっさりと放棄したのだ。
わたしにも自由な一人旅が残されていた。でも、あの男の後を追い同じ試みをする気はない。といって、何時旅立てるのか？
人が見える。祖父であるしるしをさがし、わたしの柩を探してみる。
色のない空、鳥の群れがいく。逆光のために灰色に見えるが、首を前に長く突き出し、大きな羽を広げて甘ったるい鳴き声を響かせる。湖面が見えないために行き惑っているのだ。

白鳥？　白鳥を見たと思い、白鳥と苦を共にしている気になる。鳥は群れのまま、何回も何回もわたしをかすめて、湖の上を行ったり来たりする。

男の笑い声が聞こえる。

――――どこにいっていたの？　湖が溢れていませんでした？　みんな雪を捨てにいっているのでしょう？

わたしは遠くから男に聞こえても聞こえなくともかまわないという声で話しかける。男は銀行の上あたりに倒れていて動かない。近づいてみる、男を起こすことも、引っ張ることも出来そうにない。酒の匂いがした。

――――こんなときに、営業しているお店があったの？　普通の日の続きみたいに、お店を開けていたのかしら？

聞いてみるが答えはない、男は眠っている。腕を通さずに羽織っているコートが男の肩からはずれ、カッパのように、男の下で平らになる。引っ張ってみるが、わたしの両腕が抜けてしまったとしても、この男を家まで引きずっていくことなど、とてもできそうにない。

雪がちらちら降り出している。寒さが刺すようにくれば、震えで目が醒めるだろう。あなたは上官の乗っている雪上車を狙うべきだったのよ。

暗くなってきている。まだ男が眠っているかどうか、夜を透かして見るが、雪はあちこちに黒

い塊をおいているようにも見えるし、全部白でおおい尽くしているようにも見える。男はもういなくなっているのかもしれない、呼ぶまえ、わたしの声は唇で凍ってしまう。

拡がる雪、暗くなりきれない夜、遥向こうに黒い塊が動く。犬だ！　人間の肉の匂いに、野性に返った犬が鼻を鳴らして近づいていく。わたしは生きているときの声で、

———死人を喰うな！　引き返すんだ！！

と怒鳴っている。

耳の中が鳴る。本当に男は凍死したのかもしれない。わたしに命を預けるとは、こんなことなの？　わたしは引き返し、彼を起こそうとする。彼は泥酔したまま微動だにしない。咄嗟に、わたしのダウンコートを彼に被せると、犬を追って走り出す。風雪がわたしに吹きつけ身体の芯まで凍えてしまう、白い闇はそんなわたしを抱きすくめる。次の瞬間、足を踏み外して雪穴に沈み、ついでのようにわが家に崩れ込んでいる。

祖父は雪の日に道路の真中で、行き倒れていた。

行き倒れた祖父の周囲で車の警笛が鳴りつづけていたが、祖父は今までに経験したこともないほどの快い眠りを眠ったのだという。世界がこうまで優しいものだったかと感激させられていた、八十年の眠りのなかで一番気持ちのよい眠りだった。

———あたためて、徐々に生き返らせるために、わしの体をこすったり叩いたりしている女の

乳房がぶるぶる震えているのが、なんとも言えんかった。凍死につづくあの恍惚感がなつかしい。
祖父はそれから何日もささやくような、聞こえないほどの小声しか出さなかった。
――咽が渇くの？　どこか痛むの、舌が凍傷になったのかしら、わたしが邪魔になるのね？
聞いても、祖父はなにも言わず、ただ、
――くたばりそこないが……。
いつまでも、いつまでも、自分のことを、くたばりぞこない、そう呼んでいた。

新雪がさらにふっくらと積もり、解剖された街が、なだらかな、なごやかな雪野になる。雪は全細胞をあげて、生物的な鼓動を刻んでいる。寒くも暖かくもなる。どの家でも穴が一つずつ穿たれていて、人々は雪の中から突然首を出し、信じられないかたちで消える。
わたしは雪の上を三百米ほど辿って、人だかりのしている地点に来ている。昔鉛筆型のパイルが何十本となく転がっていた広大な空き地の、多分何米か上、雀や赤とんぼの並んでいた電線の、もっと上、いま異常気象の暑さがもし戻ってくるならば、人も雪も、しぶきになって飛び散るだろう。そんな空間に人々は足を置いて、悲鳴もあげない。
――これから火炎放射器による除雪実験を行います。危険ですから実験地点に近寄らないで下さい。
スピーカーが怒鳴っている。

――ほんとうに、その火炎放射器とやらで雪をとかして下さるのですか。
人々は切実さのために寡黙になって見守るばかりだ。一木一草、虫一匹残さず焼く威力を持っている。兵器と名のつくものが、戦場でもないところで使われるのだ、みんな驚異の目を見張って待っている。
瞬時、火炎放射器は空に向かって試みに噴射される。黒煙でふちどられた真紅の、目もくらむ大火球ひとつ。試みというより、威嚇というように、もう一つ、空一杯の爆発。自分を焼き払われるのではないかと錯覚し、ひとびとは思わず大きく後退する。
――液体燃料を圧縮ガスと一緒に噴出させ、点火して放射するのです。
爆発音が走る。わたしに向かって火色が一気に突進し、があっと空気の全部を炎にする。わたしを宙に浮くごみほどにあっけなく炎にして飲み込んでしまう。くらんだ目の玉が、石だったみたいに残っていて開く。放射器は三十米もの火炎をのばしている。火炎の先端は、千度とも二千度ともしれない熱をもっているのだ……。
しかしよく見ると、燃え移るものを持たない火炎放射器による消雪実験の立会人としてすぐそばにいるつもりの心理的距離よりも、実際はずっと離れている物理的距離があるのかもしれない。なにしろ、地上を厚々と果てまで蔽った雪は大きく、それに挑戦する炎は、その対比において小さく、色を失ってしまう。
雪は平然として融けもしない。炎は雪に穴さえ穿たない。炎は雪に近づく前に方向をかえる。

雪に突き当たる前に炎であることを中止するのだ。みじめな黒い炎になる。見物人の不満の煙霧が除雪隊員に向かって飛んでいく。

――――なにをしている！

――――もう一度やるんだ！

目の底が痛んでくる。子供たちが浮かした足で、

――――ホウッ　ホウッ！

放射器の方向に白い息を放射する。火炎放射器は再度噴出する。無力を見くびり、炎に向かって子供たちは進んでいく。炎は子供たちに弾かれる。

炎と氷。冷たい量の膨大さに炎は小さくしぼんでしもう。まるで雪に開いた小さな穴に吸い込まれるように。

雪の中から、わずかに首を出している小枝があって、それを伝って、雪中深く埋もれている可燃物に火が回ったらめっけもの。例えば雪面下、棟続きの家々を炎が横に走りつづけて、陰に篭もった大火災になる。

現実では、雪は水のように対流もせずに、ただ、熱の絶縁体になってすましている。

二方から放射される火炎放射器の炎は、空間で合体して渦巻いているが、なかにどす黒い空虚が開いている。

――――雪を辱めるなよ。人間の卑しさが不愉快だ。こんな大雪は初めてでも、雪国の人間なら、

こんな姑息な手段はとらない。どこまで馬鹿げているんだ。
見物人が怒っている。わたしは火炎のなかで目を見開いて、あつい熱と冷たい汗にまみれている。いきつくところ、この豪雪は原子爆弾とかによってしか終わらないのではないだろうか。十一月なのに。晩秋といってもまだ秋なのに……。除雪隊は雪をトラックに積んで運び、川や湖に捨てに行くことに疲労してしまったのかもしれない。雪が湖や川のなかに積もって、すでに橋のらんかんを越えそうになっている。水が氾濫するかもしれない。火炎放射器が舌を出してこの雪山の表面を逃げる。
酔いどれ男が衆目の前で熱い尿をしている。
――――みんな一斉にやってみなせ！　この方がずっとよく雪を消しますえ。なんなら火炎放射器の火も消してあげましょうかの。
その男は周囲を窺い、見回して反応のなさに拍子抜けして帽子を目深に被り直す。
――――しかし、火によって海水の全部を蒸発させようと考えるアイデアに、似ているなあ！
男たちが話している。
――――解けはしないさ、燃料の無駄だよ。防衛費の無駄ですよ。
――――救援費でしょう。いずれにしても税金だ。
結局火炎は何の役にもたたなかった、
雪にはじかれて生きた色もない。陽の光が来て空に何日ぶりだろう、青が見える。目がくらむ。

急速に晴れ渡ってくる。火炎は薄汚れた影。
――――ははははは、は、ははは、は
誰かが笑い、
――――やっぱし、雪解けはおてんとうさまに頼みましょうや。十一月だもん、まさか根雪にはならんでしょうよ。
――――ははははははは、は、は、は、は、ははははは、は、は、は……
何人かが声を揃えて笑い崩れる。笑いは笑いを呼んで、白い地球を巻き込んで拡がっていく。陽光は妙に暑く、焼かれるようだ……。
わたしは自分の指先の陽炎にはっとする、わたしが燃える、祖父はわたしの遺体として見ず知らずの女の遺体を焼いている……。多分、きっと。

12　黒を結べ

わたしの力では、どうしても開かなくなっていた玄関の戸が、外から来る者達には簡単に開け

ることができるらしい。ざわざわと人々が我が家に出入りしている。どんなかたちの通路をつくったのか？

わたしは二階の一室に閉じこもっている。わずらわしいことは嫌だ。わたしの部屋以外は外とみなすこと。鉄道の開通する見込みはまだたっていない。手も足も出ないかたちで、わたしの遺体を引き取りにいったに違いない祖父を待っている。またも玄関に誰かが来ているらしい。道路も鉄道も不通と報じられている以上、祖父だとは思えない。

人々の声が遠のくのを待って階下に降りてみる。玄関に続く客間に献花が置いてある。大きな格子の、檜の障子戸を背景に一対の生花が盛られている。名札に反町多助と書かれている。電話帳を調べるが、この町に該当者の名はない。死んだのが本当のわたしでない以上、知らない人物が関わり合っていて当然だよ。不思議が方がおかしい。でも……。

座敷の障子戸を開けると、驚いたことに、座敷、仏間、居間の三部屋の間の襖が取り去られて、大きな部屋になっている。床の間にはきんきらりんの祭壇が作られているのだ。さっきの騒ぎは葬儀屋だったのだ。

まさかと思っていたけど……。祖父は死者を見てわたしであるかないか、見分けられなかったのだ。老衰した記憶のなかで、エマを見失っていたのだ。

ここは祖父の家でわたしの生まれ育った家、いわばわたしの家であった？　にもかかわらず、わたしよりも、玄関から新たに入ってきた者の方が家の中を良く知っているのか、以前は暗くて

雑然としていた台所のそばの部屋が整理され、ストーブの余熱を暖かく残している。
ストーブをつける。わたしの前面は火事になって燃え上がってくるのに、後面は大きなラッパの口が開き、冷気を一杯吹き込まれているようだ。体の芯までぞくぞくする。
――――これは……？
わたしは声をのんで自問する。写真が置いてある。額に入り、黒いリボンが結んである。いくぶん首を傾け、髪が片側にぱらりと広がっている。生真面目な心配を見せて張り詰めている眼。硬い口。これは中学生のころの写真ではないか。祭壇の中央に飾られる直前の緊張がそんな少女のわたしにある。少女は早死に。こんなに張り詰めた大きな目をしている。
わたしはどんよりした思いで、年をとった召使みたいに、リボンを結び直したり、ガラスを磨いてみたりする。ガラスがぞっとするほど冷たい。他殺された自殺志願の女のように、思いを持て余し、ストーブの前でこごえる。
――――これが……あなたなの？
わたしは問いかける。二階の窓から入り込んできたらしい男は、写真の少女を穴の開くほど見つめたまま、何も言わない。生きていたのだ。
――――自分の写真に、黒いリボンを結びたい人は沢山いるでしょう。
格好よく結び直すのに、手を火にかざしても、やっぱり手は寒さの皮を一枚余計に被っていてうまくいかない。額縁の四角のなか、出口を探しているような少女がいる。目をそらし、額を持

ち上げ裏返してみる。どこの写真屋で引き伸ばしたものか探るが、何の記入もない。写真に手を触れるのを止める、突き放す、警戒する。この少女の長所の全部はすでにわたしの持っていないものだ。

祭壇の上にはわたしの写真、下には横たわっているわたしの死体。どちらもわたしで、万事休すになるのだろうか？　わたしは体をストーブに向けて立ち、暖めては裏返しにする。暖まらない体は血のかわりに冷水が流れているらしく、氷を暖めているのに似ている。

写真を裏返し、ガラスの下に入れ直してしまう。それは白の四角にすぎない。白い空、白い雪の向こう、少女のわたしが消えている。これは現在のわたし。白で蔽われた抽象でもある。停電。

わたしの燈明にあおられて、闇のなかを泳いでいくのは、瞳孔の開ききったわたしの目。それは青白いガラスのなか。わたしは写真なんて、木の葉を振り落とすように振り落として生きてきたのだ。たった一枚がその木の全部を語ることなどできはしない。一枚のこらずわたしのものではないと断言できる。はらい落とした木の葉を寄せ集め、ついでに見知らぬ女のものとして火葬にする。

わたしがいま火葬にしてみたいと思っただけなのに、紙の燃焼する匂いがもう部屋中に立ち込めてしまう。燈明の匂いや線香の匂いとも違う。火事？　火気を探して、縁側から廊下を駆け抜ける。二階へ……。障子が赤い。二階の廊下に除雪隊の男がいて、煙が立ち込めている。

――――また、大変な降りになりましたよ。この熱で何とか雪が融けないものかと思ってね。寒冷地ではタイヤを焼いて冷害を防ぐといいますから。黒煙、赤い炎が大きく吹き出して空をおおうんですよ。どんどん新聞紙をねじってバケツの中に入れて下さい。

紙は燃えても、手をかざしてやっと柔らかいぬくもりがくる程度で、火力は雲まで行き着きそうにない。

――――臭気だけは、地上にこもるかもしれないけれど、熱となるとどうかしら……。

――――もっと何か、燃えるものはありませんか。僕が探してきてもいいですか？

新聞紙は意外にしめっていて煙る。むせることは痛いことだ。胸と頭がつぶれる、はじめて潜水をしたときのようだ。肺が破れたのではないかしら。男はもって来たものを、どさっとバケツのそばに投げ出す。板切れをいれると火がついて燃え上がる。祖父が暖冬のあいだ、折り曲げたまま下駄箱によれよれにして突っ込んでおいた長靴がひび割れている。片方しかないものも含めて三足。一足をバケツにいれる。火は消えたようになる、吹くと黒い紙が火の粉を散らして舞い上がる。

――――火鉢はありませんか？　もう一ところで焼くことにしましょう。きっと思いがけないほど強い火力になって燃え上がるでしょう。この際ですから臭いは少し我慢しましょう。

バケツの中のゴム長は二ミリほど燃えて泡を吹きながら消える。強い臭気だけが残る。わたしは鼻をつまんで階下に逃げる。

燈明がともって、ストーブの炎が大きくなっている。黒塗りの足の高い膳が高々と重ねてある。急須や湯のみがにぶく光っている。葬儀の支度が、わたしの見えないところで着々と整えられているのだ。

わたしの死んだあとで、わたしにとって、あの世の人物に近い人々によって、こんな形式が護られているのだ。

わたしの死んだ後で、わたしにとって、あの世の人物に近い人々によって、こんな形式が護られているものだとはしらなかったな。

———ひとつ、こっくり、さあ……。

台所で人声がする。はじめてこの家の廊下で年配の男二人とすれ違う。

———ご苦労さまでございました。

彼らはわたしを見ても驚きもせずに挨拶していく。動員された教え子くらいの認識だろう。わたしが彼らの一人も思い出せないように、彼らにもわたしの正体がわかっていない。よそものに対するときには、不思議とラ行はかくれんぼする。

そんなら気楽だ。わたしもその部屋に入っていく。祭壇の前から話し声が聞こえる。男が四五人頭を寄せている。

———費用はとりあえず……細々した分はたてかえておかねばならんれしょうな。

———そうやって欲しいと爺様も電話で言っておられましたわ。大きいものは葬式の後でええ

だろうが……。
――出来たら葬式は一度の出費で済ませたいもんらと、じいさまがいうておられましたなあ。
――爺様のも一緒にしたいってことれるかえ？
――そうはいくめえ、いくら爺様れも、生きているうちに葬式をだすわけにはいくめえて。
――保険金は葬式費用でまるまる消えるれしょうし……。
――山でも売ったらよかろう、孫娘がなくなったんなら、何ひとつ惜しいものはあるまいて。
――爺様も、近頃じゃタバコの火をこぼしても気がつかんで、十回の余も焼け焦げを作りなさったんれすよ。うちの婆さんがいうてましたが……。
――歩みもままにならんお人が、孫娘の遺体を引き取りに言ったって、どうせ一人で何もかもうまくやりおおせて帰るはずもなかろう、わかっておるんだが、あとでいくつもりが、この雪ではどうにもならんでのう。どうしていなさることか、心配だが……。
――まったくたまげた、ただならん雪れすのう。このまま不通がつづいたら、どうなるやら。
――死体が腐ってしもうってことれすか？
――それより、爺様が立往生した車のなかれ、死んじまうなんてことにゃなるまいかの。
わたしはここにいて死んでなぞいない！　口があって声が出る以上、何時だって叫びをあげることができる。誰かに担がれているんでしょう……。もう少しの辛抱だ、その瞬間が楽しみにもなる。わたしは片手にわたしの一生を握り、もう一方の手でもう一つの一生を盗んでいるのだ。

まだどっちも手放していない。
祖父はわたしの死を希望していたのかもしれません。あなたたちをかついだというより、願望を実現したものと思ってもいいんです。
もう、飛び出していって、大声で、わたしが死者だといって驚かしてやりたいと思う。但し、やりかたに問題があるだろう。……間違うと……、驚きではなく笑いに終わってしまうだろうから……。下手をしたら、主犯も共犯もわたしだと思われてしまう。
――――悪い冗談れすな。死者が甦って見せるなどと……。
彼らに捕らえられ、嘲られ、糾弾されるよりは……、このままでいる。力になってくれる知人や友人の一人も思い出せない。相手が子供ばかりなら、ぱっと彼らの目の前に跳び出し、わたしがわたしであることを、勝ち誇っていい立場なのだけれど、冗談のわからないものたちは怖い。
わたしは部屋のすみにいて、心もとなく、赤裸という気がしている、皮をむかれてしまった兎みたいだ。部屋を出る、女が三人会釈していく。どの顔にもやはり見覚えはない。
祖父の仕事部屋に足をはこんでいく。祖父の上着が下着も重ねたまま、椅子の上に転がっている。白い綿のシャツの上にメリヤス、その上にラクダシャツ、その上にセーター、その上にルパシカ、まるでクッションのようにそこにある。これではこの寒さを予測していたような服装だ。記憶を蘇らせてみると、この家にすでにこんな脱け殻が三つ。どれもそれほど汚れてはいない。脱皮したように脱いで、祖父は何かを倹約していたのだろう。発見や工夫のつもりかもしれない。

こんな風に脱げること、このまま着ることができるのが得意なのだ。これだけの衣裳を捨てて、祖父はともすると夏姿かもしれない。

母の嫁入り道具のタンスが居間からこんなところに移されている。あの中に大きな桐箱入りの鼈甲や金銀の装身具、祖父の趣味で彫った象牙やサンゴの細工物が入っていたはずだ。開けてみるがもうない。畳はカビを吹いているが、二枚を残して見慣れた市松模様の上敷きにおおわれている。床の間の砂ずりの壁から黒くぴかぴか光る砂粒が落ちつづけている。山水の掛け軸を持ち上げると、ところどころ雨漏りのために砂が落ちて、壁土の黄色い肌を見せて流れている。えぐれたり、浅くなったりして枝分かれし、中州を残して床に流れ込んでいる。川の中に小さな魚の群れのような薄黒いものが動く。

もっと見つめると、それはノミのようなものだ引っかいて作った川だ。下の方はことに大きく傷つけられて、まるで今工事中というように引っ込んでいる。そのために上の方の大きな壁が、まるで振り子のように動く。川にも見える傷も意図を持って彫られたものなのかもしれない。祖父は気がふれたのか？　それとも変わった手法の壁面でももくろんでいるのだろうか。いずれにしても老いても老いても残されている時間に苦しめられていたのに違いない。

ここでも彼らの話し声が聞こえて来るはずだが、全く聞こえて来ない。死んだわたしについて語るべき何ものも彼らはもっていないのだ。

――こうしていても、どうしようもありませんよ。
やっと若者らしい声がする。
――国道がこれじゃ、爺様は仏様を焼いてから帰られるでしょう。そうなら葬式も簡単になりますな。
――この降りでも、この家は頑丈にできているから大丈夫でしょう。我が家が潰れてしまわんうちにまずは帰りましょうかの。
――どなたか、この家の除雪をしてくださったようですな。いや、気にはしていたんですが、まずはよかった。
――潰れたらことでしたのう。
――ほんとじゃ。じゃあ、また出直すとしましょうや。携帯で連絡してこられるでしょうから、そしたら連絡しますで……。
――こっちには、こっちの都合がありますからの。
室内の温度が上がったのだろう。廊下のひびの入った暗いガラスの内側に湯気がとりつき、曇りガラスになって、時々、チンというような意表外の音を響かせる。
この家の階下から人の気配が消えてしまう。人々はわたしに何の違和感ももっていない。内気な女達は目を伏せて通りすぎながら、なんとも言えない親しみを見せたりする。わたしは不用意に十五歳のときのセーターを取り出して着ているのに、わたしが誰であるかを知ろうともしない。

わたしも彼らが誰であるのか知ろうともしない。わたしも彼らが誰であるか知らない。ここはもう新しい住人の町だ。わたしがこの町を出たのは、高校入学の年だから、様変わりして不思議のない時間が経過している。

誰もいなくなった。わたしがガラス戸に頭をつけると、ガラスはしぶい音をたてて中央部でへこむ。へこみのなかにわたしの祭壇が映っている。

———花の贈り物をもらうなんて、はじめて。それが葬式のときだなんて、……消え入る思いなのに、まるで自分が誰かを殺し終わった犯人であるかのような気もするんだから……。

わたしは幾夜この家ですごしたのか分からなくなっている。これからは花のしおれかたで、日時が空しく過ぎるのを思い知らされることになるかもしれない。

やっぱり、遺体は焼かれてしまうらしい。これで永久に遺体の身元がわからなくなる。まさかそんなひどいことが……。受話器をとり、電話して見ようとするが、何回持ち上げてみても全く反応がない。

———お祖父さまは故意にわたしを棄てたのかしら？

———長田均とかいうやつを捨ててしまえということじゃありませんか。

わたしはびっくりして男を見つめる。除雪してきたらしい男の髪が暖房の熱で立ち上がり、ざんばらになっていく、かすかな動きを見ている。

———どうにもなるんでしょう？　自由自在なんでしょう。あなたは長田を捨てて、お祖父さ

まをとった。そう聴きとりましたよ。
――なんですって？　何から聴き取ったというの？
男はわたしの手をとろうとする、わたしは飛び退く。少しストーブからはなれると、寒さで耳が引っ張られるようにびんびん鳴る。男は陽気に口笛をふく、笑い声がはじける。
――ほうら、これをみて！！　部隊長らのロレックスですよ。束になって落ちていたんだ。大事を取りすぎて、馬鹿なやつらです。
彼に掛けてやった、わたしのダウンコートと、自分のコートのポケットから、チーズやハムやベーコンをまるで手品師のように、取り出してみせる。
――あなたは盗……。
わたしは言いかけた、盗人を呑み込んで、笑い出してしまう。
――おかしなひと！
命を失っているわたしに、法を破ることに抵抗感などない。それは法にふれるとしても、冒険のような快感。むしろ、法を護るために自由を失う方が怖い。
彼にはわたしの頭を愛おしそうに、くしゃくしゃにすると、投げ捨てていたコートを羽織って、自分の身体に戻った。
――その調子ですよ。あなたは、怖いものを知らないところがいい！
男はウインクをし、そっと身体をよせてきて、わたしをコートで蔽うってしまう。わたしは暗

がりのなかで、耳のそばからヘヤピンを一本とると斜にかまえる。

13　そして見えなくなる

聞こうとしていながら、何といっていいか、電話の前でとまどってしまう。回線の故障が回復し、思いがけないことに通じているのだ。わたしが死んだとお聞きになりませんでしたか？　これでは口はばかれる、すばやく管理人が電話に出ている。

――あのう、赤池長三郎という年寄りがそちらにお伺い致しませんでしたでしょうか？

わたしは用心深くいう。

――ああ、いらっしゃいましたよ、きっとその方ですよ、お名前はちょっと忘れましたけれど、ああ、赤池さんでしょうね、十号室のあの方のお祖父さまですから、そうなります。特徴ですか？　特徴は白髪で、眉の骨が帽子のつばみたいに突き出して、その上に大きな翼のような眉毛がありましたよ。目玉はくぼみ、睫は殆どないけれど、眉はその目玉を襲うものを見張り番していて、左右に、上下に、抜け目なく動いていました。ほんとに緊張のきわみという風でしたよ。そうそう、孫娘が病院で亡くなったから、持ち物を引き取って帰るとおっしゃっていました。あ

とで十号室に運送屋をよこすとおっしゃってお帰りでした。
――いつのことですか？　そこに住んでいたのはどんな方でした？
――どなたかって、赤池エマさんですよ。しばらくお祖父さまとお話しましたわ。孫娘というものは、可愛いいというより、生あるものへの哀れみ、というようなものだとおっしゃっていましたね。怪我をさせたくない、だから、そっと壊さないようにしておきたい。そんなものだと。泣き声が恐ろしい、だから泣かせたくない、そんなものでしたな。そうおっしゃっていました。
――贋者臭くはありませんでしたか？　嘘をついているようには感じませんでしたか？
――贋者としても、あぶらを含んだ指紋など残さないだろうというほどに枯れていらっしゃいましたけれど……、何か……。
――わたしが赤池エマです。
――何ですって？　冗談は止めてくださいませね。さんざ、話をさせて、材料を仕入れた挙句、亡霊のまねをするなんて。赤池エマさんはここから救急車で運ばれたんですよ。
――やっぱり、あの女が……。
――あの時は大変でした。ええ、それで、病院で亡くなったんですよ。わたしが証人です。あんなに早く亡くなったなんて、本当に可哀そうなことでしたわ。あなたは誰？　どなたなんです？　なにがなんだっておっしゃるおつもりなんですか？　何処からお電話しておいでですか？　天国ですの？　それとも地獄？

――雪のなかです。
わたしは答える。管理人は笑い出す。
――お寒いことね。お風邪をひかないようになさって下さいませね。死んだあとからでは遅まきながらのお節介ですけれど。わたしはね、知っている有名人の死を死亡欄で見ますのよ。死んだろうと思う頃、たいていしんでいますのよ。それで、もう、絶対に、現れることなんかなっかったものですよ。
――それで、わたしの荷物は？　ピアノは？
――あなたのは知りませんけど、赤池さんのなら、もう何一つありませんですよ。
わたしは解せない思いで周囲をみる。わたしの所有していた品物まで……。ここにも、あそこにも、ない。
――何もかも、すっかりなくなったのですか。
疑惑に口ごもっていう。どこにも所有物がなくなった、これが死ぬなどということの大部分かもしれないのだ。
――消えたですって？　病院で普通に急性肺炎で死んだんですよ。
――その病院では死ぬのが普通なんでしょうか？
――もし、あなたが赤池エマさんなら、それがもし本当なら、素敵なことに違いありませんよ、生きているうちに香典をもらっての楽な死亡、うらやましいこと。保険証がありましたから、

退職なさった会社の方にも連絡して、何人かお見えでしたよ。ええ、わたしも香典をだしましたのよ、返して下さいますね。おほほ、おたがい、あの世なんて嫌いですわね。わたしの場合、食わず嫌いというものでしょうが。

――あのォ、だから赤池エマは生きています。あの部屋はわたしの部屋です。わたしがずっとお借りしていたんです。そのまま他の人を入れないでおいて下さい。

かたい乾いた音が乱れる。管理人のところに誰か来たらしい。

――とにかくわたしは忙しいんですよ、何時までもあなたのお遊びのお相手は出来ませんのよ。部屋代のことなら心配いりません、赤池さんのお祖父さまが払ってお帰りになりました。切りますよ、いい加減にしなさい。

電話は管理人の手で一方的にきられてしまう。

死のあった家のなかは、日暮れても、明るく光っているものだが、何時までもふわふわしている。それは超自然が暴力を振るうように、わたしの瞼の中にまで入り込む。

あの女が亡くなったのだ、わたしの名をすっぽり着込んで。あの女であってわたしでないと言い切れるか？　自分が亡くなっているかどうかは自分ではいくら考えてもわからないことなのだろう。しかし、死んでいるならいると決断するのは自分以外にいようがない気もする。そしてそれも何とでも決断できることなのだ。

祖父の車は動けなくなっている。雪の積もった底の方にいる、祖父はそれでも埋もれてしまった前の車の尾灯を見る。ギアを入れる、アクセルを踏む、タイヤ模様を雪の中深く撒き散らしながら沈んでいくばかりだ。

あそらく祖父とわたしの間は雪だけで連なっており、雪は延び縮を繰返している。つかむように縮むと、この家の骨が折れてミシミシというのだ。

――――ん？

一音だけが中途半端に高い音で終わる声がして、咳が聞こえる。誰かがいるのだ、この音は家ががたついて来た為に、歩くと起こる音でもある。

――――……はや、夢と過ぎ、わが孫世を去りて、あの世に楽しくねむり……。

祖父の声はとても八十過ぎの老人とは思えない。はずれてはいるが、いまも陽気でさえある。

――――チェーンはしっかり巻いてあるな。

鼓膜の破れたあとのように、すべての音が掻き消える。わたしは跳び出さなかったことを後悔する。想いを追い駆けて、階段を駆け降り廊下を鈎型に走って玄関に出る。

高い高い雪のゲートの間の五米ほどの幅しかない谷間に、また新雪が七十糎も積もっている。冷えたエンジンを動かすのに苦労している音が聞こえる。音は遠く、降りしきる雪の幕に吸収されて、小部分しか音にならない。わたしの知らない祖父の身内がいて、瓜二つなのだろうか。どんな方法で帰ってきたか、帰り着いた祖父がいち早くわたしがいるのを嗅ぎつけて、急遽、遺骨

と一緒に避難していったというようなこともありうるのではないか。

いままでは、とりかしのつく間違いに過ぎないと思っていた。どこかのたがが縁遠い人物と考えていた。あの女である証拠の全部を焼かれてしまうことなど、一度も考えつかないでいた。いま、あんなわずかなふれあい、忘れ去って平気だった瞬間を逐一思い出し、小さな手掛かりを探さなければならない。

――あの女をわたしの部屋に休ませてあげただけなのよ。死ぬとき、人は他人を巻き添いにしたくなるだろうとは思っていたわ……。でもモラルというものが、死ぬときだってあるでしょう……。

――びくびくするなって。

除雪隊の男が背をたたく。

――わたしの命が、他人に持て遊ばれるのは嫌。自分がこんなにも無防備だなんて……。

――人間真面目に考えれば、死は友だちであっても敵ではないことに思い当たるんだろうが……。あなたは生きているんだから、あなたが傷つけられることではないさ。

男の言葉づかいが乱暴になっている。

――たぶん、わたしの死亡診断書が出たんです。確かよ、死亡届ももう出ているのかもしれない。

――紙の上のことだろう。
男は辛抱強い微笑で顔をほころばせる。いつのまにかわたしに寄り添ってきている。
――そりゃ、わたしだって、ただじゃ死にたくないわ。死んだ者はみんな何かをやっつけてから死んでいるのかもしれないのに……、やられっ放しで生き残っているわたしは、どうせ大間抜けですもん。
――僕に、してあげられることが何かあるかな？　何でもしてあげますよ。そのつもりで来たんだから。しかし、脱走者じゃどうにもならないかなあ。
男は相槌にもならない言葉を漏らしている。家がミシッといい、男は廊下を振り返る。何を見ているのかわかる。中を窺っている人影、そんなものはない。高々と天につくまで降りに降り、積もりに積もりつづけてているのだ。雪以外の何ものもない。光さえ少し。
――もう、どんな入り口もなくなっているわ……。たったあれだけのこと、わたしの部屋に休ませてあげただけなのに……。
わたしは言いつづける。
――それにしても、そんなに簡単に、女の子は自分の保険証を、他人に貸すものかねえ？　言っても始まらないが、いざというとき、あなたは他人のいいなりになるんだね。つまり、何だかんだ言っても、独立していないんだよ！
――……。

――あくまでも書類上のことさ。
男は何時の間にか祖父のルパシカを着込んでいて、窮屈そうに首を伸ばす。
――火葬にするときは……たぶん、現住所か本籍地で火葬許可証とか埋葬許可証とかいうものをもらうのだろうな。
――わたしがすべての根拠を失ってしまったのだと言うの？　わたしの住みつづけられる場所はどこにもなくなったと言うの？
――そう、今ごろ住民票も抹殺されただろうな、しかしそれも書類上のことさ。
わたしに対する男の受け答えは妙に事務的になる、そのくせ、根本からわたしを揺さぶってくる。男は身体を引きずり上げるように丈高くする。
――ところで、その女の名前や住所はわかっているんだろうね。
わたしは首を振る。
――何にも知らない、知っているのはサトウという姓だけ。
――サトウだって？　アホ、そんなの日本で一番多い姓じゃないか！　参ったなあ。どうする？　身元調査が首尾よくいくとはとても考えられないな……。勤務先は？　保険証を借りるんじゃ、お勤めしていないんだろう？
――そんなこと平気よ。わたしが死んでも、祖父は生きているのよ。祖父がわたしを忘れてしまうはずがないんだから。その人の身元がわからなくとも、わたしは無事なのよ。

――そうかなあ、お祖父さんはあなたを忘れてしまったのさ。しかし、それは問題じゃない、お祖父さんはあなたを見れば、自分の間違いに気づくだろう。そしたら、あなたを赤池エマだと言ってくれるだろう。

――でも、心配になってきたわ。祖父は一度決めたことは取り消さないたちなのよ。わたしの葬儀を楽しみに生きていたのよ！

――……。

――あの女は赤い玉薬を一日何十錠も飲むといっていたわ。それが手掛かりになると思うの。

――そんな！　馬鹿な、そんなことが手掛かりになるかよ。全く、ことの重大さがわかっていないな。いいか、あなたの戸籍には大きく黒々とバッテンがつけられるんだよ。遅かれ早かれ誰もそうなる運命でもあるけど……。

心もとなかった、世慣れしていない自分自身が……。

――それじゃあ、わたしひとり死に直面した土壇場ってものがないじゃありませんか、わたしだって只じゃ死ねない！　わたし、保険証をかしてっていわれて、貸しただけなのよ？　部屋に休ませてあげただけなのに？　それだけのことでいちいち死んではいられない！

男はさっきよりもずっと姿勢を高くして、わたしを見下ろしている。普通人よりも何本か多くありそうな両手の指を折り、ぽきぽきと派手な音をたてる。

――あなただって、脱走だなんて、囚人みたいね、どうにもなる立場を脱走と名づけて、あ

なたは楽しんでいるのよ。
わたしは男を警戒する。その頬が桃色に赤らみ、妙に鋭い目付きになる。
———死の土壇場というものは……。男は口ごもる。
———あなたは軽率だった。その女を部屋に入れたように、今、また、こうして、見ず知らずの男を家に招きいれている。死の土壇場というものは……。
男は口ごもる。
———それにいま、直面しているんだ、……ほら……いま！
わたしはそのままの姿勢で、微かに震えている男の豆だらけの両手を見つめている。男は空の両手を蟹の鋏のように肘を張ってかまえている。わたしの首はいま薄着でいつもより細く一握りだろう。視線のぶつかった空間の一点で男と一緒に呼吸をする。
———戸籍が消えているから？　もう二度と死ねないから？　あらかじめ殺人犯にならないことがわかっているから？　悪ふざけはしないで！　なにもすることはいらないじゃない、死んだ者を、もう一度殺すなんてできないでしょう？　その構えは止めて！
男は息をためこみ、息を殺している。視線を合わせているのが息苦しくなっているようだ。にらみ合う力が引き潮のように衰えていく。男は息を大きく吐く。家の屋台骨が揺らぐようだ。
———ドドッド、ドッドーン
音が響く。男の腕の構えが崩れ落ち、その顔がやわらぐ。

わたしは二三歩あとずさりをし、素早く柱から天井に目を走らせる。

――――全く、何もわかっていないんだから。あきれたお嬢さんだ……。でも、僕は我慢はしない！

暖かくなっている。凍りついた皮膚が一遍に融けて、汗のスープのなかを泳いでいるようだ。葬式というお祭り騒ぎのミコシにはなりたくない。豪華でも白いばかりの冬に花をそえてあげたいとは思うけれど……。わたしはひとりのお祭り騒ぎをする。お葬式用？　の酒でほろ酔い加減、その熱さで暖かいのかもしれない。眼が廻る度に、わたしの皮膚は赤味を消して、もう一度目覚める。

わたしは家のなかをぶらぶらし、自分の笑い声だとは信じられないほど良く笑う。祖父はあの女を見て、エマは死んで醜くなったと思ったのだろうか？　美しくなったと思ったのだろうか？

玄関を出て、新雪でまたもふさがれてしまった長いトンネルを掘る。雪にまみれて目が見えなくなっていくようだ。

外側から、誰か、例えば祖父が掘り進んでくる音がしているようでもある。わたしはここにあるかないかのちっぽけな栄養不良の小学生のように、心細くなって鼻をくすくすいわせる。知らないうちに、誰かの策略で誘い込また墓穴という気もしないでもない。引き返せばなおそうなる可能性が大きい。止まるとわたしは苦しい塊であるが、しみじみと落ち着くとおだやかに閉ざさ

れある。
雪を上につきぬけると、雑多な音になって生き返る。この光景は初めてみるようでもあるし、初めてでないようにも感じる。歩いていく人々は、早や変わりする陽射しに、人だったり、影だったりする。
わたしは眼をつぶる。いくつも緑や赤の輪がさまよいながら、わたしの前をよぎっていく。
突然わたしは、四方から迷彩色の大男に囲まれている。一人が上からわたしの肩を押さえ込む。生死の一線をこえたばかりの新品の死者には、体温があって揺さぶられている。
――――此処に来たことは、わかっているんだ。除雪隊の男は何処にいる？　隠したら罪になるぞ！
自然の時間を破壊して悪意が差し込まれる。わたしは、あの男の命を預かっているのだ。
――――さあ、除雪して、すぐに隊にもどられました。何日も前のことです。
わたしは、眼を上げて男たち見る。疑わしげな男たちの、こすっからい眼が縦についている。
――――本当です。邪魔をしないで下さい。我が家はこれから、葬式なんです。準備で大変なんですから……。
隊長らしい男が顎をしゃくると、二人の男が乱暴に家の中に入り込んでいく。
――――やっぱり、来たんですね。この雪の積み方を見れば、わかります。確かであります！
――――ガラクタでも誇りはもっているさ。やつは、この機会を狙っていたのかもしれない。彼

の前歴を洗って見てくれ。何か機密が奪われてはいないか？犯罪歴はなかったか？
残っている男たちが頭をつき合わせている。二人の隊員が戻ってくる。
――祭壇がつくられています。準備も進んでいるようです。嘘ではないと……。やつは何処にも見当たりません。
――どこかの隊に紛れ込んだのかもしれないな。奴はもともと何かを探るために、または暫くの隠れ家として隊を選んだのかもしれない。急ぐんだ！　何か貴重なものが奪われたのかもしれない……。わが隊の汚点になる前に、捕らえなければ！
――奴が来たら、すぐに隊に戻るように伝えて下さい。ぐるになって裏切るなら、女だからって、ただじゃおかない！　いいな！
――まるで、ヤクザね！
――なんだと！
わたしは突き飛ばされている。男たちはわたしが命がけで作った出口を、木っ端微塵に踏みにじって行ってしまう。あの男は何処に行ったのだろう。動物のような臭覚で、いち早く逃げ延びたのかもしれない。白のなか影が動く。
眼を開けて見据えると、大きな柩を囲んで、喪服の人たちがいく。大気は透明で形と強さがあり、その圧力で圧倒されそうになる。衰弱した空が倒れて来る。

わたしは雪の斜面にいる。雪に足を埋め、いま誕生した場所から外を望むというように立っている。　遥下に転げ落ちていきそうになり、風のおとだけに包まれる。

先方に小さなテントが見え、食糧をうっているようだ。わたしは未知の世界に臆病になる。華やかなざわめきが耳につき、足を真っ直ぐに立て直そうとするが動かない。わたしは身じろぎしないで前方を見る。

二列、あるいは三列の縦隊をなして三十人ほどが行く。その顔はいま幕を上げ、芝居を始めたばかりの者たちのように無表情だ。ひとは大勢死んでいるらしい。わたしは自分の葬式を見るように胸をうたれてしまう。

羞恥心がうまれる。喪服以外の華やいだ服装のひとたちも行くのだが、その人たちのほうが、むしろ喪服の人々の身振りをまねている影に見える。死花を持った男が気さくに挨拶しながら花で雪を掃いていく、空気は窒息しそうな水に似ている。子供達が、わたしを標的にして投げる雪玉は重く飛んで空中でぶつかり、割れて落ちる。

葬列が雪のなかに突然掻き消える。白い起伏のなか、駅の方からもう一つ人影がくる。影はゆっくりとしていて、なかなか進まない。横揺れし、立ち止まり、肩を右に極端に傾斜させ、黒いフロックコートの胸に白い箱を抱えている。祖父だ！！　祖父はとめどなくゆらゆらし、とどまっているのか、歩いているのか判断できないくらいだ。わたしは祖父の消えそうな命の炎を見る

ようにそれを見ている。
祖父の一歩は五糎とも十糎ともいえない歩調で、上体が歩くたびに左右に大きく揺さぶられる。そのあいまいな一歩が、もうすぐ細い生死の一線を越えてしまいそうだ。
いま、祖父の胸にかけられた箱のなかで、一緒に揺れている骨は、彼と縁もゆかりもないもので、わたしのものではない。遅々としていても動いている祖父の後ろ姿が、わたしの眼のなかで滲み、大量の白のなかに染み込むように見えなくなる。
はっとして、わたしは追い駆ける。
――――お祖父さま！　エマは此処よ！
わたしは叫ぶ。
――――お祖父さま！　本もののエマは此処です！
わたしは走り寄っていく。祖父が振り向く、振り向いている。
――――お祖父さま！！
振り向いた勢いで、雪に足を取られたのか、祖父は転倒したまま、わたしの手を払おうとして、抱いていた白い包みを手ばなしてしまう。
祖父はからっぽの胸を掻き抱くと、目をかっと見開いたまま動かなくなる。
祖父の顔の上に粉雪が積もり始め、人々が祖父を囲み、わたしは、はじき出される。

救急車の音が近づいて来る。

――――第３部――――

１４　二生目の旅・伝言

一生目が終わり、二生目を生き始めた、そんな具合に、わたしは何処へでも、どんな風にでも、行くことのできる自由を得ている。

列車が動いているのだ。シューシューと車窓を粉雪がかすめていく。地を這う列車の中で、翼をはばたき、ぐらりぐらり、車体を操っているのは、あの女だ。まだ何一つ書き込みのない白い地図の上または中を、わたしを乗せた列車は進んでいく。ときに行く手の空全体が落ち込んで、白い峰が盛り上がる。

わたしは消えてしまったんだなと思う。しかし忘れられなければならないのは一生目、二生目

の服を身につけても、復讐でもするように以前とそっくりの皺をつくることになりはしないか……。大きい白、重い白から脱け出て、……また赤……赤池エマなどと口走るのでは……。

到着している。歩き始めの数米が果てしもなく遥かだ。しだいに伸びやかに和らぎ、身体がすべすべと動き出す。ホテルの前、紫色の婦人が指を一本たてると、黄色い男がそそくさと近寄って行き、笑いながらスーツケースを運んで行く。わたしの白い包みと旅行鞄を持っているボーイは、持った手を身体よりずっと前方にはなし、背中はホールの柱に持たせかけたまま、妙に女っぽい高音でまくし立てる。

――――これはフロントに預けておきなさいませ。これはフロントに預けておくべきです。

わたしの荷物の中身が分かってしまったのだろうか、若い女に使われることを拒否して、さぼっているのだろうか。言葉に行き違いがあって、わたしに通じていないのかもしれない。ボーイは鼻の下のひげを中指と親指でひねりあげていたが、話がわたしに通じていないのかもしれないと思い直したのか、それでも部屋に案内していく。

ベルトレスのズボン、赤いソックスをにょっきり出したサンダルばきだ。部屋の鍵をあける。ボーイはオレンジ色のテーブルクロスの上に白い包みを置き、身体の向きを変えて、わたしを不審そうに見る。

窓を開けると、湿気のない、さらさらの空気が部屋中に充ちてしまう。ホテルの庭園の向こう、

平たい屋根の街並みが見える。室内にはセミダブルの木製のベッド、背の低い椅子、楕円形の鏡台、どの脚にも半獣神の彫刻が巻きついている。片側は赤と青の入り混じった壁。妙な雰囲気のある部屋だが街に向かって二方が開いているのが救いだ。雪の町からいきなり、此処に来たことが現実感を欠いているから、室内を歩き回っても足が宙に浮いてしまう。

わたしは白い包みをひとつ持ってホテルを出る。

新しい出発だというのに、これをなくするのが怖い？　以前に戻る唯一の手がかりとして残しておきたい。

スプリンクラーのある庭。水を吹き上げている陰で、数人の老人が背中を見せて休んでいる。ぶどう棚には、しぼをよせた薄緑の実がきらきら輝き、下には一米幅ほどの小川が、柔らかい緑色に縁取られて緩慢に流れ、魚が水面に鼻面を揃えているのが見える。菜園のまだ小さな、スイカや、トマトやキュウリのなかに暑熱がくぐっていく。

芝生を踏んで小川沿いを歩いてみる。遠くからバーベキューの匂いが風に乗ってくる。わたしは庭園ごと魔法のカーペットに乗ってただよっていく。

突然、大きな手が、まるでわたしを遮るように脇から伸びる。よく見ればわたしの着ている服の袖口から出ているわたしの手が、陽光で白く浮き出ているのだ。

わたしの手がわたし自身に危害を加えかねないことに、はじめて物心がついたように驚いてしまう。長い間、こんな妨害を妨害とも思わず暮らしつづけるために、異議の刈り取りをおこなっ

ていたのだ。

街路に出る。両側にはどっしりとした木や石の家が続いているが、一様に呼吸するように上下し、今醒めたように横揺れする。世界は今までと違う動きとリズムを持ち始める。

今まで無神経にも、自分の体の構造や動作、進行方向にある物体と自分の体の関係など、考えてもみなかったけれど、いま、テレビカメラになって歩いているようによくわかる。この都会はわたしの歩調とあわせて、どんなにも揺れるのだ。これが本当に正確で、正常な感覚なのね。今までが幻覚のなかにいたのよ。

何か発見したような様変わりの楽しさを感じて歩く。市街が揺れ動き、その度にわたしが息をしている。わたしはこの身体である乗り物に乗って移動しているのだ。

熱を帯びたわたしの目はむくみ、柔らかく何処にでも融けいりそう。ただ、わたしがこの人体に乗っているだけなのか、運転し、動かしているのか、決めなければならない。

咳をする、しかし、歩き出せば咳をすることも、自転車を漕ぐようなことではないか。

街路樹の陰に、ごく旧式な体重計がおいてあり、おもりを加えたり取ったりする中年女は、道路を行く誰よりも太っている。

測定しなければ歩道を歩くことが出来ないというふうに、にらみをきかせて腰掛けている。車道に降り、体重計を避けていく者も、すぐにスカーフの端をつかまれてしまう。

料金がとられている、女は男の半額。わたしはこの乗り物でもあるわたしの目方を気にして、ひょいと計りの上に、わたしを丸ごと乗っけている。

———足裏の図の上にお立ちなさい。動かないで。

計量する中年女は白い包みを取り上げ、体重計の上にわたしを押さえつける。わたしを丸ごと乗せていながら、肩からぶらさがる、その手が手ぶらで、なにか大切な目方が抜きになっている気がする。

———わたしはこうしていても、重いからと言って、恥ずかしかったことも、損をしたこともありませんよ。あなただって、軽いからといって、不自由はないんでしょう。何かを付け加えて貫禄をつけたいなどと思うのは、やぼというものですよ。……四十三キロ……。正常で健康。

キログラム、グラム、わたしの身体は物体。片目をつむって、目盛りの筋を見据え、グラムよりも小さく、いらだたしいチリを払い落さなければならない。四十三キログラムと何グラム。もうそれ以上でも以下でもなく、物体として決定的な評価だ。重量という明確な現実を転覆させることなど絶対にできない、それ、身体は重さの秩序のなかから来たのだから。

トルコ玉色の時計台のある街角に大きな伝言板がある。わたしは伝言しなければならない思いに急き立てられる。緑色の伝言板の伝言は白昼の光で薄色、虫けらの言葉のように弱められている。そばには黒板拭きのかわりに、雑巾とスポンジが置いてある。

———ここに書けば、本当に目当ての人に読んでもらえるのかしら？

――運さえ良ければ、多分、不運でも目当ての人の知人の知人といったような方に……もしかしたら。
伝言板を見ている女が答える。
ためらいもなく、わたしは書く。
――下記の者の身元にお心当たりの方は、大至急ご連絡ください。氏名　ミス佐藤　身長１米５５－６５　特徴　心臓病あり、赤い丸薬を一日数十錠飲んでいました。犬がすき。
身長の幅が大きすぎる、６０－６５の方が正しい。書いた字を雑巾で消そうとするが乾いていて拭き取れない。
――スポンジを濡らしなさい。水を黒板に流すほど濡らさなくてはいけませんよ。大雪が降ったところもあるというのに、ここはまだ乾季で、濡れてもすぐに乾くんです。
わたしの頭ごしに伝言を読んでいたらしいバナナ売りの男が教えてくれる。水槽にスポンジを突っ込んでペタペタと黒板を叩く。バナナ売りの男は、うんうんとうなずく。
さまざまな色どりの光の泡が黒板の面に生まれ、信じられないほどの早さで、乾ききってしまう。黒板にはこう書かれている。
――来ないから帰る！　火の玉
――用件決着しました。ご安心を！　モロトモ
――ドラにいっているよ。ロン

一行でわかる、とても簡潔だ。
――もういいの？　何も書いてないけど？　そう、わたしがお先に書いてもかまいません？
よほど秘密の伝言があるのね？　トマトのように赤くおなりよ。
わたしは瞬間めんくらうが、赤くなっているのは、この身体に不都合があったせいだとして、実在感を薄くしたわたしの手を、剥製の手か何かのように振り払う。しかし、手は、うっちゃっても、うっちゃっても、ブーメランのように戻ってくる。戻ってくる手は、チョークの粉を、はでに周囲にふりまいている。
――トマトは青いのが好き。
わたしはいう。女は文字を数球つなぎにつないでいく。書き終えると粉が磁力を帯びているように、伝言板に密着している。
――イワン明日午前十時猫ババの葬儀に出席されたいアン
――さ、なんとお書きになりますの？
わたしがいわくありげに長い間たたずんでいるらしく、わたしを囲んで伝言板の前が賑やかになっている。わたしは、この街の人たちの賑やかさが感染したように陽気になる。
――みなさん、この話をお聞き下さい。こんなはめに陥ってしまったわたしは、死んだのがわたしでなく、生きているのが死んだわたしであることと、骨箱がわたしのではなく、あの女のものであることについて、証明したいと思っているんです。

――面白そう。それって、何かのギャグ？　それとも、哲学？

陽気な女子高校生たちは顎をあげ、髪を振って何の屈託もなく笑う。わたしは力を込めてチョークを持つ手を伸ばすが、手はまだ書くことを理解していないのか、伝言板にある光と熱を吸い込む点々の一つをチョークの先で押さえたまま、じっと動かない。

わたしはつげたいことを分かり易くするための式を考える。ピアニストが、ピアノと向き合い、撫で、さすり、音色を測り、かりそめにならない扱い方で、気力のすべてを注ぎ込むのと、同じ気持ちで、わたしは伝言板をみている。

あの女＋赤池エマ＝死……1

わたし－赤池エマ＝わたし＋骨箱……2

－赤池エマ＝骨箱

赤池エマ＝－骨箱

これを1式に代入すれば

あの女＋（－骨箱）＝死

あの女－死＝骨箱

－死＝生とすれば

あの女＋生＝骨箱

あの女は骨箱のなかで生きているんです、だからお返し致したい。ご協力下さい。
骨箱はあの女の全部、決して涙一つこぼれ落ちてはいない。といって、この式が正しいのかどうか、わたしは黒板の前に出て、問題をとくように命じられ、正解かどうかわからず、いつまでも立ち往生している生徒のように首をひねり続ける。
――――第二式の左項のわたしと、右項のわたしはまるで違うんです。様変わりなのですから。本当は等式として成立たたないのかもしれませんが、説明できなくなるから、こうしておきます。
――――マイナス死とは生であるかどうか、死を差し引いて生に変えるには、大変な生命力がいるんでしょう？
利発そうな女生徒の一人がいう。
――――ええ、つまり赤池エマを犠牲にしても、かまわない、そんな生命力というか、死命力というか、そんなものの正体をしりたいのです。
書いてあるものを、じっくりと時間をかけて再検討する。式としては、ほころびはあるが、ともかく、くっきりとした等式にまとめたことで満足する。
伝言板から少し離れて見ると、天をわたしの大きなメッセージで満たしたような気分になる。もうこれに付加すべき何ものも、除去すべき何ものもなくなってしまう。
――――こりゃまた、変わってるなあ！　おまえ、どう思う？　面白いが、これが果たして理屈にあっているんだろうか？

茶色の犬と伝言板にとりついている男が、目をしばたたきながら犬と話している。
――理屈です。
わたしは思わず答え、伝言板に駆け寄ってしまう。
――わたしとは男かな？　三角関係か？　下手人さがしか？
――わたしはわたしで、あの女はサトウ。ミスサトウが赤池エマの名で亡くなったんです。
こんなにわかりやすく書いたのに……。
男の口は髭だが、顎のあたりの形がくずれ、唇が微笑でゆがんで現れる。
――そうか、理屈にあってるか？　おまえにもそう思えるかな？
――客観的に表現したつもり、その事情が飲み込めないはずがないでしょう？
――ふむ……これは足のないあの世の理屈だな？　その女はミス佐藤だって？
男の大きな黒目のなか、光が白魚のように泳いでいる。
――四足でしっかり大地を踏んだ理屈だって、こんなものなんでしょう？
わたしは反発し、犬に同意を求めている。
――この犬には尋ね人がいるんです。こいつにキスするような言葉は禁物ですよ。……骨箱ってのは……そうか、生命を持ったものより、持たないものの腹立たしいほどのしつっこさってところかな。それとも、その箱のなかに生きているものがいるのか？
男は動物じみた黒い背を丸めてわたしの方を見る。

――それで……この土地のものだとわかっているんですか？
――いいえ、いまのところ、なんにも。でも、あの女は、わたしの知らないこの町を選択したんですよ。だからここに、わたしはいるわけです。
わたしは靴の裏側が側面に向く、へんな立ち方であせっている。男は赤味がかった雑種の犬の額をなでている。若いのか老いているのかわからない犬の顔は、ところどころ黒ずんで、なにかとらえがたい影のようなものを漂わせる。
――おまえ、わかるのか？　フーン、だとすれば、このことかな？
男はいう。わかったという顔つきではなく、男も犬も舌を噛むようにして考え込んでいるのだ。犬は突然、うなり声をあげ、伝言板を見上げてじゃれつこうとする。何度でも。男はそれをたしなめ、首紐をひいてそそくさと街へ移動していく。その右肩が左肩より十糎は高くなっている。あの女の姓、特徴、丸薬を一日何十錠も飲むことを書くべきだったのよ。わたしは小さくそのことを書きたそうとするが、もう書く場所がない。明日になれば消し去られる伝言もあって、書く余地も出てくるかもしれない。
振り向けば、わたしの書いた伝言はいかがわしく、いかにも不実に見える。かき消そうとするが、チョークの粉のついている右手は堅く冷酷に下がったまま動こうともしない。
わたしは気分転換に、熱気と臭気を発散させている商店街を見ながらいく。気づくと、わたしの持っている白い包に、少年が手をそえて歩いている。振り払おうとするが手は包みを追ってつ

いてくる。変に自然に、変に執拗に……。

――――何のつもり？

肉屋の店先には、逆さずりの死体が揺れつづけている。それが人間でないだけで、何故平気なのか？　魚屋の店先には魚の死体が頭を並べ、花屋の店先には足を切断された花が水桶の中に投げ込まれているというのに……。突然、商店街が行き止まり、その向こう、白い砂丘が延々と拡がって見える。風紋が不思議な弧を描き、その上を風が吹き渡っていく。

わたしは雪原から砂丘に変貌した大地を感慨深げに歩きまわる。砂は燃えるように熱い、白い包みを置くと、砂の中で何かが動く。わたしは膝まづき、砂の中に手を突っ込んでいく。突っ込んだ奥で、それはつかまる。それは逃げる、ささやいたり、つぶやいたりする。耳が遠くなる、鼓膜が窪んでいく。

赤池エマが遠い何処かで、一人老いていくような妙な気がする。

目を上げるとかげろうが歩いてくる。人はなんとなく、赤だったり、緑だったり金色だったりするが、確かな形をもたない。少年もいつのまにか幻のように消え、砂の上にカレイやトビ魚やアジの干物が投げ出される。潮の臭いの底に死臭が沈んでいるのだ。

掘っている手に砂の冷たさがくる、砂は雪の感触になる。何かを探し出さなければならないと切実に思う。砂から掘り出したのは義手、その義手を更に突っ込んでいく。哀しみの底の底まで……。雪のなかで餌を探す野鳥のように、わたしは砂の奥深く手を突っ込み、尻だけ上に向けて、

埋もれていくようだ。

15　包み

あの女の骨箱をテーブルの上に置く。わたしの刷毛のような神経網が背骨の下で、椅子の上の砂ぼこりを払っている。砂漠のバラ一つ手にしていない。

もう何時間も椅子に一人かけている。静寂がわたしを包み込む。

かって、わたしが愛したとか、愛してくれたとかいう人物のものだというのならともかく、ほんの行きずりに似た女の骨を抱えて旅をするのは……、怖い。と言って、この耳から静けさを追い出したら、何が来るのか。静けさの変わりに、わたしの耳に忍び寄るものがあるとすれば、やはりこの箱のなかのもの。線香の煙のように細く続き、ときにふっとそれていく声がある。わたしの耳から発生するように、ごく近くから聞こえている。

――――ひゅう……ひゅっ……

愛犬でも呼ぶような、

――――ひゅん

透明なほどか細く、わたしは耳のすぐ脇に向き直り、射程のもっとも短いまなざしで、外の闇をみつめる。毎日没した太陽が群れをなして集合している闇のなかに、あの立場がある。音が入ってくる。当然のことだが、耳はどんなものにも開けっ放しで形を変えることを知らない。

――――最善のことだったとはいえないわ。でもやむをえなかったのよ。あなたは旅立った。瀕死の病人一人残して、あなたは平気だった！　そのために、わたしがあなたの部屋で病むことに遠慮がいらなくなったのね。快適だと思えるように、わたしの心理状態が変わったのよ。瀕死なのに、けろっとよくなった思いもきて、あなたの服に次々着替えてみたりもしたわ。アパートの廊下を歩いても、不審がる人なんて一人もいなかった。あなたも孤独だったんだなあと、わかったわ。でも、廊下の冷たさで震えあがったの、悪寒がきたのよ。あなたの服はどれも氷漬にしたように冷たくて、わたしが死ぬより前に、あなたの服が死んでいたのね。わたしを残して旅立ったのは、あなたがわたしの先導役を果たしているんだと思い当ったわけ。これでもう、わたしが病気であることが公認され、ほんとうに死に至ってもいいほどに大々的に病めるんだと嬉しくもなったわ。生きている間は、死をそんなに真面目に考えていなかったもの。瀕死の状態にいても、いくつもの希望をつないで結構楽しんでいたのよ。わたしの病気には、表と裏と、二つの顔があった。苦しいときと、けろっとしているときと。苦しくて、はでにうめき声をあげるとき、

わたしはあの部屋の本来の住人であり、病人としての名前であるあなた。……けろっとしている気楽な時間はわたし自身だったわ。

死病がリズムを持っていたから、うめき声だって、聞く気になれば、メロディをもっていたのよ。あなたは出掛けに気づいてはいなかったでしょうけれど……、ピアノで音を拾って、ハミングしていた。あれはたしか、オールド・ブラック・ジョーでしょう。わたしも引き継いで、死ぬまで、ハミングしていましたもの。今でもハミングしているのよ。

わたしは死にました、とどめをさしたのは結局、白衣の殺し屋でしたけど……、わたしはすっかりあなたの名に蔽われて、最期だって怖くはなかったわ。あなたが死ぬのだと思っていましたもの。

――あなたはさっさと逃げて、わたしが死んだのだ、死んだのは赤池エマだとおっしゃるの？あなたはあなたの死とさえ結びつかないで、なにと結びついたとおっしゃるのよ？

――そうじゃない、うまくいくときは一石二鳥の結果をもたらすものなのね。

――大成功だと自画自賛しても、こうしてわたしは生きて、現にここにいて、ここに骨箱があって、処理が面倒になっているのよ。それにあなたの名は生きている人の名簿にかっきりと書き込まれているのよ……。

――でも、どちらでもいいんじゃありませんか？　あなたはわたしとしてもう一度生きる、わたしとしてもう一度死ぬ。二つも方法が残されているんですもの。

――そんな……。あなたの撒いた種は、やっぱり生きていて、芽が出、蔓になってのびて、とうとう、あなたの声を聴く、こんなところまで張り出してしまったのよ。

――まあ、手応えがありましたの。なら、あなたもお友だちを探すことね。わたしがあなたを見つけたように……。同じにやってみるのよ。そこで、あなたはわたしのつると手をつないでいられるでしょう。

――もしかしたら、わたしの手はこれでなく、その蔓なのかしら。あるかなしかの微風に揺すられているだけなのに、わたしを遮ったり、縛ったりするのよ。

――ああ、それは、蔓草模様の風呂敷に包んであるのね……。

――白です。

――包んで下さって有難う。以前のわたしは、わたしであることが結構、素晴らしいことに思えていましたの。わたしの顔や姿が気にいっていましたから。でも、いまは、あなたの姿で生きてもいいと思い始めているのよ。

――それではあなただけ生死自由で、わたしは生きているのに死にっぱなしじゃありませんか！　チャンスも掴まずに死ぬなんて？

――あら死がチャンスかもしれないじゃない！　思い方ひとつでしょう。お互いに、またとない機会を無駄にしないことね。

――これ、この骨箱は正真正銘、あなたのものです。困るんです、引取って下さい！

――あなたにとってこそ、意味のあるものなんでしょう。
――この世であなたからの見晴らしが、一番良かったなんてことは絶対ないのに……。
あの女の声が返ってこない、わたしは慌てる。
――待ってください。あなたのお名前は？　ご住所はどちらなんです。教えて下さい！
わたしは融かされている。死に融けて、暗い斑点になる。静寂そのもの。
手足や胴、耳、などの存在するあちら側で、ホテルの夜をずっと、
――きゃん　きゃん！
吠えている犬の声が聞こえている。
影が歩く。朝、妙な気配に、わたしがドアを細目に開けると、だぶだぶした襞が首に巻きついている、赤味がかった茶色の雑種犬が顔から入り込んで来る。唸り、首を下げて嗅ぐ。この客は堂々としていて、わたしに抗議仕様がないと思わせる。犬はすぐにテーブルに近づいて座る。テーブルの上には骨箱の白い包みが置いてあるのだ。
――わたしじゃないのよ、でも、他人の目から見てどうかしら？
犬はそれに身を乗り出す。わたしははっとして、シーと追い払おうとする。今度はテーブルの上に前肢をあげ、包みを口でくわえて骨箱を床に降ろしてしまう。鼻先で嗅ぎ回し、鼻を押し付け包みを引っ剥がさんばかりだ。舌先は記憶をたどるように口の輪郭に沿って動いている。
――ああ、そんなものはもうないのよ、あの女の臭気さえ残っていない。骨だけなんだから、

きみかジタバタする何ものもないのよ。
血のしたたる肉の塊。そんなものを引っ張りだし、明るみに置こうとするのか？
今度は包みに寄って、深々と頭を下げたまま、甘え声で悲しそうな啜り泣きをはじめる。
わたしが包みを取り上げると、わたしの右手から左手にまわり、前肢を上げて立ち、包みを開けるようにうながす。下に置くと、前肢をその上に置いてはずさない。
犬は骨箱を口にくわえ、俯きがちに歩き出している。瞼に皺を寄せ、その皺の丁度裂け目に小さく深い目がのぞく。目には水平線が一本入って、黒目の左右で錨のような黄色い玉をぶら下げている。何をするのだろう、何処にいくのだろう。
――――どちらへ？
赤毛の犬なのに後ろから見ると、揺れる尻だけが白い毛並みに飾られている。わたしもきびきび支度をして犬を追ってホテルを出る。
――――行きなさい！　行きたい方向へ、行きなさい！
何度も繰返している。ガソリンスタンドの先、右に曲がると海だ。こんな近くに広大な紺碧の海、一本の水平線、光暈に包まれ、毛髪を逆立てて犬は走っていく。白い包みの底が躍って擦った砂の帯の上に、犬の足跡が並んで続いている。犬は砂に足をとられるわたしを待って、時々振り返る。犬が振り返るとわたしの体も立ち止まって振り返り、続いている足跡から来た方向を確かめる。犬が立ち止まる、わたしはもっと早く！　と自分の足に命令する。前にでている足が、

後ろ足に代わる途端、足は無責任にも半歩後ろに引き戻る。無気力になるなと足に命じると、下肢の外側の肉が反抗して、はがれていこうとする。脛は二本の長い骨と、それについている筋肉から出来ているのに、二本の骨はそれぞれ一本づつの足であることを要求し、わたしの服のなかをもう一つの骨箱にかえてしまおうとする。塩のかさぶたの浮いた砂からしめった砂に変わっていく。

ひそんでいた風が息をつきはじめ、砂を含んだ風をためこんでパンクしそうな肺、先をいく犬の内臓も砂袋になっていないか？　犬は包みをくわえて放さない、ひと握りずつの草が生えている砂丘を越えると、防風林が海岸線に張り出してくる。

砂山に隠れそうな石の家があり、土台のところどころから、シュロの皮をはみ出している。乾燥花にするのか、花が砂にさしてある。花は回りの白砂に黄色や紫のしみをつくる。犬は包みを口にくわえたまま、おだやかに鼻を鳴らすだけだ。中に男がいて、青いホーローの片手鍋にコーヒーをぐらぐら煮立てて、レンジからおろすところだ。男はわたしをみても驚かない。伝言板の前にいた男だ。

何故犬はこの男に包みを渡し、愛撫されるままになっているのだろう？

———あなたがこの犬の飼主でいらっしゃいますの？

———僕ですよ、現在の飼主は。いや、こいつの方かな？

———なに、それ、この犬の行為は、飼主の意志ということになりますか？

犬は男の愛撫を漸く、くぐりぬけ、白い包みによりそい身を横たえる。少し男が包みを動かすと、犬は位置をかえ、またも包みに寄り添っていく。男は毛深い前肢を広げて立っている。

――ここは、こいつがいつも腹這いになり、身体をごろごろ転がすところなんです。毛が散っている、わかるでしょう。特別に、この骨箱に親しみを示しているわけではありませんよ。

わたしは包みを動かす。犬は何かに蹴られでもしたように叫び、荒々しい獣の息づかいをする。全身を鞠のように丸め骨箱にむしゃぶりついていく。

男は包みをわたしに押し返そうとする。犬は跳ね上がり男の手に噛み付き、男から包みを護って頭を低くして唸りはじめる。

――あの女のお身内の方なんですね、この包みをどうぞお受け取りください。

――いきなり、こんなものを突きつけて、家族じゃないか、あの女のだなんて、全く無謀だなあ。骨とのつき合いがあるわけないじゃありませんか！　あの女のしるしがこんなものであるわけありませんよ。

――あの女とおっしゃいましたわ、ご存知なんですね。中味をお確かめになります？

――あの女は一人なんですか、あの女は女の数ほどいますよ。僕のいうあの女は、今生きていると感じているに違いないのに、赤の他人であるあなたが、死んでいるなどと、そんな大切なことを決定してかまわないものか、どうか。

――あなたは佐藤さんなのではありません？　あの女も佐藤でした。ミスかミセスかは知り

ませんけど、これは、わたしをかたって死んだあの女の遺骨です。
———僕の知っているあの女なら生きていますよ、それがわからんのはあなたです。僕の知らないところで、あの女は生きています。今までも、いつも生きていましたから。
———そう願っても、何時までもそうとはまいりませんでしょう。毎日、大勢の方がなくなっているんですから。
———あなたにとって無益な形見だからといって、僕に受け取れと言われても……困るなあ。
———あの女は、わたしまでついでに殺していったんです。これを持ち主と最も親しいあなたに　お返しして、代わりにあの女の名前を教えて下さい。お隠しになってもだめです。あなたの犬はあの女の遺骨を現に盗み出してここまで来たんですよ。根拠が稀薄だなどと……。
———あなたを殺したのはあの女ではありませんよ。あの女は、僕さえ殺せないでいたんですから。
———わたし、あの女を、わたしの部屋に休ませてあげたんです。保険証も貸してあげました、それなのに、わたしの留守に救急車で病院に運ばれて、わたしの名前でなくなってしまったんです。
———あなたの部屋から、あなたの名前で病院に入り、亡くなったのは、やはり、あなたなのではありませんか？　たいていの場合、人間は自分として死ぬものです。生まれてきて、何ひとつ、本当に自分のものだという確信を持てるものなどないのに、死だけは確実に自分のものです。

それを、そんな、他人に渡すなんて勿体無いことをするはずがありませんよ。
――では、わたしが本当に亡くなったとおっしゃいますの？　わたしは昔からひと続きで、何の変わりもありません。変わったのは……、それから来たショックでいろいろ変わりましたけど……、状況だけです。……この犬は多分彼女の愛犬だった、そう考えられます、こんなに悲しんでいますもの。わけあって此処に導いて来たに違いありません。この遺骨の正当な引き取り手として、この犬はあなたを選んだのでしょう。安心しましたわ。
骨箱は白い風呂敷に包まれて、少しゆるんでいるけれども包みになって、結び目を堅くしてある。わたしは包みをひき寄せる。
――どうぞ、お引取り下さい。
わたしは骨箱を男の前に差し出しながらいう。
――いや……。
男は押し返す。
――いいえ、
この男、わたしが力一杯放り投げても、何度でも、あの女の命を投げ返してくる。
わたしが押し返す。
――そんな馬鹿な！
――いいえ、どうぞ。

白い包みは、テーブルの上を行き来している。
――こうやっているうちに中味が粉々になってしまいます。
――その粉々の一つ一つにキスしろというんですか？
あの女の骨箱がわたしと男の間を行き来する度に、テーブルの上の砂ぼこりも位置を変えていったり来たりする。犬はテーブルの下で、アル中患者のような唸り声をあげる。男は左手でみぞおちのあたりをとんとん叩き、鼻ずらを伸ばして首を折る。
――万策つきたわけではありませんよ。方法はあることはあるんだなあ……。
男は呟いて首を叩く。
――なんなら、それを僕、中村左門の遺骸だということにして、あなたは自分として復活するそんな手もあるんだなあ。
――これは男性ではありません。あの女なんです。
――性別か……そんなもの、どの程度分かるもんか？　焼いてあるんでしょう。焼き具合はいかがでした？　この頃は殆ど焼きすぎで粉に近いものなんでしょう。
――病院で亡くなりましたの、医師が診断書を書いたんです。
――あなたの身体が、いまぴちぴち生きているなら。他に望むことなど、何一つないはずですよ。あの女の盗癖について問題にしているようですが、あなたが自分から、部屋も名前も捨てて蒸発していた、というようなことでは……？

――……。

制御する機能を失ったように、わたしは眼をしばたき、それを止められない。

――あの女も、死んでまで盗人として恨らまれるのでは可哀想ですよ。ちょっと落ちていたものを拾った……、いいえ、あの女ではないとは思いますが……。ほしけりゃ、名前も住所もよりどりみどり、山ほどあるじゃありませんか。もともと、自分の名前は自分がつけるべきものでしょう。親のつけた名前など、仮の名なんです。

――……。

男は犬と目を見合わせる。犬の黄色い鋭い視線が、爪のように男に食い込んでいる。男は包みに手を延べ、抱え込んで、その重量を測っている、用心深くふる。骨はかさかさと音をたてて揺すられている。

――こりゃ、軽すぎるなあ、一人ではなく、一匹のものだな。

――そんなことありません！

わたしは声を張り上げる。男は犬に不意を襲われたことのある泥棒のように、犬の方に警戒を怠らない、包みを揺すりながら身を屈めて、うなり始める。

――あれは、犬としては、骨太の方でしたよ。ははは、馬鹿だなあ、おまえは、ほら、こんなに軽いじゃないか、これは一体どういうことなんだい？

男は首を横に振り、犬の鼻を叩く。

――犬も鼻風邪をひくと、鼻がきかなくなってしまうんですよ。とんだ間違いじゃないか。わかるね。

……何故疑いなどというのだろう。やはり犬は人間より感覚において勝っていると思うもの、間違いはおかしていないわ。とすると、いなくなってからも、あの女がこの男のなかで大きくなっているのだ。犬は聞こえない言葉をわたしに押し付けて、足もとに擦り寄ってくる。なにを勘違いしたのか、わたしのスカートのなかに入り込んでしまう。

――こういうことを若い女性に申し上げるのは……、いや、なくなった方に申し上げるのは不謹慎でいいにくいのですが、僕たちはですね。もともと……豚骨を好いておりまして、肉屋からもらって、よく咥えていました。

犬はわたしの脛に鼻ずらをぶっつけて泣く。

――おまえは一体、何をしているんだ、俺とかわす言葉を忘れてしまったのか？　怒らないで下さいよ、そんなに可愛い顔をして。……その為に骨の量が減ったのではないかと、推理してみたんですよ。こいつ、それでしょげているんです。

男はまやかし臭い優しさを犬に対して示している。一匹と一人の唸り声がからまる。わたしに犬が擦り寄っている。

――尻尾を振り、身体をなめているのは、あなたじゃないの？　それで、確かに伝わって来るものがあるの？　これがあの女だとわかっているの？

犬はわたしの言葉にはじかれたようにスカートからでて、尾骨を軸に身を起こした獣の姿で、うなだれてしまう。

――わたしはあの女ではないのよ、わかるはね。わたしは赤池エマです……赤池エマでした。大分変わったけど……。

言ってわたしは口の中で舌を丸めてしまう。男も犬も、わたしに名前が一つついていたからと言って驚きはしないし、疑いもしないのだ。それより雰囲気が何故か様変わりしたような気がする。

――できたら、あなたに触らせてください。どうか、触らせてくださいませんか！

男は突然豹変する。男は尻尾を振ってうったえつづける。わたしは後退する。

――気でもふれたんですか？

――ほんのすこしだけでいい、触らせて下さい。触ったら、これが、夢ならさめるでしょう。

故郷が雪崩落ちる。あの女の遺骨を胸に、左右に揺れながら歩いていく祖父を、わたしは雪の斜面に立って見つめている。祖父の悲しさや、安堵がわかる。わたしは、祖父を追って走る。

――お祖父さま！

祖父は振り返る、祖父が突然掻き消える。祖父が倒れている……首から下げている布から飛び

出した骨箱は、転がり落ちて、雪の中に中味を飛び散らせてしまう。
駆け寄りたい思いを押さえつける。駆けつけて、それを、それを拾うには、それ相応の資格が必要なのだ。それは、何処かの犬の骨とは、わけが違うのだから。死んだ本人であるわたしは、その形式に縛られて動けないでいる。わたしはことときれたかもしれない祖父を見ない、見ることが出来ないのだ。祖父を善意の人々が囲み、助け越こし、病院に運ぶ。わたしは泣きじゃくりながら、雪のなかに飛び散った遺骨を拾い集める。
———あのとき、いくらか減量したんだと思います。雪解けがくれば。拾い出せるときもあるでしょう。しかし、これはひとり分の重さがないという程に、軽くはありませんよ。この町に来るまでの間、しっかり抱え込んでいましたが、重さでわたしは押し潰されましたもの。
———あなたがはじめて買った宝くじを当てるように、いきなりその女の身元を探し当てたと考えるのはおかしいな、昨日、伝言板に書いたばかりじゃありませんか。警察という手もあるでしょう……。それでもというんなら、教えてあげてもいいんですよ。あれは、僕がぶったあとが、ほほにまだ残っているうちに出て行きました。それっきりです、この写真があの女です。
犬の赤い鼻ずらが乾いているのが見える。犬はきしむような含み笑いをする。何かを訴えているのだ。
———あの女が、この女だというのか？　おれが、あれを叩いたのを恨んでいるんだな。あの女はおまえに飽き飽きしていたんだ、やきもちばかり焼いていやがって。あの女は、お前を捨て

て出て行ったんだぜ！　そんなに、誰にでも色目をつかって、だから、あの女は死んだ！
犬はもがいていた、頭を下にしてコマのように回って、頭が、手足が、何十個も生えているのがわかる。犬が唸り声をあげ、全身の毛を逆立てて男に飛び掛っていく。男が獣のように背を低くし唸りながら横に走る。犬が追いかける。唸り声は二匹になり、もつれ、上になり下になりからまり、シンバルのように激突する。
男は巨大な黒犬に変貌し、わたしの前に立ちはだかる。二匹はわたしを中央におき、争奪戦をはじめる。黒犬は牙をむき野性にかえって茶色犬を引きずりまわす。
――――間違ってはだめよ。わたしはあの女ではないんだから……。
二匹は死闘を繰りひろげる。狼の血が流れているのだ。この臭い！　二匹の犬は唸り声をあげ、全身の毛を逆立てて、吼えまくる。
わたしも犬と一緒に吼えてみる。はじめは、からかって。だんだんそれが、ごく自然に……。牙をむいて、気づくと自分が犬であることに思い当たる。
わたしは彼らに向かって飛び込んでいく。どんな敵も共鳴させずにはおかない、そんな愛らしさで。三匹はもつれながら、じゃれ合いながら疾走して行く。
わたしの声がからまる。二匹の犬は唸り声をあげ、全身の毛を逆立てて、方向転換し、何を思ったのか、わたしに向かって襲い掛かる。
凶暴な手肢がわたしの頭を蹴り上げ、脳天で火花が散る。何本もの手肢が首に巻きついてくる

のがわかる。地面がせりあがってくる。

――――第４部――――

１８　先手必勝、花嫁くずれ

鏡のなかの女に執拗に語りかけられている、わたしは聞こえる声を押し返す。女との間に冷たい鏡面があるのが救いだ。そちら側にある女をわたしは鏡の中で見ている。それはおさやのママで、わたしの後ろ姿、その肉づきや形を見ている。

……法律上のことなど、どうでもいいなんて、あなた、そんなにしたたかなの？

彼のママはいうかもしれない。

……形式こそ厳粛で、しーんとしたものです。

と、彼のママが言ったら……。

男のくせに、どうして彼らに、ママがいるのかわからないけど……、いつか彼が言っていたように、こう言ってもいい。

……気に障ることと、毛すじほどの違いもないのが、恋と言うものですわ。

……簡単に別れますの？

そう聞かれたら、

……人間らしい人間というものは、気に障りはじめたら、しつっこく気に障り続けるものですのね。

こんな風に、わたしは気取って言ってもいい。

――法律上のことなど、どうでもいいなんて、あなた、そんなにしたたかなの？

彼のママが言っている。思った通りだ。わたしは鏡のなかの彼女に向かって微笑する。

――なにか隠さなければならないことでもあるんですか？

彼のママが続ける。

――隠すなんて。わたしの口はよく動きすぎるんです。

――子供が生まれたらどうなさるの？

そう来ると思った。

彼のママほどの人物なら、自分の孫を、決して無戸籍の宙ぶらりんにしてはおかない。と言って、わたしの名で死んだ佐藤みよ子かもしれない女の子供なんかにはできないし、赤池エマの子

供にもできない。
一族の最期の最期まで見届けようとしている、わたしの祖父は、まだ昏睡状態で、あの町の病院で高イビキをかきつづけている。
……心臓がお丈夫ですから、まだまだ……。それで、そちらはどなたさまで……。
電話の途中で切ったけど……、子供を生んだりしたら祖父が嘆く。
――子供の出来ないたちでいらっしゃるの？
しかたない、そんな言い方をするなら、本当のことを言ってもいい。
――妊娠しているかもしれません。いいえ、妊娠しています。
――何ヵ月なの？　生まれたら……？
彼のママはしつっこく聞く。
――名前なら十個ほど彼と一緒に考えましたわ。
――ほらね、やっぱり、届け出ようと思っていらっしゃるんでしょう。何のかんのと言っていても、若い人だって、男に捨てられたのでもなければ、きちんと届け出るんですよ。あなたはわたしを脅しただけなんでしょう。
――生まれても果たして可愛いいかどうか？
わたしはその言葉を真っ直ぐにいう。
――可愛いいかどうか？

彼のママは、わたしの口真似をして、疑問だと言わんばかりに。鏡のなかのわたしに眼を滑らせる。

――その子はわたくしを好いてくれるかしら？

――それより、わたしを好くかどうか？

わたしも同じことを言ってみる。とてもむつかしい、絶望的という気がする。彼のママは、しばらくもの思いにふける。幾分怒ったみたいな顔付きで慎重にいう。

――それは、そのときになって見なければわからないことでしょうけど……、五体満足なんでしょうね。

そして、急にむっとし、総ての責任をわたしに押し付けて、ざわざわ、不安や不服や不足の雑音を製造しはじめる。

わたしのこのあるかなしかの血に難癖をつけたくても、材料は一つも提供されてはいない。材料探しを始めるだろうか？　この血の総ては、わたしについて黙っており、質問されても答えないだろう。

――いま何ヵ月なんですって？

わたしは答えない、答える必要を認めないから。わたしだけが、わたし。

ひっかかり、ひっかかり、一日一日進んできて、たった一つ瞬きする間、赤池エマよ。といったと、おさやからママは聞いているのかもしれない……。それなのに、絶対に確実に、わたしの

本名は佐藤みよ子だと言ったら、彼のママは、わたしが赤池エマを殺し去ったのだと、わめくだろう。殺されたのはこのわたしなのに……。と言って、死んでいるのはあの女なのだから。わたしが今、鮮やかにここに在るための本名をどうするか？　わたしのなかの子供の名前も含めて？

――実はわたしには本名がないんです。死んだ女が盗んで行きましたから。

本当のことをいってしまう。隠しおおせる筈がないのだ。

――わかりましたわ。大変なことだとわかりました。死んだ盗人が、わたくしの孫を生むのですね。息子に盗人が子供をくれるのですね。盗人からの施しものが孫なんですね。義盗というものなんですか？　それとも、息子や、わたくしまで、この世から奪っていこうというのですか？

わたしの説明でこんがらがった頭で、彼のママはいろいろ口走った、そのあげく、

――可哀想な、おさや！

とつぶやく。

――いいえ、盗まれたのは、わたしなんです。可哀想なのはわたしの方なんです。

善人であることを強調してみたところで、かえって警戒心を呼び起こす。

――警察に届けないで盗まれたなんて、盗まれたという客観的証拠がないじゃありませんか。あなたは何かにおびえていますね。病気なのではありませんか？　精神病の発病する年齢では？

彼のママはわたしの肌の具合や、肩や腰の形を見据えて、年齢を推定している。

――でも、脅えるのは、わたくしの方です。死人がわたしの孫を生むなんて考えられない。

そんな冗談をぬけぬけと言ってのける女なんて……。
彼のママはいう。
鏡の中、仏頂面の女が素早く光る舌を引っ込める。彼に何を何処まで話したか、正確なところは覚えてはいないけれど、彼のママなんかに拘わりあいさえしなければ、このまま、なんの気詰りもなく、十年や、二十年、二人一緒に、時間つぶしをしていけそうな気がしていたのに……。総て裏目だ。彼はまだ帰って来ない。彼のママは忍耐力がある、だから立ち上がらない。
――産むと同時に死ぬのが虫けらの原則、少し早やてまわしだっただけです。
わたしは言う。その他にわたしにどんな生き方があったというの？
――わたくしのこの太い脚が見えませんか？　細い足の虫けら何かではありませんよ。
彼のママはよせばいいのに、象よりも太い脚をスカートの裾から、あらわにして誇らかだ。
――人類のなかでも、特に血統正しい人類です。
こうなったら、もう駄目。
――わたくしは肉体の内部から息子に話しつづけたものですよ。
――わたしこそ、肉体の内部で彼と話しています。
女同士、こんな話になってはもう終わりだ。しかし、万事休すではない。彼のママは彼の机に向かって腰掛け、彼の帰りを待っている。まだ、暴走してはいない……。
鏡の中のわたしは、顎の間に嘆きをはさみこむ。手で触るガラスの冷たい面が、鏡の中の女と

わたしとの共通の嘆きの壁になっている。彼が帰れば、すぐに、幸せのなかではしゃぎ回ることが出きるかもしれない。待っている……。彼を、とも違う、早く自己を失うことを。

アンテナがわたしに突き刺さってくる、何故、あんなバルコニーに足を踏み入れる気になったのか？　誰かに探られる未来を予見したのかも知れない。わたしは探られるまえに手を打たなければならない。恐れに駆り立てられ、希望に運ばれて走り出す。

彼の会社の前を行ったり来たりする。石畳は模様に色分けされ、滑らかな顔を洗うように、作業員のモップが、わたしの足もとに滑ってくる。

彼と同じ会社のバッジを胸につけている男がくる。わたしは大げさに挨拶し、

――――わたし、海図長也と婚約しました。といっても、すでに同居してるんですけど……。

――――はあ、社長と！　それは、それは、おめでとうございます。

とその男は照れながら言う。背後で笑い声があがる。

昼休みの時間がきて、長也が、ワイシャツのボタンをゆるめながら歩いてくる。彼の服装は何時も崩れているから一目でわかる。若社長だからって取り巻きを連れて歩いたりはしない。何時も一人だ。わたしも彼のためにラフなセーター姿で、そっと共感を育てる。彼はわたしを見て瞬きする。背伸びをして身体をほぐす。わたしはそんな動作を中断させたくなる。

――――先手必勝、すでに同居しました、そういったのよ。どう思います？　あの方はおめでと

うと、真面目にいったけど、周りにいた人たちはみんな笑ったわ。わたしは口ごもったりはしなかったの。叫ぶように言いたかったけど、普通の声で言ったのよ。……これであなたは、わたしに唾をつけたことになるわ。その唾を世界中に吹き飛ばして、認知させてあげたんだから！

———珍しく眼が輝いてる。そうか、きみはその手に出たか。先手必勝！　殆どの作戦で、それは有効だよ。それは勝利を意味するんだ。

彼はわたしと違って、ゲーム感覚だ。

———先手必勝、いい言葉ね、わたしが先に手を打ってしまったわ。わたしの人生、何時も遣られっ放しだったんですもの。先手を打たれてばかりいたのよ。

彼はわたしの肩に手をおく。十二本の線を縦横に引いた紙を、わたしの肩の上で広げる。

———そうか、こう行くべきだったかなあ。ああ、ゲームソフトを開発しているんだよ。うちのコンピューターはね、このゲームを、先手必勝という答えを出した。そのくせ、コンピューターが負けたんだ。それも僕が一秒で考えられることを、コンピューターの奴、五十秒も長考をするんだから……。ここに置くよ、きっと、といって、僕が推定して置いてやると、長考のあげく、奴は、その通りに打ってくるんだ。そのあげく、先手のくせに負けて、負けても、負けたと言わないんだから……。ああ、みよ子なら、そうでるか？　なら、線を一本づつ加える。そうだ、これで、きまったな！　完成だよ！

彼は有頂天だ。わたしに手を振ると、コピーした紙を両手で広げたまま会社のなかに駆け込ん

でいく。わたしに夢中になったように、興味のあることには、すぐさま夢中になるのだ。持続時間が問題になる。人非人、優しく見つめる振りをして先手負けだなんて、恐ろしいことを企んで平気だ。　わたしは歩き出すしかない。足は萎えたようにへなへなする。

彼はわたしのことを、どの程度知っているのか、もう一度聞いておきたいが怖くてそれを言い出せない。知っていて、婚姻届を、などと言うとしたら、それこそ殺人行為だ。

先手負け、それほど彼を満足させるプログラムは誰の仕事、彼自身にきまっている。彼は何を考えているのだろう？

昼休み、この商店街でタレが焼け、レバーがてらてらして、うなぎが裏返しになる。振り上げた出刃包丁で大魚の頭がぶっきれにされ、捻り忘れたガス栓から、洩れたガスが広がっていく。死体をあやしながら、目をつぶりながら、此処まで漸く生きてきた、そんな想いもある。

わたしはこっそり遺言状を書く。

「海図長也様　　わたしは既に死んでいるのよ。　さようなら！！　あなたの優しさに乾杯！！

今日まで有難う！！　佐藤みよ子」

遺言状は、あのバルコニーのアンテナに結び付けておく。

――――きみは疲れているんだよ、急ぎすぎだ。まさか手回しよく結婚式の前に、離婚届を書いているのではないでしょうね？

おさやは唇をすぼめ、ひん曲がった顔をわたしの目の前に突き出す。遺言状の次に書くのは離

婚届かもしれない。その次に書くのは、出生届？　わたしは頭を抱えてしまう。
佐藤みよ子はいくらでもいる、空席は見つかるだろう。なんなら、佐藤恵に鞍替えしてもいい。……とりあえず……何処かで戸籍の都合がつくかもしれない。しかし、そう簡単に切り抜けられるはずはない。わたしは息の根を止め、自分を痛めつけるように考え込む。
あの日々、わたしの魂は自立を目指していた。その為には家をでる決意だった。家とはわたしの肉体ということなの？　となると……？　このままにして、世間とうまくやっていくことを……。それなのにあなたは変種を見るように見て、わたしから離れようとする。
真っ暗な眼をしていることがわかる。わたしは自分に「立て！」という。うまい境遇に落ち込んでいくのよ！　別に結婚式は何ごともなく、いくのかもしれない。
――その日を知らせてくれたんだろうね。
――知らせるわよ。
祖父は夢の中、わたしの結婚式の知らせを聞く？
――番号を間違えてるんじゃ、少なくとも十桁以上だろう？
わたしの人格を殺す言葉だ。本ものではない、おさやの愛情には無理がある気がする。わたしにしても、均に対するみたいな、魂の打ち震えるような、あの感動はもうない。エマは今でも誰にもみせないエマの中央に均を囲って生きているのだ。
それを、わたしにも秘密のつもりでいる。

――後にするわ、しなければならないことで頭がいっぱい。
片付けておきたいと思う。死んだ後なのに、片付けておきたい事柄がこんなにあるのは何故？新居だから、それらしく片付ける。片付け終わっている。
もう、ここには、わたしの何ものもなくなるだろう、さっぱりと。新居とは、こんなに何の装飾もいらないものなのだろうか？　このわたしの空気を抜いて畳まなければ……。中身はただの空気、或いは毒ガス、毒ガスを空に放たなければ……。ゴム人形をたたみ、旅行鞄のなかに入れてしまう。
花嫁控え室で、初老の婦人が、急に蛇のように首を伸ばす。透明な張り詰めた空気のなか一人身動きしないでいる花嫁がいる。
――落ち着いて下さいよ、わたしを睨まないで下さい。そうやって、花嫁姿に化けていらっしゃるのは、どんな気分？
花嫁はただ息をしている。わたしの髪はカールしすぎなのかもしれない。鏡のなかで何時もより綺麗でないみたい。靴の中かかとをどう置いたらいいのか、滑り台の斜面みたいなハイヒール、足の裏が滑り落ちて、爪先が痛い。いままで靴をはいたことがなかったみたいに、穿くというわずらわしさが気になる。ベールはもっともっと、ずっと長いのにしたかったのに、裸足でベールを引きずりながら走りたい。美しさはベールの長さに比例するのよ。
――あなたは男をだますのがお上手！

初老の女はいう。
手袋は持つだけでいいかしら。果実みたいに重いプーケだ。こんなに白い長いドレスを、ずっと昔、着た記憶がある。前世のことなのか、あるいはベビー服？
――あなたは一体何歳なの？　本名は？　本籍は？　……正体不明であると、有頂天になれるものなんでしょうね。
いっそのこと、ヘッドはボンネット型にすればよかった、童顔なんだなあ。
――例えば犯罪に関係していて隠すこともありますでしょう。
この婦人がわたしに付き添うらしいけれど、何を言っているのだろう。いまは、それどころじゃないのに。
かすれた声を出すその口。
――はっきり申しましょうか、あなたは犯罪に関係のある遺骸を、隣町に持っていって処分なさったのでしょう。
わたしは鏡に顔を突っ込んでしまう。光の結び目に幾つもの透けて見える顔があって、振幅をもって、左右に飛び出したり隠れたりする。ぴこぴこするから、しかと、それを見届けられない。大きな衣裳のもどかしさ。わたしの中にあって、わたしをここにあらしめている人たち、遠い何代さかのぼるのか縁の薄い顔ばかり。そして、縁もゆかりもない名を冠した女が、鏡に向かい、わたしの花嫁姿なのだ。うっとりと見開かれた目、その女の目の中のわたしをどんなにも小さく

遠く追いやることもでき、近く招き寄せることもできる。花嫁なんてものを発明したのは誰なのだろう。支度に夢中で気づかずにいたけど、今朝からまだ彼の姿を見ていない。初老の女は花嫁に顔を近づける。

———本来なら、結婚詐欺として、警察に訴えるところですよ。だけど、今日のところは見逃してあげますから、そっとお帰りなさい。……調査をしたんですよ。あなたは死んでしまった方でしたわ。若くて可愛くて、亡者には見えないから見逃してあげましょう。さあ、早く出て行って下さい！

花嫁はそれを予想しつづけていたから驚かない。このつけ睫だ、わたしを他人のように見せているのは……。

顔が歪む、もう、くしゃくしゃ。誰かが鏡の中から銀色の水を絞り出している。

———生きているのか、死んでいるのか、見る人が見ればわかりそうなものなのに……。この世のものとも思えないことが、現実にこうしてありますのねえ、ありましたのねえ。

女は言うことだけ言うと、丁寧に椅子の位置を整えて出て行く。

花嫁のいる控え室に、人気がなくなって久しい。もう、式の時間だと思うのに、誰も迎えに来ない。絶叫でも聞かなければ覚め切れない思いもある。誰も迎えに来ない。彼が来るだろう。わたしが逃げ出さないように、腕をつかまえにくる、きっと！

灰色のワンピースを着た式場の従業員がくる。

――衣裳を返してお帰り下さいとのことでございます。……とりやめ、なのだそうでございます。

花嫁を見つめて、見つめることを止められなくなっている従業員の、縞メノウみたいな眼。

――籍がないから？　それが、珍しいから？

人々は知りたがる、見るもの、聞くもののすべてを見たがる。もうすぐゴールだったのに……。ゴールという言葉がわかる気がする。白い花を邪険にむしる。ドレスの後ろまで手がまわらない。白い花が一気に散り落ちて、ただ一本、奮い立っている茎のように、わたしは足もとにウェディングドレスを落したまま立っている。

さっきまで花であった残り香がただよってくる。わたしは花嫁衣裳の上に座り込んでしまう。不思議はない、眼をつぶろう。帰りたい！　どこへ？　疲れている、彼がわたしの手をとってくれることなど、もう永久に望めないのだろうか？

脱いだ服を小脇にかかえ、ベールを引きずって、長い青い廊下をいく。手でそれを掴んでいることを止めたくない。何をわたしは欲しているのだろう。

花嫁になりそこなった女は形を隠して、こっそりと成り行きを見ている。彼、おさやの表情はみんなを驚かせている。花嫁になるはずの女が見えない。

――病気か？

――悪い男がついていたのか？

――失踪？
――親の反対にあったのか？
――気が、変わったか？　そのどれかだろう。
囁きと囁きの間で会場はシーンとなる。
――真相は申し上げるに及ばないと思います。いろいろ手違いがありましたので……。しかし、それにしても……、僕は運の悪い人間です。どうか、今日のことは、事情もございますので、黙っていて下さいますように、お願い申し上げます。
こんなとき、並の人はどんな風に振舞うのだろう。
黙っていて下さい。そんな言葉が彼に有利に働くはずがない。ここにいるもの以外に、そのことが洩れないはずがないのだから……。
――前言を取り消します。黙っていらっしゃる必要はありません。彼女は彼女なんです。名前が彼女だなどとは、僕はおもっていません。それは記号、記号に過ぎないのですから。あなた方だって、何があなたか、考えて下さい。名前ですか？　戸籍ですか？　違うでしょう！　どうか、考えて見て下さい。彼女を責めるのは止めてください。彼女はほんの少し、優しいうっかりやのお嬢さんだっただけなんです。母や伯母が何を企んだかしりませんが、今日はぼくと彼女の結婚式です。どうぞ、盛大に祝って下さい！
彼は泣いている。その涙に人々は感動している。あらかじめ試着をしていなかったから、袖口

から十糎もカフスのフリルが飛び出し、首のボタンもはずれてタイが浮いている。彼は派手に袖口のフリルで涙を拭う。付き添いの式場の職員がはらはらしながらそれを見ている。

――僕、これから、彼女を探しに行きます。そのまま帰りますから、皆様は式を継続して下さい。食べ放題ですから、遠慮はいりませんよ。酒も沢山用意してあります。僕たちを餌に思いっきり飲んで、祝ってやって下さい。

花嫁なしの宴の席で祝辞が続いている。

――運命の星に感謝したくなるときもあるでしょう……。

おさやの反撃で、結構中位のおめでたさで祝辞が交わされている。

――彼ほどの頭脳と手腕があれば、名のある立派なお嬢さまが見つかるでしょう。こういうときは、心を鬼にして、女から引き離したお母さまのご判断を、英断だと、ご尊敬申し上げます。この母ある限り、海図家の未来はバンバンザイです。そう信じて疑いません。乾杯！

――暗雲は未然に、海図家の叡智によって、とり払われました。若い彼女に非がなかったとしても、われわれの子孫に、この競争社会の中、みすみす、名無しの負を担わせることは出来ません。長也の将来に、どのような汚点も引き継がせることは出来ないのであります。長也は、唯一の海図家の後継者です。むごいと内心心痛めておられる方もあるかとは存じますが……。

妙な祝辞がおかしな説得力をもって、わたしを納得させてしまう。

彼が飛び出していく。わたしたちの家まで恥ずかしそうに逃走する。それから、あのバルコニ

―で、アンテナに結んだ遺言を受け取るだろう。
理由を聞きたがる友人たちが、笑いながら四方八方から話し掛け、喜び勇んで話題をひろげる。うわさは赤潮みたいに広がっていく。少なくとも面白がらせるには効果的だ。
弱点に食いついてくる、おびただしい眼よ。もう少し普通でないことに寛大でなければならない。それは、ほんの、形に過ぎないのだから。形などしょせん不要品なんだもの。
わたしは長い電話番号を指先で叩く。十円玉がなく、百円玉を入れている。真っ白な雪で固められたあの家に通じている。
―――わたしは赤池エマです。赤池エマでした……。
不在だ。ベルの音が何時までも続く、続きすぎるから、わたしは、もっともっと身を引いていく。自分の不運と苦痛のほか、何も見えない。

19　洪水

彼ら彼女らが舌の鞭をふるい、わたしの小さな世界をへし曲げている。
―――いいんです、身体の皮を破ってしまわなくても、わたしは誰にも代わることが出来るん

です。もともと、わたしの精神、それ自体には名前がついていたり、戸籍簿があったりしたわけではないんですから……。

左手に旅行鞄を持って逃げる。右手はかって白い包みをしっかり持った名残りに、今も握り締められている。空家を運んで行くような、むなしさでぐずぐずする。振り返る、追って来る彼の姿はない。わたしに骨はなく、わたしの闇に潮の干満のような交替が起こっている。

列車はスピードを加えて進行して行く。瞼が痙攣している。何を告げているの？　何を恐れているの？　何を期待している？　いま網棚から通路に、わたしの旅行鞄が投げ出される。わたしは下車の暗示を受けたように、旅行鞄を抱え込む。

雨が降っている。駅前を軒伝いに移動していき、ゴムの植木のやけに並んだ喫茶店に入る。天井の低い店内では、レジの抽斗がチンと鳴っている。ロックが低く流れる。服や旅行鞄に、雨粒が汗のようについている。雨の滲んだスカートを回転させ、腰を降ろすと、身体中の力が砂時計の砂のように抜けていくのがわかる。朝から何も食べていないのに、食欲が湧いてこない。一杯なのは口惜しさであるらしいのに、わたしは胃袋の中だと勘違いしている。この勘違いが、修正されるまでこうしている。空気は煙草色。何も置いてないテーブルの上をウェイトレスが拭きながら聞く。

――――ご注文は？　何になさいますか。

――――コーヒーを下さい。

焼けているようにざらざらした舌は、今まで出したことのあるどんな音よりも原始的な音を出していて、それが声になっている。ウェイトレスはわたしに後姿をみせる。後姿をわたしの声が追いかける。

———ケーキ、ケーキも下さい。

自分のために飲み込んでしまう。そのかたち、その色、その量、口当たり、カロリーまでわかる、バタークリームがなめらかに、わたしを内側から塗装し直す。新しい塗装の内側から誰かに耳打ちしたい。でも、やはり眉の左端を引き上げてしまう。広場の方から濡れ鼠の子供達が駆け込んできて、店の大きなガラス窓に、顔や、ボールをこすりつける。何時か起こったことであるような……。子供たちは、また追われるように走り出していく。

ジュークボックスの響きは、大きな黒い獣の舌が空一杯に広がりながら、地上すれすれまで垂れ下がり、暗褐色の液を流しつづけていると歌っている。わたしのこめかみに垂れる髪の一房に、電線がとめてあって、いまショートした火が飛ぶようだ。火は恐ろしく速く飛び散っている。

わたしは誰かを待っている。

———大変な雨ですね。

男が言っている。

———スゴーイ、ヒェー、ファー、フェー

多くの叫びがあがる。わたしはその叫びを問題にしたいが、慌てていて、口は、あっ、あっ、

うまく言えない。
――――いい儲け口があるの？
わたしの旅行鞄をみて、後ろから聞く女がいる。
テーブルの上にあるカップから一口分ずつ、わたしと無関係に確かにコーヒーが減っていき、見る間に少なくなってしまう。わたしには飲んだという記憶がない。
紺のブレザーの女が、わたしを振り向いてポカンとする。子供の乱食いの歯のように未熟な隙間があいている。わたしの唇は閉じつづけていて固い皮、開閉も出来ない。コーヒーがまた一口減る。一口も飲まないうちにウェイトレスがカップを持って行こうとする。
――――お客さん、床にこぼれてべとべとですよ。
ウェイトレスは白いモップで床を拭く。床は思いがけないほど多くの汚れをためこんでいて、拭いても拭いても黒インクのような汚れが滲んでくる。この床の下に、真っ暗な夜が一杯つまっていて滲み出てくる。
――――変な縞模様なんかにしないで、白くとろりと磨きなさい。
マスターが後ろから、ウェイトレスに指示する。ジュークボックスはまだ怪獣の舌だ。
――――この店の構造を解いてみる？
隣りの席の女は巨大な乳房を見せびらかすために、故意にかがめたり、身体を伸ばしたりする。
――――黒か白、黒か白……。

姿の見えないものたちが言う。アンテナも受信機も送信機もどこにも転がっている。だから煙のような人物がいつも数限りもなく傍らにいるのだ。わたしは妙に自分と波長の合った聞き方をし、沈黙から放心する。ピアノをひている、何処かで……。

――――なあに？

蒼ざめて肉のついていない顔がいう。

――――何かあったの？

花嫁崩れのわたしの皮下を昆虫が行列をつくって這い上がってくる。

――――いいえ、何にも。

しかし、いまいましさがある、振り返る。この女、顔がひしめいてほの暗く、ゆるやかなウェーブの長い髪を隙間風に靡かせて立っている。雷音が聞こえる。

わたしは蝶結びになって椅子の上に座っている。その女が同じように両膝を抱えて、向かい合て座る。

――――何を食べたかなんて、よく覚えていないわ。とにかく命がけで生きてきたから……、ずっと食べることなど考えまいと思って来たの。

ウェイトレスや男女の客がコマ落しの映画のようにピコピコ動いている。客も一人二人帰る。その度に、あぼろげな光のなか、隕石が降っているような嵐の外がちらちら見える。ドアを開ける者はみんな、怖そうに首を縮めるので、外をいく車のヘッドライトで首をはねられたように見

えてしまう。
　それでもまだ店内の見えないささやきは聞こえつづけている。店の隅にテレビがあるが、何も映っていない。
――――もう少し店を開けていて下さいね。
――――　一人来るはずなんです。
何人かが言っている。わたしも言う。誰かが、ピアノを弾いている、何処かで。
――――　一人来るはずなんです、必ず！
――――あなたは見ていませんでした？　もと歌手だったとかいう太った若い女が、白いふわふわの子供を抱えて、テレビに出ていたのを。何でも、何か万引きしたとかで責められていたのだけど、悪かったとか、反省しているとか、もうしない、なんて言ってる言葉が、とても浮き浮きしていたわ。聞いているわたしも幸福になるくらい！　彼女、そんなこと、ちっとも悪いなんて考えていないんだなあって、わかったのよ。よく考えてみればそんなことで責めたり質問するのはとても滑稽なことですものね。可愛げのある、ささいなことですもの。歌を歌い終わったとき、その女が何故テレビに出たのかわかったわ。告白じゃなくって、テレビで歌わせるという餌に食いついたのね。歌がすきなのよ。嬉しくて仕方なかったのね。だけど抱えていた白いふわふわの子供は、まだ出生届けさえ出してない子供なのよ。
――――わたしも、ピアノを演奏させてくれると言われたら、その餌に飛びつくわ。たとえ、殺

人を告白してでも……。
わたしは前に座っている女をじっと見つめる。
――家出でもなさったの？
女はいう。
――ええ。
わたしは頷いている。
――同棲しても、わたしなら産むことを阻むわ。
その女は髪を掻き揚げる。そして、ちょっと下をみる。ぐっと覗き込んでから顔を上げる。きょとんとした眼。
とても静かだ。何かが震える音がする。金属的な声があがる。
ドアの下から水が流れ込んでくる。余りにも急激だから、人々は、椅子やテーブルの上に立ち上がる。人の乗らない椅子はひとりでに腹立たしげにがたがたテーブルの脚にぶつかる。外で警報のサイレンが鳴っている。
わたしは真上から蛍光に照らされて、椅子の上に立ち、流れ込む水の襞を見ている灯台みたい。ドアは眼に見えない足で蹴飛ばされたように大きく開く。水は更に大量に流れ込んでくる。何人かがテーブルや椅子を伝って、階段に飛び移り二階に避難する。今まで人に動かしてもらわなければ場所を移動しなかった横着なものたちが、自力で浮き立ち素早く渦の輪を描いたりする。コ

ップでさえも、浮き、傾き、無色になって水に溶けてしまう。金魚が、ぴちゃん、ぴちゃんと跳ねまわる。

———ダムの水門が開きっぱなしかなあ？

———まさか海が移動してきたなんてことにはならんでしょうね。海も汚物ばかり流されて、怒り心頭に達していたに違いないよ。

———下水道の陰にこもった恨みが、地上に向かって爆発したのかもしれないな。

———すごい降りだわ、光って、しぶいていたのをご存知なかった？

———これは、あの大雪が融けたのよ。そうに、きまっています！

わたしは確信に満ちて言う。

物が逆立ちをはじめる。片手にスプーンを一本、片手に濡れた旅行鞄を持って、わたしまで椅子もろとも裏返されそうだ。ここは大きな水槽、店全体が黒い箱だ。わたしは椅子から椅子へ、階段まで、運動神経を試されているようにバランスをとりながら飛び移る。

階段を一段ずつ更に水に押されてあがる。天井まで水が一杯になれば、階段が浮き上がってくるだろうか？　密閉されて黒い水槽になった一階を覗き込んで見る。水面は渦や波をつくって、照明に近ずいて来ている。これほどの量が侵入していながら、もう音はない。ないのに浮いているものの気配だけがある。

———眠っていたんだけど……。眠っていたのに……。

二階の何人かがいう。
――あらあら、ほっ、ほっ、ほう。大切なものをまとめなくっちゃ。早く、早く、みなさん早く……。
がっちりドアが閉じる。もう、誰も出て来ない。
店にいた者たちは一人も見当たらない。ねずみの群れのように水のなかへ、集団で投身自殺をしたのでなければ、こんな消え方は夢だ。この上にもう一階あるのかもしれない。または屋根の上に出る道がある。探すが見当らない。ドアの隙間から外を見ると青い光に車がゆっくりと傾き、裏返しにならんばかりに浮いてるのが見える。水位は？　いま階段を何段残す？
一晩が過ぎ、朝がゆっくりと水上を渡ってくる。カタツムリの涎のあとが二階の廊下に続いている。街路樹の木の葉が水に激しく洗われ、ちぎれて流れる。低い家の屋根の上に、人間がかたまっているのが見える。
家と家の間のせまい路地をゴムボートを操って救助員らしい男がくる。わたしは窓から手を振る。除雪隊の男は何処にいったのだろう？　こんなとき力になってくれたら……。
――あんたの家じゃないんだろう、なら、ここにいて最後まで見届けるこたぁないあね。
ボートの男がいう。旅行鞄を引きおろし、わたしも飛び移る。
――平衡がとれなくなるから、勢いよく飛び込んじゃ駄目って言ってるのに……。全く、面倒見きれんなあ。

わたしが飛び移った衝動から平衡を取り戻すまで、ボートのヘリに掴まっていた子供が、顔に降り注ぐしぶきで濡れネズミになって泣き出してしまう。母親はうつろな目で、肩のマッサージをしながらつぶやく。

――――芝生を植えたばかりなのに、まだ根が定着していなかったのよ。何処までいったやら？うちの芝をあなた見ませんでした？

風がきて、すさまじく濁った褐色の渦まく街角で、ボートは一回転する。

――――マンホールに吸い込まれたら、地球の奥へいっちゃうよォ！

子供がわめく。

ゴムボートが横付けされる。コンクリートの桟橋に見えるが、建物の屋上なのかもしれない。窓と思われる付近から、水の中に漂うカーテンのような大きな布が、生き物みたいにボートに触れてくる。コンクリートの上にウナギが数匹。ウナギ屋の桶から逃げ出して、飛び跳ね、跳ね回り一の字になって死んでいる。

桟橋より高い国道だけが水没していない。国道がたわむかと思うほどに、家財道具と家族を積んだ車が並び、人々は腕を組んだり、爪をかんだり顎を擦ったりしながら、水面を見つめている。近くにいる老人は目尻に皺をよせ、涙で白くした眼の縁と唇を小刻みに震わせる。車の警笛が鳴り続けている。

泥で濡れたシートをかけたピアノが道路を遮る。そのことが気になる。

わたしのピアノは何処にいってしまったのだろう？　オレンジ色の服を着た女が、ぼんやり佇んでいるわたしたちを尻目に、シートをとりのけ、ピアノの椅子に掛けてタバコを吸い始め、火のついたまま、ピアノの上におき、ピアノのカギを開け、タバコをとって吸い、またタバコをピアノの上において楽譜を開く。女の手がピアノに触れる。

ピアノコンチェルト……、わたしの指が動く、音を追いかける。わたしのピアノだ！　ピアノが泣きわめく。帰ってくると約束したのに……。こんなところに捨てられているの？　わたしはピアノに向かって走り出している。

水没している道路を、水が曲に乗ってひたひた揺れ、泥のすえた匂いに、少し音程の狂った曲が流れる。ヴァイオリンを持った少年も、ギターを持った青年も、ハーモニカに涎をくっつけた幼女もみんな感染したように演奏し始める。みんな思い思いに別の曲だ。

見ていた人たちも遅ればせながら、自分が楽器だったことに目覚めたように歌い始める。それは何故か国歌で、子供から、若者まで、小石が岩になるという素っ頓狂さを愛して声を合わせている。

――なあ、君が代の君って、みんなのことなんだろう？　こんなところで、国歌を聞くとは思わなかったなあ。でもさ、世界広といえどもさ、歌詞のおかしさでは抜群だよね！　がなりたててしまうから、ちょっとジャズ調にアレンジしてみないか。

――なんだかんだ言わなければ、三本足のヤタノカラスってのも絶品だよなあ。結構おれた

ちの祖先は想像力に恵まれていたのかもなあ。
若い男の子たちが話している。
わたしは、見知らぬところにいて、無宿者の自由を獲得しているのに、ひとり、枠をはめられているような不自由さでピアノに辿りつけない。見回してしまう。こうなっては、どれかの車に乗せてもらわなければ……。でも、きっかけが掴めそうもない。
この不自由さは、わたしが女性であるということの枠かもしれない。それに捕らわれることを避けるが、ゆったゆった水に揺れて光るピンク色の水筒が浮いて、胎児かとどきんとする。
女の腰にスカートが巻きつき、胸にセーターが皮膚のようにはりつき、真上を見る顔は沈んだまま唇の襞を伸縮させながら水をくぐってくる。水の中を誰かの力で押しやられてきたような。きらめき、金色の髪が顔に流れ、どちらが表ともわからず、ぐんなり伸びきって、すぐ下まで来ている。髪の一部が首のくびれにさらに巻きつき、手を延べてくれるのを待っているようにわたしの前で止まる。死体だ！　大気はその底で、ソーダ―水のように泡立ちつづける。
なにものかが、わたしの頭をこづく。
――――誰が、この死体を誰であると決めるんです！　誰が決めたとしても、それは誰でもありません！　反逆の種子は染色体のくさびの上に乗っかって、バトンタッチされるのよ。自分を改造するなんてことは、先祖にさかのぼって改造するってことでしょう。そんなこと出来るわけないのよ。このひとは、わたしです！

わたしは手を延べなければならない、気絶する。気絶して死体を抱くこと、わたしが、わたしの身体に乗っていることを一時的にやめること。

このバスの車輪は、薄い青みどり色のしぶきの幕に覆われているのだろう。或いは天をしぶきで満たしながら走っているのだ。水とぶつかる車の音がますます激しくなる。水が世界の隅々まで満ち溢れ、あらゆる物体を持ち上げ、好き勝手な方向へ移動させようとしている。

雪であったころは、あんなに総てをひとところに押さえつけ、凍りつけていた同じH_2Oがこの車の回りで凄まじく生きて躍動している。この車さえも水の意志で移動させられ、世の果てに追いやられていくようだ。

わたしの捨てた身体は、クタクタ人形のように、手足を腑抜けにして倒れ、耳を平らにし鼻を突き出している。

――同じバスに乗るということは、みんな行き先が同じということで、目的も同じだということですよ。

隣りの男がいう。被災者が避難場所を求めているのなら、そういうことになる。

――いや、建設現場から現場へ作業員を運ぶ車ですよ。

――結局、これが許されるほど無欲だったということ。

――結局、これが許されるほど、貧乏だったということ。

――結局、これを許すほど、欲張りだったということ。

――――　一部分、或いは全部が蒸発者ですよ。住所不定なんです。
――――それなのに、あるとき、社会という吸盤に掴まれて、こんなふうに、隊をなしてバスに乗ったんですよ。
それでも厚い雲から陽がもれ、バスの車体の何箇所かで、薔薇色の光の束が見えてくる。それが航跡のように伸び、なびいたり、まつわりついたりする。バスははじめ、水の中へ中へ、深々ともぐり込んで行きそうに見えていながら、何時の間にか山の手に来て、谷間から避難する親子を二人便乗させる。これが合図だったように白けっぱなしの空気に活気が戻ってくる。立ち消えになっていた話がぽつぽつ始まる。
――――蒸発は自分の意志ですが、自分を盗まれて、所在をなくした間抜けも、中にはまじっていますよ。
コーモリ傘を立てて柄に顎をのせている年配の男がいう。わたしははっとして顔を上げる。こんなところに、わたしに似た人物がいるのだろうか？
――――それは誰のこと？
前の席、小柄で柔軟な輪郭を逆光に融かしている女が振り向く。
――――私は正々堂々ここにいます。ちょっとした前科があるだけよ。嘘でもつかなければ、すっきり、割り切れる世界になどいたためしがないから。断定は、いつだって、包丁に血糊をつけていたのよ。わたしはそれに眼をつぶれなかったわ。

年配の男は足を組み替え、足の甲のむくみを訴え始める。
――二日酔いですよ。足にもお酒が回っているのよ。
小柄な女がいう。
若い男とわたしは身体をぶっつけながら並んでいる。この間、結婚しそこねた女の口は男に執拗な質問を受けているわけでもないのに、告白せざるを得ない気持ちになる。
――どのようにも生きてなんかいないの。名前もないのよ。
――いちいち、口に出す必要はないんだ。みんな同類なんだからさ。
若い男がいう。
このわたしに本当の魅力が感じられるか？　若い男は、ともすると、この身体に横目を流している。それならそうで、もう金銭も孤独も考えまい。男は色あせたデニムの服を着ている。顔をみても目をつむれば、もう何処にもいないたぐいの男だ。
――珍種の人間でしょうか？
わたしは聞く。この足が死んだように、だらりと下がって靴さえ落している。
――そういう人種だったらいるはずですよ、ここに、ひとり。わかるでしょう。信じられますよ。
――そんな答えは、ただ話をあわせるというあれでしょう？　そうじゃなくて？　本当に？
わたしみたいに？

しつっこい言い方をする。
――そう、説明はいらないな。
水と違う地面そのものが身動きをする。わけのわからない形をしたものが、車輪の下で起伏している。地面すれすれの位置にある光が、車にまつわりついていくように感じる。水から突き出ている葉むらが、ちぐはぐに翻るのが見えてくる。水が左側だけになる。揺れ動く波が道路の片側だけを洗っているのだ。
陸の真中で、左側に浜辺を休みなしに繰り広げながら進み、わたしは根から現実性を喪失している。
――わりのいい仕事をしようとおもうな。
――飯場のメシタキ。
――そう、それ。
思いがけない言葉のやりとりをして、その若い男と、わたしの、生きているのに死んでいる心もとなさに輪をかける。
――自分が信じられない場合は、誰かを殺して見るんだなあ。
わたしの口が、その身体のなかで、ゆるゆる揺れる胎児について語っている？　果たして胎児があるのかどうか。わたしはその口に問い詰める。
――ねえ、太陽は忘れずに昇ってくるわね。でも、太陽だって、数え切れないくらいのお年

なんでしょう？　疲れているのよ、期待し過ぎないことね。
車掌の若いトンボ眼鏡の女の子が叫ぶ。
――オー、フィールド、フィールド！
バスは水溜りのある畑に乗り上げ、積み上げた泥と枯草の山を目の前にしている。
――タイム、タイム！
車掌のトンボ眼鏡が言い、作業員の一人が、オーケーのサインをおくる。
――この地方には畑と道を区切るものがないのかね。
――その必要が、今日までなかったんだろうよ。
人々は話している。運転手は再びエンジンを入れようとしてぐずぐずする。今度はスターターのボタンがきかない。エンジンがかからない。もしかしたら、という。背の高い男が、この車には前で回すハンドルがないのかと聞く。
――この車はそんなボロ車じゃない、パワフルでさあ！
運転手は大声をあげる。
全員でバスの前に出て、汚れきったバスの鼻面を押してバックさせることになる。押す者たちの身体が錯綜する。
わたしの手はバスに届かないけれど、努力の重量はたっぷり肩で感じている。押す者の胴と胴がつながり、足と足がつながり、バスはバックしている。バスを押すことも、乗ることと同じで

あるような。どっちでもかまわないような人物たちではある。
住所不定でも、殺人術や強姦術にたけた様子の者もいない。マル秘の人生を生きているというほどの気取りも感じとれない。それほどのことは何もしていない、破壊したこともないのに、新しい建造物を作りあげさせられてしまう。そうなる。
話の通じそうな相手が何人かいそうだと思う。
結局、三叉の道路まで逆戻りする。左にとるべき道を右にとってしまったのだ。

水で土台を洗われながらも、千の火山が相呼応して火を吐くような鉄工場地帯を通り過ぎる。ガソリンスタンドでバスの給油を待っている。水没したブロック塀に、海草みたいなものが絡まっており、手で触ると柔らかく葉を泳がせる。靴をぬいでブロック塀の上を歩いてみる。ソックスが足の裏で納豆のような糸をひく。
水の中バンバーが変に曲がり、ドアのあいている車がある。ぶつかった衝撃や水圧に屈したというよりも、投石によって割れたように見えるガラス。車の凹みも、崩れてきた岩で打ちのめしたという感じだ。幾つかの凹みや傷がまだ生々しい。車窓に新聞紙が絡み付いてひらひらしている。赤池エマ、赤池エマがぐいと、突然、わたしの目に飛び込んでくる、それは、尋ね人欄だ。
――――赤池エマに告ぐ。総て順調、生きる道ついた、早急にお出で乞う。大泥棒……――――
その後が見えない。連絡方法が見つからない。わたしが、あせって、ブロック塀から手を伸ば

すと、バスの男たちが示し合わせたように寄ってきて、背後からわたしを引っ張る。何度でも。尋ね人の発信者は、除雪隊の男に違いない。会わずに来てしまった事で胸が痛む。

――あの新聞をとって下さい！！　あれをとって下さい！！

わたしは叫ぶ。

――無理だな。千切れているじゃないか、後は読めないよ。

男たちはわたしをブロック塀から、がんじがらめにして抱き降ろしてしまう。

――あなたたち、何をしているのか分かっているの？

わたしが観念して水面に向かって立つと、なめしたような河面は穏やかに輝き、いまにも千切れそうな細い足に、ペンダントのように胴がぶらさがっている。

――何をしているの？　助けてよ！　助けてよ！

わたしは若い男に向かって声をあげる。

水面に手を伸ばして水をすくう。水は濁っているのに、すくったものだけは、ばい菌などいそうもないほど澄みきって、手の中で揺すると、なんの化学反応か手のひらの筋が濃い青に変わっていく。もう一台、車が流れに洗われており、水をたっぷり吸い尽くした雑誌が笑みを浮かべて乗っかっている。空気が大きな泡になって、車のガラスの内壁を伝って忍び出るのが見える。なかに空気が溜まっているらしい。車を拾い上げることを相談しながら、わたしを抱き下ろした男達が覗き見している。

バスは高速道路の工事現場についている。
歩きながら一つづつ忘れていたことを想い出す。あの部屋のあの抽斗。ホテルの銀行のATM。わたしはキャッシュカードをはさんで限度額を押してみる。退職金が振り込まれていて、明細書には思ったよりも多い残金が記入されている。死亡しているのに見落されたのか？
わたしは気を好くして、隣りの花屋ですずらんを一鉢買い求める。この匂い！　すずらん畑に顔を埋めた少女の頃！　若さや美しさは早々に逃げていくのだ、もう浮き上がれない。汚れてしまったと思う。何故？　幸運が次々に、わたしを、すり抜けて行くのを見た。でも、その分時間から自由になって、死からも解放されているのかもしれない。

――――車があればな……。
若い男がつぶやく。何故か、除雪隊の男の口笛がすずらんの耳に入って膨れあがる。得意そうな笑い声がはじける。
わたしは慌てて旅行鞄を持ち出し、ダウンコートのポケットを探る。
――――あったあ！
手は高級時計の束を掴み出している。忘れ果てていた除雪隊の男が戻ってくる？　でも、もう遅い、そんな気がする。大泥棒だなんて……冗談でも素敵！！
部屋の中に足跡を印す喜びではしゃいでしまう。疲労の重みを、わたしから分離させたくなる。

わたしとわたしの身体の異和感。身体をとんと、放り出す。
ベッドの上で勘違いしている身体は、両腕を籠のように丸くして、若い男を受け入れ、嫌な音を立てて顔を閉じる。浮き沈みしている身体は小止みない波をたてる。二人は釣り合いを保っていることができない。遺棄感が哀しい。
わたしの周りを白い形をしたものが、絶えず動き回る。愛撫の場面ごとに、一つの顔が現れる。顔を背けるごとにあの男の顔が浮かぶ、窒息する。もう何回も、熱い汗が蒸発することなどないみたいだ。
胎児がいくつか、かたく抱き合うだろう、わたしは憎悪と恐怖に充ち、壁に向かって歩く。

20　白を躍れ

道はくの字に曲がっている。ぴっかぴっかの新車の端に寄って、平目のように見通すと、道の凸部をかすめて、わたしの位置と同じ並びに、曲がって枝先の張り出した松と軒先がかすかに見える。わたしには見えるが、若い男は、街灯や看板や、家の重なりで見えないという。子供が一人、水を頭の上まではねあげながら走ってくる。車の脇で立ち止まる。

――おい、どうした？　何処に行くんだい。忘れた？　忘れたじゃあ困るなあ、名前はなんていうの？　知らないってまさか名なしのごんべえじゃないんだろう？

若い男もこんな表現をするんだ？　男の子の肩を叩く、肩から水しぶきが飛ぶ。何年か後に、こんな子供がわたしの子供で、名無しで住所不定でいる。そのことにぐっとくる。

――泣けるわ。こんな子がいるなんて……。

これから先も、人に問われる度に、ひょっこり一つの名を作り、作ったこと迄忘れながら、何年？　一年？　三年？　五十年も？　わたしは通りの向こうをまた見る。

――見てどうする？

若い男は、なじる。

わたしは、自分に関係のある伝言がそこにあるというように、目が離せないでいる。その気になれば何でも見えてくる。除雪隊の男の、尋ね人さえわたしは捕らえることが出来たのだもの。

――お門違いのところに来たもんだな。

久し振りの陽がまばゆい。若い男の眼の隅っこで光が黒目と重なっている。いらいらしないで、溝におちないように歩いて欲しい。子供がまた水を跳ね上げ、もと来た方へ走っていく。

陽光の河面に粉をふいた細い足が四本、細い青い蛇の巻きついた手で叩かれている。

わたしと若い男は、長田均の家からくる水輪を押し返すように立っている。裏庭へそっと入り込んでいく。若い男は自分の靴の水音を気にして植え込みの影で立ち止まる。

わたしひとり押し進んでいく水輪が、ぴちゃんと陽気な音をたてる。
家のなかに均の母が見える。水のある庭に面した縁側を開けはなち、内部に陽を当てて、水害など気にもしていない。
白やピンク水色の毛糸玉を、籠の中で転がしながら、籐の椅子に掛けて編物をしている。庭に倒れて黄色になった茎に、赤い花がしぼんでいる。均の母の持つ金属のカギ棒が小さな靴下をぶら下げている。……ということは……わたしは慌てて、さらに水輪を大きく広げてしまう。人と人との関係は簡単に入れ変わり立ち変わるのだ。
もの問いたげな均の母の灰色の目が、顔の外へ飛び出している。
――何故、なあぜ、あなたは、ここにいるの？
その母が口に出していうことの、はばかられる名のわたしが、いま、近づいて行くのだ。
――あなた、あなた、あなたは幽霊かしら？
わたしは笑う、軽く、ふわふわとした声で、それでも心の底から笑う。彼の母とその家の奥に向かって話し掛ける。
――ほんとに昨日のことだったみたい。あれから、あっという間に結婚して離婚して、また再婚しました。まるで眠っている間のことでしたわ。生まれて、すぐ死んだみたいに、眠っている間にことがすんだ、そんな出来事でした。
話しながらびっくりする、仰々しく、わたしが語られている。

――赤池エマさん！
彼の母は、ごまかしのない発音で叫ぶ。
――はい！
わたしは返事をする、反射的に打てば響く返事をしている。仮名のわたしに対する恨みを弾き返すみたいに。
――よく来てくれました！
均の母は相好をくずして、いきなり、わたしを抱擁する。わたしの背を撫でまわす。強く抱きしめられて息ができない。わたしに何か言えるはずがないでしょう。彼でもない、彼の母なんかに抱き締められて動けるはずがない。
――さあさ、おあがりなさいな。心配していたのよ。
――随分長い間、友人や知人に逢っていませんでしたの。逢うことを避けて来たんです。わたしを覚えていらっしゃったんですか、はっきりとエマとおっしゃって下さいましたわ。
均の母は、わたしの手を引っ張り上げるようにして握りしめる。
――この手、果たしてすべすべなのか、とげとげなのか、どんなに考えても、思い出せなかったのよ。ピアノを弾いているんでしょう。そう、この手でしたわ。息子と並んで文化祭で連弾したのは……。
わたしの右手だけでなく、左手もつかんでいる。若い男のくれた、わたしのおもちゃの指輪が、

彼女の手のひらに食い込んでいく。気付いているはずだ。わたしは恥じ、まごつき、手を離そうとするが、彼女は握ったままにっこりする。

――お聞きになったのでしょう？　わたしは死にましたの。

わたしは言うが、彼女はわたしの手を握ったまま動く。わたしは進退きわまって悲鳴をあげる。

――これが現世で、あなたがいるはずもなく思えるから、こうして、あなたをしっかり掴んでいたいのよ！　もう、放さない、決して！

彼の母はわたしを連動させていく。

――人間、死んだということが、決定的なことだなんて、わたしは想わないわ。

彼女は言い、紅茶にカステラを添えてすすめる。わたしは手が出せない、彼女は咽もとに手を押しつける。

――死んでいるということは安心できること、あの世にエマさんというお友だちがいると想うだけで……。

わたしはじっと耳をすまし、奥に均の気配を感じて動く。強く握り直され、はっとすると、彼女は真向から、わたしの顔を観察しつづけている。

――息子は、やはりあなたと結婚すべきでしたのよ。あの女はいけませんわ。

誰かがピアノを弾きはじめる。均だろうか？

――息子が戻ったとしても、すっかり人が変わってしまい、あなたがエマさんかどうか、判

断できなくなっているでしょう。わたしは一目でわかりましたけど。
彼女はわたしの両手をつかんだまま、振る。その度に手が短くなる。しっかり握り直す。わたしの手は意志をもたず、指も痩せ細って、骨の上におもちゃの指輪一個飾った小枝なのだ。
――――亡くなったということが、なんでこの世に顔向けできないことなんでしょう。
それは、わたしに助けを求めているようにも、来世に望みをかけているようにも聴き取れる。
――――わたしを連れて行って下さいな、エマさん。わたしはあそこのほか行きどころがないんですのよ。息子は連れていってくれなかった。あの子は、あの子は……。
そのあとはもう、号泣で聞き分けられない。ただわけのわからない泣き声がつづいて、ソファ―に身をもたせたまま眠ったようにひくひくする。死んだような口から、突然唾が飛んでくる。わたしに唾を吐きかけても、唾は彼女の顔に落ちてしまう。
彼女の手からわたしの手は脱け出て、もと道り肌色にふくらみ、若い男のくれた指輪をつけている。わたしの生活力はこんなものよ。でも、何かを包んでしまいそうな所有欲を示して、首を動かす。均がいそうな気がする。
恥ずべき行いを振り返るような自己嫌悪の痛みもきて、どうしていいかわからなくなる。
――――誰もかも、何もかも間違って……。
わたしの方から、恨みも恥じも捨てて均の母の手にすがっていく。
わけのわからない愛情を、彼でなく、その母に注いだことがあったような……。こうしている

脇を赤池エマが、冷ややかな顔で歩き去って行くような気がする。
この部屋に近づいてくる足音は、彼ではなく、彼の父だ。わたしはその母が着物のたもとに入れていた毛糸玉に手足をからまれている。外で若い男のたてる水音が聞こえる。
———あなたの息子さんは、わたしと結婚すべきだったんです。いけない女でしょう、あの女は。法律をかさにきて、あなたの息子だけじゃなく、孫までも独占しようとする女。いけないわ、不遜な女は。……ほんとうに、人間らしい人間って、わたしみたいな娘のことをいうんですよ。
わたしはどさくさに紛れて、臆面もなく言って見る。かまわないわ、彼女は眠っているのよ。均の母は狸寝入りをしていたのか、急に上下のまぶたを押し広げ、目のかすみを、くの字の人さし指で払うと、ふいに涙をふくらませる。目はきらきらし、黄色や、グリーンになる。
———あなた、エマさんが、ほら、この地獄にいるわたしを迎えにきて下さったのよ。
———エマさんか？　まさか？　……生きていたのか？　そんな……。
彼の父はどうやら驚きから脱け出せないでいる。その頭の中でひそひそ話をしているのがわかる。白っぽい毛に蔽われて、両目が動かなくなる。
———ほう！　エマさんか？　なら、いまのうちだ、早く帰りなさい！　さ、また酷い目に会わないうちに帰ることだ。あとはわたしが引き受けるから……。こいつは、芝居っけたっぷりなおかしな役者になり果てて、お話にも何にもならんのですよ。さ、早くお帰りなさい！　あなたが均と結婚できなかったのも、元はといえば、こいつの企みだったんだから。こんなところにい

て、またも、大ボケの餌じきになることはない。早く帰りなさい、いいか、早く帰るんだ！

――――でも……わたし……均さんに……。

――――均？　均はもういない！　この世には、もういないんですよ。この世にはいないんだ！！……あなたの死の知らせを受けた翌日、あの子は死にました。あなたを追って……。恨みを晴らすのなら、それで不足はないでしょう。お帰りなさい！　いくら待っていても均はもう、此処には現れない。早くお帰りなさい。でないと、均のように身動きできなくなる。……あの日、均はあなたの待っている喫茶店に行くはずだったんだ……。こいつにすがられさえしなければ……。

ひとあおぎ、ふたあおぎ、彼の父の団扇になった手のひらであおられて、わたしは毛糸玉と一緒に、均の家から転がり出る。

――――まだ、会っていないのか？　でも、あなたのところへ行くはずですよ。それだけがあの子の望みだったんだから……。

水に浮いた毛糸玉を拾い上げ、毛糸を一本たぐり力を込めて引き千切りながら歩く。あの家で小さな靴下が躍りながら、ひょこひょこ、網目を動かしながら解けていく。

毛糸をちぎり終わって、わたしは両手をぶらさげたまま立ち止まる。

若い男が現れて、わたしと並ぶ。胃のあたりが冷えきって、吐き気がくる。わたしの服が風に泳ぎ身体のなかと靴の中を寒くする。

均が死んだ？　均はもういない？　そんな！　わたしを追って？　そんなこと！　わたしは此処にいるのに……。均をわたしが殺した？　もう浮き上がれない。何時か、彼に会うことが、彼に会えることが、わたしの命を支えていたのに……。

心は深々と沈みこんでいく。

若い男は靴を逆さにして振り、水滴を落し、タバコの自動販売機の前に長い間いて、ずっと前に出ていたらしい一個を取り出している。煙を吐く排水機械のトットットッという音に、全身を揺すり上げられる。若い男は長い間何も言わない。

――――言って欲しいなら、言ってやってもいいんだぜ。そいつは馬鹿だ。両親がいるなんて馬鹿だ。両親を殺さずにいるなんて馬鹿だ。両親に殺されずにいるなんて馬鹿だ！　あの家に足を向けさせた、きみのなかの化け物も馬鹿だ！　この馬鹿たちは、かなり恐ろしい謎だと思う。

自分があの庭に踏み込んで覗き見していたことなど、信じてはいないだろう。

――――磁気嵐のように、メッセージが入り乱れて、捕らえきれなかったから……。

わたしは言い訳をする。均の反応を見たい、それだけのことで、わたしは彼を殺したのだ。

道路の交差点に、「身元不明死体の身元を見つけるための相談所」の看板がかかげられている。いつか見た、真っ青な合成写真の女のポスターが貼ってある。テントのそばのパトカーに新車を摺り寄せて止める。このあたりをさまよう人たちは、みんな死体を求めて、空中を漂うような

眼をしている。わたしたちにしたところで、いま、ぱたりと倒れて息をつめたら、身元不明死体、二丁あがりになる。ところがもうずっと以前にことがすんでいるんです。必要なのはやはり、身元不明死体の身元を見つける相談？

長い間、ふたりで出入りする人たちを眺めている。身元不明そうな人物が二人、身元を百人分も持っていそうな存在のでっかい人物が二人入っていく。中でなにが起こっているかわかる。短い言葉が発せられている。顔と顔を寄せ合う、あの女とわたしが？　冷たい呼吸がテントの中から来て、わたしは動くことができない。頚動脈をひくひくさせて、百十年前の娘が、

――――はい！

と答えて甦っているのかもしれない。その隣りにわたしの名で死んだ、あの女の骨袋が置かれているだろう？　発送人は佐藤みよ子、その名に疑いを持って一人の相談者が、まだよく開ききらない折りたたみ椅子をギイギイ言わせて、あの骨袋すれすれに顔をおいているに違いない。

若い男はまばたきもせず、そちらへの目配りをやめない。彼の方がかえって死者の取り締まりめいている。人々の間に隙間みたいなものがあり、それは水溜りだ。この水溜りに入り込んで、濡れて水を運んでくれる足がなかったら、もう、この水溜りは他の水溜りと出会うことはない。

あの大雪からきた洪水であるとすれば、これくらいで終わるはずがないのだ……。わたしは若い男と繋がって歩き、もう一つの水溜りを足を揃えて跳ぶ。

不動の建物の間を道路は流れて行く。

信号がかわり、車が飛び出すような勢いで発進する。カーブに差し掛かるたびに身体をぶっつけてしまう。カーラジオの声がない。若い男はカーブを一気に吹っ飛ばす。

並木に絨毯や毛布が干され、みんな一つながりの休憩所になっている。異臭が重く濃い。捨てられて腐った畳があちこちで山をつくっている。車は車の間をすりぬけていく。笑わずにはいられない、わたしを死んだと思っている人たちが、あそこで働いている。守衛が軍人みたいに直立し挙手の礼をしている。毎日、朝と昼と夕方、わたしはあそこでピアノを演奏していたのだ。その選曲ときたら、社員の希望で惨憺たるものだった。その磁場から離れることが出来ただけで嬉しい。もうあんなものに捕らえられることなくいる。ただ、ここを通り過ぎるだけだ。飛蚊のように、わたしの頭のまわりをエマがめぐる。まだこの身体から離れられないでいるわたし自身が、エマを吸いつける磁石なのかもしれない。

わたしは中村ゆきこ、新しい人物なのに。陽が傾いて人々は足を引きずった八本足、バックミラーの彼方に飛び去って簡単に過去に位置をかえてしまう。

高速道路に出てスピードをあげる、若い男はさらにスピードをまし、危険を求めながら行くようだ。新車は快調。窓はスピードで幅広の磁気テープ、線が必死で後退していく。

———運転免許証は？

———あるにはあるんだ。

彼は答える。
――誰なの？　運転しているのは？
この男が運転しているに違いないのだけれど、ぶっつければ、ともすると免許証の人物が一人死ぬのかもしれない。
以前のわたしがみんな逃げて行くまで、しっかりと抱いていて欲しい。
――ゆきこ！
新しい名前を若い男が呼ぶと頭がずきんとする。空色のからのバケツが、車の前を転がって道路を横断していく。
――すさまじい音をたてて道路がはがされているじゃないか。あそこ！
彼がいう。糸を張り巡らしている蜘蛛がいるのが見える。彼は毛孔のことごとくから自分を、自分をしいたげそうなものの全部を吸い込んで縮んでいるのだ。
――あなたは余りにも震えすぎる。蜘蛛？　そんなものが、怖いの？
――偶然、呪われたようにあいつらがいたんだ。白い糞しかしたことのない、烏のようなやつらだ。
彼の顔面にチック症状がおきている。
――蜘蛛と烏、それは、わたしの友だち！
――仕事をしてきただけなんだよ、ただ利用されただけなんだ！　利用しただけなんだ。

――――駄目よ！　利用されたりしては……。
――――死んだ頃のことは、もう済んだことだと思って、舞い戻ってきたんだが……。死んでいることは、やばいことだ。
わたしは彼の肩に爪を喰い込ませる。均は何処にいってしまったの？
――――わたしの知っていることは少しだけど、あなたの全部は死者でしょう。死者が怖がっているのではしめしがつかない。死者はスーパーマン、石ころ、鉄、決して殺されない、無敵。それがあなた。見られたのなら、その死体をことんと倒して、死骸を死骸らしく捨てて省みないこともできるし、何度でも、どんなにでもモデルチェンジすることもできる。とりあえず、身体を倒す、身体が車外から見えなくなる。もう、あなたを狙えない。
わたしがハンドルを握っている。道路上、波型模様の水溜りが、カーテンのように開いたり閉じたりする。
――――逃げなければならない！
背後から戦慄がくる。わたしの耳に彼はささやく。
――――ゴミだって、ガラクタだって、誇りを持っているのさ！
そんな言葉で愛撫されながら運転をしていく。要領は心得ている、蒼白な死体でも、震え冷や汗でも流せば、なんとなく血管が潤って赤みが透けてくるのだ。
――――代わろうか？

――いいえ。
わたしはハンドルをしっかり握って離なさない。
――あなたの名で死んだ誰かを、あなたが殺したのだと思われているのね。わたしの場合はそんな疑いさえ、しつっこく追求してくれる人の一人もいない。
わたしはわたしと結び目のない生命の予感をはらんでいる。小さいからと言って無垢とはいえないもの。それは罠に掛かっているかのような、甲高い叫びをあげる。
――あなたは逃げるという。わたしはどちらへ逃げたらいいの？
どうにも逃げられそうもない。前方、まだ雪の融けきれない山肌に、大きな亀裂が入っている。雪をのせ生物のように山がこちらに向かって動いてくる。
――ゴォッゴォー、ゴォッゴーゴー、ゴー、ダダッダ、ダッダダーン！！
雪の水分を存分に吸い込んで、柔らかくなった何十万立方米もの土砂が山ごと崩れ落ちる。
さらに崩れて道路から河へせり出していく。家畜小屋が壊れながら落ちていくのが見える。濁水のあふれる河のなか、見ると馬や牛らしい何匹かが、もがきながら流れに沈み、白い何匹かが鼻を突き出して泳いでいく。泳いでいるのは豚だ。向こう岸に泳ぎ着くのを見届け終わると、若い男がハンドルを握って発進する。
すべての山が崩れ終わったかのように、地上がすぼまり、水蒸気が広がっていく。眼の後ろで運転することはもういらない。海のなかを千日も、こうやって猛スピードで疾走しつづけること、

水の飛沫をいっぱい浴びながら。海じゃないわ、水溜りだわ、霧だわ、砂かもしれない、雪のなかと思ってもいい。

一瞬、瞳が吹き飛んだと思うほど明るい、水と雪のまだら模様の地帯に来ている。

人が走ってくる、こちらの車も走っていくが、双方走っても走っても近づかない。

雪や水に対して人は誰も黒く、男か女か判別できないのだが、わたしには、女だと何となくわかり確信できる。よほど薄い服をまとっているらしく、襞を寄せて、吹き寄せられ、吹き送られていく風にも見える。

場所も時もわきまえない服装で、道や方向や目的、手段を、すべて誤っているらしい女は、狂人のようで、狂人ほどの赤黒さをもたない。無邪気が正気のはめをはずしたような身軽さで、女は漂い流れていくようにも見える。

どういう女なのか見究めようとして、わたしの眼は燃え立ち、熱くなる。

――――あの女は、わたしの内側にいる胎児のように足をとられて転がるのです。ほら、あれを見て！

女は雪のなかで転がっている。

――――僕が帰り場所を失くしているのに、あの男は死んでもこんなところに、拠点を持っているらしい。

――――あれは女よ。

――あれは死ねない男なのだ。僕を死んだのだから……。それを悩んで待ち伏せしている。こんなところでは、自分さえ行方不明に見えてくるんだ。

――あまり、遠くを見ないで、しっかり運転してほしい。スリップ事故など起こさないように。今、青い大気のなかを男が歩いてくる。一途に真っ直ぐに、わたしに向かって歩いてくる。

――均だ！！　長田均！！

均が、祖父の許しを乞いに来る。感じやすい水滴がわたしの産毛の上で身をよじる。わたしが何時、生きようという気になったのか、どうしてもわからない。

空が空気よりも重く、空気が水より重くなっている。車ががたつき、没しそうな陽の欠けらが、小止みなくひくついている。沈んだと思うと、また押し出されたように地平線からつぶれた太陽が現れる。一箇所だけ赤の滲んだ闇。雷の群れが集まってざわめく、雷鳴がする。わたしの身体の中にも、闇に滲んだ赤があり、内と外から示し合わせて脅かしてくる。

道に流れがある。ひろがる雪は丈を低くし、雨や陽にうがたれて海綿のような孔を無数にもっているらしいのに、汚れもせずにある。白、その下、しずくが集まり流れて道に滝をつくる。

どこに向かって急ぐのかわかってくる。

あの家。何時帰る決心をしたのだろう。白のなかへ。

――スピード一つで水溜りくらい飛び越せる。車が空を飛ぶ競技があるじゃない。つまり、あんな風にやればいい。

彼にもわたしにも死はない。
彼はハンドルを抱きこむようにして湖を水溜りだという。
――そうれ！！
男は手を叩き、ハンドルを失い、平衡を失い、車の吐息を聞いたと思う。つぶれた白、麻痺。
――わたしはわたしです！　あなたは？
白い舌が伸びる。一米から何十米も、キスをしたから？　お腹が膨れたから？
――わたしは袋、袋、袋、袋、中に、楽譜が――杯、わたしの子供、憎、憎、生、生、哀、そうっと、響きあうものを待ってみる。
暗い穴、冷たくぬらつく触感が這い上がる。

男たちが群がる。日焼けのためか、充分生きているためか肌が赤黒く光る。盗むような目つきで車のなかを覗き込む。その女は頭を垂れもしないで、むしろ上向き、水の中で汗さえ流し、眼を見開いて唇を動かしている。水のなかでも渇きがあるという表情が不思議だ。死んでいるのに、何時までも男たちの眼をまとわりつかせている。
――どっちがどっちを道ずれにしたの？
――男が運転していた、女は妊娠している。
――どうして、目は並んでいるの？

幼い子供が覗き込む。
男たちが、その女と男の服をあらためている。運転免許証は？　死んだ若い男が誰の免許証を持っていた？　わたしは素早く日焼けの男のひとりに取り憑き、かすかに脳を刺激し、運転免許証を泥の底に突っ込んでしまう。
融けきらない雪の上を雪片のように紋白蝶がひらひら跳ぶ。女は生前よりもゆったり膨らんで丸みを帯び、大きな意志のようにある。むしろひっそりと蒼白く、包み込まれたようにいるのは赤黒いはずの男女たちだ。
泥のように死体が臭う。
――わたしは姿がなく、臆病そうだけれど、ハイエナほどのバイタリティがあるのですから、死体はわたしにまかして下さい。
わたしに旺盛な意欲がある。
わたしが捕り憑いた女が、携帯電話を持つ。期待をもって文字盤を叩く。長い長い電話だ。その女が身を揺すると粉のような声が口から飛ぶ。電話が終わると、わたしはすぐにその女から離れる。電話した女は不思議なシルエットでも見るように、じっと携帯電話をみつめ、しきりに瞬きをし、やがて背筋を寒気に刺されたように震わせる。
わたしは男女の死体と一緒に舟に乗っている。もう誰も乗り込んでは来ない、警察も救急車も

来ない。
わたしはしぼの大きい絹布のような湖面をいく。料亭の見える山際で大勢のひとびとが、何時までも何時までも手を振っているから、手を振って答えたいのだが、その死体の手を振らせることは出来ない。
わたしは、あの歌を歌おうとして、恥ずかしくて口ごもりつづける。
――……あの世に楽しく眠り、アイ　ヒア　ゼア　ゼントル　ヴォイセス、コーリング、オールドブラックジョー……。
祖父が小声から次第に大声に、声だけの世界で歌いつづけているから、わたしはハミングだけで充分だ。
誰かが低音ではもっている、均がわたしの手をとる。こんな曲で踊れるのだろうか？
二人の足もとで、舟は遥かに小さくなっていく。

完